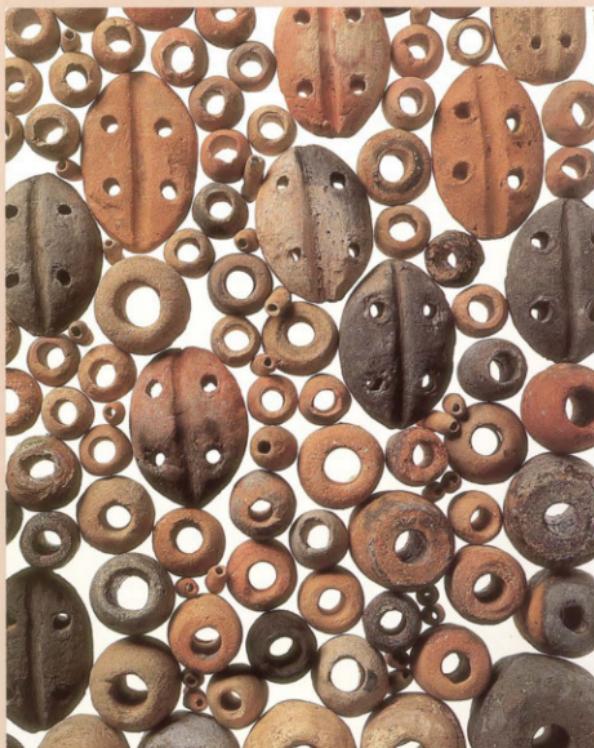


平成13年度
神戸市埋蔵文化財年報



2004
神戸市教育委員会

平成13年度
神戸市埋蔵文化財年報

2004

神戸市教育委員会



fig. 1 白水瓢塚古墳 第9次調査（西区伊川谷町）

古墳時代前期の前方後円墳の前方部墳頂部の埋葬施設の調査を実施している。（本文 109頁）



fig. 2 端谷城 第1次調査（西区樋谷町）

室町時代の鬼瓦が、西の壇と呼ばれる曲輪より出土している。（本文 105頁）



fig. 3 兵庫津遺跡 第26次調査（兵庫区須佐野通）

『元禄兵庫津絵図』にみられる真光寺を巡る濠が確認された。（本文 57頁）

序

阪神・淡路大震災のあの日から9年に及ぶ歳月が過ぎました。山と海が一望できる美しい神戸のまちは復興しつつあります。しかし、内面的な本当の復興はまだまだ歳月が必要と考えられます。

今回報告します平成13年度は、復興事業関連の区画整理事業や住宅供給に伴う発掘調査が引き続き多く行われた年です。調査の結果、大開遺跡、熊内遺跡において弥生時代の環濠が確認され、また兵庫津遺跡においては江戸時代の町屋などが多く見つかりました。

これらの遺跡をはじめ、この概要報告がこの地域に暮らしていた先人の足跡を明らかにすることで、地域の文化財保護や普及の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ、幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました方々、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成16年3月
神戸市教育委員会
教育長 西川 和機

例　　言

1. 本書は神戸市教育委員会が平成13年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議委員会（史跡・考古資料担当）

　　壇上 重光 前神戸女子短期大学教授

　　工業 普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修所長（平成13年度当時）

　　和田 晴吾 立命館大学教授

教育委員会事務局

　　教育長 木村良一

　　社会教育部長 岩畔法夫

　　文化財課長 桑原泰豊

　　社会教育部主幹 渡辺伸行

（指導係長事務取扱）

　　事務担当学芸員 口野博史・西岡誠司

　　橋詰清孝

埋蔵文化財調査係長 丹治康明

文化財主査 宮本郁雄・千種浩

（同（兼務））

事務担当学芸員 斎木巖

調査担当学芸員 西岡巧次・黒田恭正

　　東喜代秀・阿部敬生

　　関野豊・阿部功

　　中村大介・中居さやか

（財）神戸市体育協会

　　会長 笹山幸俊

　　副会長 木村良一

　　同（専務理事事務取扱）鞍本昌男

　　常務理事 鍾井昭武

　　総務課長 前田豊晴

　　総務係長 松田保

　　橋詰清孝 丸山潔・菅本宏明

　　事務担当学芸員 川上厚志

　　調査担当学芸員 谷正俊・山本雅和

　　安田滋・前田佳久

　　須藤宏・富山直人

　　佐伯二郎・山口英正

　　池田毅・内藤俊哉

　　浅谷誠吾・井尻格

　　石島美和・中谷正

　　平田朋子

2. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行の2,500分の1地形図を使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、I. については橋詰、V. については千種・中村が執筆した。編集は中居が行った。

4. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。北区・西区以外については新次数による調査次数表記となっている。

5. 表紙写真は兵庫津遺跡第24次調査出土の土錐（本文129頁）で、裏表紙写真は兵庫津遺跡第26次調査S D01出土の仏像（本文57頁）である。表紙・裏表紙写真及び巻頭写真は丸山が撮影した。

目 次

序

例言

目次

I.	平成13年度 事業の概要	1
	平成13年度 埋蔵文化財発掘調査一覧	8
	平成13年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図	12
II.	平成13年度の復興事業に伴う発掘調査	17
1.	岡本北遺跡 第5次調査	17
2.	住吉宮町遺跡 第35次調査	21
3.	日暮遺跡 第20次調査	27
4.	楠・荒田町遺跡 第30次調査	31
5.	兵庫松本遺跡 第4次調査	34
6.	大開遺跡 第10次調査	47
7.	兵庫津遺跡 第25次調査	53
8.	兵庫津遺跡 第26次調査	57
9.	上沢遺跡 第45次調査	61
10.	御藏遺跡 第49次調査	63
11.	水笠遺跡 第16次調査	65
12.	松野遺跡 第27次調査	67
13.	松野遺跡 第28次調査	69
14.	松野遺跡 第32次調査	75
15.	二葉町遺跡 第15次調査	77
16.	戎町遺跡 第34次調査	85
17.	戎町遺跡 第35次調査	87
18.	行幸町遺跡 第2次調査	92
19.	舞子古墳群 第18次調査	99
20.	端谷城 第1次調査	105
21.	白水瓢塚古墳 第9次調査	109
III.	平成13年度の通常事業に伴う発掘調査	113
1.	西岡本遺跡 第4次調査	113
2.	住吉宮町遺跡 第36次調査	115
3.	郡家遺跡 第70次調査	116
4.	熊内遺跡 第3次調査	119

5. 雲井遺跡 第13次調査	121
6. 大開遺跡 第9次調査	123
7. 兵庫津遺跡 第24次調査	129
8. オキダ古墳群 第2次調査	135
9. 五番町遺跡 第11次調査	137
10. 戎町遺跡 第33次調査	141
11. 白水瓢塚古墳 第8次調査	145
12. 高津橋・岡遺跡 第7次調査	149
13. 今池尻遺跡 第3次調査	153
14. 新方遺跡 第43次調査	154
IV. 平成13年度の大規模試掘調査	157
V. 平成13年度の保存科学調査・作業の概要	161

挿図目次

fig. 1 白水瓢塚古墳第9次調査〔写真〕	卷頭	fig. 21 第1遺構面全景〔写真〕	29
fig. 2 雄谷城第1次調査〔写真〕	卷頭	fig. 22 第2遺構面平面図	30
fig. 3 兵庫津遺跡第26次調査〔写真〕	卷頭	fig. 23 調査位置図 1:2,500	31
fig. 4 企画展『古代のメイソロード』展示風景〔写真〕	2	fig. 24 遺構平面・断面図	32
fig. 5 出張考古学講座〔写真〕	2	fig. 25 S G01	33
fig. 6 こどもたちの考古学講座〔写真〕	3	fig. 26 調査位置図 1:2,500	34
fig. 7 こどもたちの考古学講座〔写真〕	3	fig. 27 第4-1次第3遺構面平面図	35
fig. 8 調査位置図 1:2,500	17	fig. 28 第4-2次第2遺構面平面図	36
fig. 9 第1遺構面平面・断面図	18	fig. 29 S B102〔写真〕	38
fig. 10 第1遺構面全景〔写真〕	19	fig. 30 第4-3次第1遺構面平面図	38
fig. 11 S G01〔写真〕	19	fig. 31 第4-5次遺構平面図	40
fig. 12 S G01出土遺物	20	fig. 32 第4-6次遺構平面図	41
fig. 13 調査位置図 1:2,500	21	fig. 33 第4-7次遺構平面図	42
fig. 14 1号埴平面・立面図	22	fig. 34 第4-8次I区遺構平面図	43
fig. 15 1号埴輪列平面・立面図	23	fig. 35 第4-9次遺構平面図	45
fig. 16 1号埴輪列〔写真〕	23	fig. 36 調査位置図 1:2,500	47
fig. 17 出土遺物	25	fig. 37 調査区西壁土層断面図	48
fig. 18 調査区全景〔写真〕	26	fig. 38 第2遺構面平面図	49
fig. 19 調査位置図 1:2,500	27	fig. 39 第3遺構面平面図	49
fig. 20 第1遺構面平面図	28	fig. 40 第3遺構面全景〔写真〕	50

fig. 41	SK04	51	fig. 79	調査地位置図 1:2,500	85
fig. 42	SK16・SX01	51	fig. 80	遺構平面図	86
fig. 43	調査地位置図 1:2,500	53	fig. 81	調査地位置図 1:2,500	87
fig. 44	遺構平面図	54	fig. 82	第35-1次遺構平面図	88
fig. 45	第4 遺構面全景〔写真〕	55	fig. 83	第35-2次遺構平面図	89
fig. 46	第9 遺構面全景〔写真〕	55	fig. 84	第35-8次遺構平面図	90
fig. 47	調査地位置図 1:2,500	57	fig. 85	調査地位置図 1:2,500	92
fig. 48	第1 遺構面平面図	58	fig. 86	第2-1次遺構平面図	92
fig. 49	SD01〔写真〕	59	fig. 87	第2-1次全景〔写真〕	93
fig. 50	第2 遺構面平面図	60	fig. 88	SD12〔写真〕	93
fig. 51	調査地位置図 1:2,500	61	fig. 89	SD12断面図	94
fig. 52	遺構平面図	62	fig. 90	第2-2次遺構平面図	96
fig. 53	調査地位置図 1:2,500	63	fig. 91	調査地位置図 1:2,500	99
fig. 54	SX101〔写真〕	64	fig. 92	調査区配置図	100
fig. 55	遺構平面図	64	fig. 93	8 tr. 遺構平面図	101
fig. 56	調査地位置図 1:2,500	65	fig. 94	8 tr. 玄室全景〔写真〕	102
fig. 57	遺構平面図	66	fig. 95	調査地位置図 1:2,500	105
fig. 58	調査区北壁土層断面柱状図	66	fig. 96	遺構平面図	106
fig. 59	ピット群〔写真〕	66	fig. 97	二の丸全景〔写真〕	106
fig. 60	調査地位置図 1:2,500	67	fig. 98	塀基底〔写真〕	106
fig. 61	調査区西壁土層断面図	67	fig. 99	調査地位置図 1:2,500	109
fig. 62	遺構平面図	68	fig. 100	調査区配置図	110
fig. 63	出土遺物	68	fig. 101	前方部墳頂部埋葬施設〔写真〕	111
fig. 64	調査地位置図 1:2,500	69	fig. 102	北側くびれ部〔写真〕	112
fig. 65	第28-2次全景〔写真〕	70	fig. 103	前方部北側端〔写真〕	112
fig. 66	第28-3次第2 遺構面平面図	70	fig. 104	調査地位置図 1:2,500	113
fig. 67	第28-3次出土遺物	71	fig. 105	SG01 1期	114
fig. 68	第28-4次第2 遺構面平面図	72	fig. 106	調査区全景〔写真〕	114
fig. 69	第28-4次第2 遺構面〔写真〕	72	fig. 107	SG01 2期〔写真〕	114
fig. 70	第28-4次出土遺物	73	fig. 108	調査地位置図 1:2,500	115
fig. 71	調査地位置図 1:2,500	75	fig. 109	堅穴住居〔写真〕	115
fig. 72	第32-2次遺構平面図	76	fig. 110	調査地位置図 1:2,500	116
fig. 73	調査地位置図 1:2,500	77	fig. 111	調査区西壁土層断面図	117
fig. 74	第15-1次遺構平面図	78	fig. 112	遺構平面図	117
fig. 75	SE01	79	fig. 113	第1・2 遺構面全景〔写真〕	118
fig. 76	SE01〔写真〕	79	fig. 114	水田検出状況〔写真〕	118
fig. 77	第15-2次第1 遺構面平面図	80	fig. 115	調査地位置図 1:2,500	119
fig. 78	第15-2次第1 遺構面全景〔写真〕	81	fig. 116	第1 遺構面全景〔写真〕	120

fig.117	第2遺構面全景〔写真〕	120
fig.118	S D01〔写真〕	120
fig.119	S D05〔写真〕	120
fig.120	調査地位置図 1:2,500	121
fig.121	遺構平面図	122
fig.122	調査区全景〔写真〕	122
fig.123	S D03〔写真〕	122
fig.124	調査地位置図 1:2,500	123
fig.125	第1遺構面平面図	124
fig.126	S T101〔写真〕	125
fig.127	第2遺構面全景〔写真〕	126
fig.128	第3遺構面平面図	127
fig.129	調査地位置図 1:2,500	129
fig.130	遺構平面図	129
fig.131	建物201出土遺物	130
fig.132	第3遺構面平面図	131
fig.133	第4遺構面全景〔写真〕	131
fig.134	第5遺構面平面図	132
fig.135	第5遺構面出土遺物	133
fig.136	第6遺構面平面図	133
fig.137	第6遺構面全景〔写真〕	133
fig.138	第6遺構面全景〔写真〕	133
fig.139	第9遺構面出土遺物	134
fig.140	調査地位置図 1:2,500	135
fig.141	遺構平面図	136
fig.142	調査地位置図 1:2,500	137
fig.143	第1遺構面全景〔写真〕	138
fig.144	第1遺構面平面図	138
fig.145	遺構平面図	139
fig.146	調査地位置図 1:2,500	141
fig.147	遺構平面図	142
fig.148	S K01〔写真〕	143
fig.149	S K01	143
fig.150	調査地位置図 1:2,500	145
fig.151	遺構平面図	146
fig.152	8号円筒館	147
fig.153	調査区全景〔写真〕	148
fig.154	8号円筒館〔写真〕	148
fig.155	調査地位置図 1:2,500	149
fig.156	遺構平面図	150
fig.157	2区全景〔写真〕	150
fig.158	1区全景〔写真〕	150
fig.159	3区溝〔写真〕	151
fig.160	3区溝	151
fig.161	調査区全景〔写真〕	152
fig.162	3区溝出土遺物	152
fig.163	調査地位置図 1:2,500	153
fig.164	第1遺構面全景〔写真〕	153
fig.165	第2遺構面全景〔写真〕	153
fig.166	調査地位置図 1:2,500	154
fig.167	第2遺構面全景〔写真〕	155
fig.168	遺構平面図	155
fig.169	S P121平面・立面図	156
fig.170	S D201〔写真〕	156
fig.171	野瀬北地区試掘地域全体図 1:25,000	158
fig.172	野瀬北地区試掘調査地点 1:10,000	159
fig.173	寺谷地区試掘地域全体図 1:25,000	160
fig.174	寺谷地区試掘調査地点 1:5,000	160
fig.175	熊内遺跡出土鉄鏃〔写真〕	161
fig.176	同左エックス線透過像 (70kVp, 3 mA, 40sec) [写真]	161
fig.177	クリーニング作業〔写真〕	162
fig.178	クリーニング後〔写真〕	162
fig.179	矢柄木質残存状況マクロ写真(2倍)〔写真〕	162
fig.180	二葉町遺跡出土漆器碗〔写真〕	163
fig.181	ガーゼにて養生〔写真〕	163
fig.182	糖アルコール法処理作業〔写真〕	163
fig.183	含浸後クリーニング作業〔写真〕	163
fig.184	行幸町遺跡出土馬齒クリーニング作業〔写真〕	164
fig.185	発泡ウレタン詰替包準備〔写真〕	164
fig.186	保管ケース作製〔写真〕	164
fig.187	完成状況(御蔵遺跡)〔写真〕	164
fig.188	剥ぎ取り用合成樹脂塗布〔写真〕	165
fig.189	ガーゼ裏打ち作業〔写真〕	165
fig.190	剥ぎ取り作業〔写真〕	165
fig.191	剥ぎ取り後状況〔写真〕	165

I. 平成13年度 事業の概要

1. はじめに

平成13年度は阪神・淡路人震災の発生から7年目を迎える。震災復興区画整理事業などの震災復旧事業も軌道に乗り推進されつつある。震災時の埋蔵文化財行政の指針を示した国「基本方針」の適用期間は平成12年度で終了したが、補助事業の適用対象が旧に復し、復旧・復興事業として被災者である個人及び、中小企業が建設する建物についてはこれまでどおり補助事業として採択している。

平成13年度においても新長田駅北地区や御菴地区、松本地区において街区・街路整備が進み、住宅の建設等にかかる発掘調査も遅滞なく進捗した。また、区画整理事業が遅れていた鷹取第二地区、戎町遺跡に関する調査が開始された。

調査作業が遅滞なく、迅速化が求められる中で、労働安全衛生法などの法令に基づく『埋蔵文化財発掘調査における神戸市安全衛生基準』を制定し、9月より施行した。安全班による定期的なパトロールと指導により安全管理を徹底している。

開発指導の面では、平成11年6月より建築確認の事前届出制度における事前届出書の閲覧により、周知の埋蔵文化財包蔵地内の建築行為に対し、文化財保護法に基づく発掘届書の提出及び土木工事についての指導を徹底してきた。更に、4月より神戸市のホームページ『申請ペんり帳』において、埋蔵文化財発掘届出書と試掘調査依頼書についての説明等の情報を配信し、その様式用紙をダウンロードできるようにした。また、『埋蔵文化財の所在の有無について』の様式を定め、開発事業計画の段階で事前に事業者からの相談を受け、依頼に基づき既存の調査データや埋蔵文化財保護にかかる措置、必要な事務手続き等の情報提供を行うことにより、適正かつ円滑な埋蔵文化財保護行政を図るための体制を整えた。

保護・保存の面では、調査によって蓄積された大量の出土品の取扱いについて4月より『神戸市における出土品の取扱い基準』を制定した。これは国の『出土品の取扱いについて』の通知及び兵庫県の『兵庫県における出土品の取扱い基準』の施行を受け、神戸市内の出土品の適切な取扱いについて必要な事項を定めたものである。これとともに、出土品を適正に広く公開し、活用するための『所蔵資料の貸出し基準』を制定した。

また、西区櫛谷町（端谷城址）や北区淡河町（淡河城址）では、地域に存在する文化財を活用した里づくり計画が策定され、住民とボランティア、行政による環境保全などの協働作業をおこなった。文化財課では、城址の確認調査や保存・活用の情報提供を地域住民におこなった。今年度は、端谷城址の二の丸を中心とした確認調査を実施した。今後も地域おこしやまちづくりを目的とした埋蔵文化財保護に力を入れていきたいと考えている。

2. 普及啓発

〔埋蔵文化財センター〕

出土資料の整理・収蔵・保存・公開の拠点である神戸市埋蔵文化財センターでは、常設展示室のほか収蔵展示室・遺物整理室の一部を公開している。また、企画展示や速報展示などを実施し、発掘調査の成果を公開している。

企画展示

本年度は、春の企画展示として『昔むかしのたべものは?』、夏の企画展示として『古代山陽道沿線物語』の2回の企画展を開催した。『昔むかしのたべものは?』展では、昔

の人たちが何を食べていたのか、それらを手に入れるための道具や技術がどのように変化したのかを遺跡から出土した遺物を中心に紹介した。

『古代のメインロードー古代山陽道沿線物語ー』展では、神戸市内の官衙推定遺跡を紹介し、都から大宰府までの山陽道沿線に営まれた遺跡から発見された考古資料を中心に紹介し、古代の交通事情についての展示をおこなった。期間中の7月21日には滋賀県立大学教授高橋美久二氏の講演会『古代の山陽道と芦屋駅屋』を開催し、140名の聴講者があった。

展示会名称	開催期間	入館者数
『昔むかしのたべものは?』	平成13年4月21日～6月3日	9,484名
『古代のメインロードー古代山陽道沿線物語ー』	平成13年7月20日～9月2日	2,436名

学校展示 遺跡から出土した資料を子供たちが直接目で見て触れながら、地域の歴史や文化を学ぶことを目的に、社会科教育の一環として平成10年度より市内小学校で展示会を開催している。展示は主に学校区内の埋蔵文化財の展示を行い、学芸員による展示開設も行っている。今年度は3校、5回の展示を実施した。

館外展示 地域の身近な遺跡を紹介し、地域の歴史について理解を深めてもらうため、地域の施設を利用し展示会を開催した。今回は、長田区役所震災資料室において長田区の震災資料とともに、復興事業関連の発掘調査成果について区民対象の展示を行った。

学校展示			
展示会名称	開催期間	開催場所	見学者数
大開遺跡を発掘する	5／7～6／2	兵庫大開小学校	120名
やよいじだいの須磨	6／11～7／13	若宮小学校	70名
会下山小学校のまわりの遺跡	9／20～12／17	会下山小学校	60名
その後の大開遺跡	9／20～12／17	兵庫大開小学校	120名
古墳時代の須磨	10／22～11／22	若宮小学校	70名
館外展示			
展示会名称	開催期間	開催場所	見学者数
長田区の遺跡	11／13～11／16	長田区役所震災資料室	500名



fig. 4 企画展『古代のメインロード』展示風景



fig. 5 出張考古学講座（ドングリクッキーづくり）

考古学講座 『こどもたちの考古学講座』は学校の休日の催しとして、体験学習を通じて、先人の生活や技術を学び、歴史に興味を抱いてもらうという趣旨で、小学校高学年から高校生までを対象に開催した。その内容は、下記の表のとおりである。

こどもたちの考古学講座				
講 座 名	開催日	内 容	参 加 者	
体験発掘調査	5／26	発掘調査中の丸塚遺跡で実際の発掘調査を体験する。	94名	
石包丁をつくろう	7／14	滋賀県産高島石で石包丁などの磨製石器を作る。	92名	
勾玉づくりに挑戦	8／4	印材で勾玉などの古代のアクセサリーをつくる。	212名	
土器・埴輪をつくろう	8／25	自然乾燥で硬化する粘土で土器や埴輪をつくる。	119名	
縄文の葉っぱをさがす	9／22	縄文時代中期の土壤から木葉を見つけ出し、フィルムに封入して、その種類を調べ縄文の森を復元。	20名	
縄文クッキーをつくろう	12／11	ドングリ（シイの実）を粉にしてクッキーを焼く。	36名	
合 計			573名	
親子で『赤米作りに挑戦しよう』				
講 座 名	開催日	内 容	参 加 者	
貫頭衣を着て田植えに挑戦	6／9	神出自然教育園の水田において、古代米である赤米を田植えから収穫までを体験する。	60名	
がんばって草取りをしよう	7／28		38名	
石包丁で収穫に挑戦	10／27		50名	
合 計			148名	
体験考古学講座				
講 座 名	開催日	内 容	参 加 者	
土器・埴輪をつくる（形成）	11／17	粘土で土器を成形し、乾燥させる。	2名	
土器・埴輪をつくる（焼成）	12／1	乾燥させた土器を野焼きによって焼成する。	2名	
勾玉をつくる	2／23	印材の青田石や寿山石で勾玉をつくる。	20名	
合 計			24名	
考古学講座・総合計			745名	



fig. 6 こどもたちの考古学講座（体験発掘調査）



fig. 7 こどもたちの考古学講座（赤米作りに挑戦しよう）

出張考古学講座

講 座 名	開催日	学 校 名	受講者数
勾玉・貫頭衣づくり	5／7	鶴甲小学校	75名
勾玉づくり	5／9	本山第三小学校	96名
勾玉づくり	5／14	六甲小学校	48名
勾玉・貫頭衣づくり	5／17	桂木小学校	116名
ドングリクリッキーブル	5／22	鶴越小学校	33名
土器づくり	5／24	小部小学校	104名
勾玉づくり	5／29	霞ヶ丘小学校	201名
勾玉・貫頭衣づくり	6／8	福住小学校	55名
勾玉づくり	6／21	垂水小学校	38名
土器づくり	6／29	狩場台小学校	88名
貫頭衣づくり	7／12	本山第二小学校	169名
土器づくり	12／18	太山寺小学校	13名
ドングリクリッキーブル	1／18	太山寺小学校	28名
合 計			1,064名

〔文化財保護強調週間の催し〕

文化財保護強調週間の催しとして、大歳山遺跡公園において11月3日と4日の2日間『大歳山まつり』を開催した。垂水区と連携し、地域に残る文化財を活用し、日常の中に活かすことを地域の人々と考える試みとして、復元された竪穴住居の内部を公開するとともに、古代人の生活の一部を体験できるような催しを行った。古代人の生活体験では、舞錐による火起こしや杵・臼による米の脱穀、古代米の試食、機織り、古代衣装試着など行った。2日間の参加者は、600人であった。

〔発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供〕

発掘調査及び出土遺物の整理において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地調査期間中であって安全管理上可能であれば現地説明会を開催している。また、要望があれば地域住民対象の説明会も開催している。本年度は、2件の現地説明会を開催した。

遺跡の公開

遺 跡 名	開 催 日	内 容	見学者数
住吉宮町遺跡	平成13年5月1・2日	葺石を持つ方墳	270名
熊内遺跡	平成13年7月17日	弥生時代後期の環濠集落	384名
端谷城址	平成14年3月19日	残存状況が良好な城郭址	30名

記者発表と現地説明会				
遺跡名	発表日	内容	現地説明会開催日	見学者数
西求女塚古墳	平成13年5月17日	撥形後方部をした最古級の古墳	平成13年5月17日	450名
兵庫津遺跡	平成13年5月31日	まちかど・ぎやらりいのオープン	6月4日より開館	
兵庫津遺跡	平成14年1月11日	真光寺旧境内の発見	平成14年1月11日	35名

〔資料の貸出〕

4月より制定した『所蔵資料の貸出し基準』に基づき平成13年度に各機関に貸し出した資料は、写真22件33点、出土遺物（レプリカ・土層転写資料を含む）4件42点である。

〔刊行物〕

平成12年度の刊行物は以下の9点である。

- | | | |
|--------------------------------------|-------------|-----------|
| (1) 平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報 | 平成14年3月 発行 | 額価 2,000円 |
| (2) 沢の鶴大石蔵 発掘調査報告書 | 平成13年11月 発行 | 額価 1,000円 |
| (3) 日輪寺遺跡発掘調査報告書 第4次～第7次調査 | 平成14年1月 発行 | 額価 2,500円 |
| (4) 深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書 | 平成14年3月 発行 | 額価 1,600円 |
| (5) 野瀬遺跡 | 平成14年3月 発行 | 非売品 |
| (6) 淡河木津遺跡第1次・第2次発掘調査報告書 | 平成14年3月 発行 | 非売品 |
| (7) 昔むかしのたべものは 〈企画展図録〉 | 平成13年4月 発行 | 額価 500円 |
| (8) 古代のメインロード
—古代山陽道沿線物語— 〈企画展図録〉 | 平成13年7月 発行 | 額価 600円 |
| (9) 神戸市埋蔵文化財分布図 | 平成14年3月 発行 | 額価 800円 |

3. 文化財保護 平成9年度に制定された『神戸市文化財の保護及び文化財等を取り巻く文化環境の保全に関する条例』に基づき、平成13年7月31日に第9回文化財保護審議会が開催され指定文化財・登録文化財・地域文化財の指定・登録・認定について諮問をおこなった。平成14年2月7日の第10回文化財審議会において諮問に対する答申を受けた。この答申に基づき12件の文化財指定・登録・認定をおこなった。そのうち、埋蔵文化財に關係するものとして以下の2件が指定された。

神戸市指定有形文化財（考古資料）

- ・本山遺跡出土弥生時代前期木製品等 総数24点

木製品22点：鍼5点、鍼未製品4点、鏃未製品2点、泥除未製品3点

斧柄3点、斧柄未製品3点、杓子1点、臼未製品1点

編み物2点

- ・新方遺跡（野手・西方地点）出土人骨 6体

- 4. 開発指導** 平成13年度の文化財保護法に基づく届出・通知についての件数は別表のとおりである。平成11年度より開始された『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』に基づく事前届出制度における事前届出書の閲覧により、発掘届の提出及び土木工事についての指導を徹底してきた。以来、届出・通知件数は増加の傾向にあったが、今年度においては前年度比約18%（123件）の減少となった。神戸市内における建築確認申請の申請件数の減少に連動するような減少をみせている。なお、開発行為事前審査各種申請は、19件の減少、試掘調査件数は、34件の減少となっている。
- また、昨年度より運用された埋蔵文化財届出事務等に関する地図情報システムに過去の試掘調査や発掘調査のデータや届出・通知等の埋蔵文化財の取扱い状況のデータを増補することにより、届出・通知・各種開発申請に対し迅速かつ正確な回答を行った。
- 5. 調査事業** 平成13年度の発掘調査事業は、民間事業関連のすべて・公共事業関連の調査の一部及び補助事業の大部分については教育委員会の直営で実施し、公共事業関連の調査の大部分と補助事業の一一部を（財）神戸市体育協会に委託して実施した。
- 本市では便宜上、阪神・淡路大震災に起因する復旧・復興事業関連調査とそれに起因しない通常事業関連調査を区別し処理している。全体の調査件数及び発掘調査面積は別表のとおりである。平成12年度と比較すると調査件数は、31件（約3割）減少し、調査面積は約4割減少している。
- 調査面積を個別に見ると、100m²以下のものが、全体の約4割を占めており、500m²以下のものが全体の約8割を占めており、前年度とほぼ同じく小規模な発掘調査が主になっている傾向にある。今年度に発掘調査に要した総費用は819百万円である。
- 復興事業** 復興事業に伴う調査は51件で、調査事業の6割を占めている。その内訳は、個人及び中小企業事業者による国庫補助事業は33件で、大企業及び公共の事業者の経費負担による受託事業は18件である。
- 国庫補助事業は138,685千円で、内訳は事前調査である試掘・確認調査が15,773千円、個人住宅及び中小企業の発掘調査が73,579千円、その他の調査34,998千円、整理・報告書の作成等は14,335千円である。
- 6. 主な調査** 平成13年度の主な調査成果を時代順にまとめる。
- 熊内遺跡では、縄文時代早期前半の竪穴住居が検出された。弥生時代後期の遺構面では、竪穴住居や掘立柱建物を中心とした集落を囲む二重の環濠が確認され、同時期においては西日本では珍しく貴重な資料となった。西求女塚古墳の確認調査は、まちづくりの一環として、古墳公園の整備の要望を受けて実施してきたものであるが、震災復興事業を優先するために調査を一時中断していたが、平成12年度末から再開した。その結果、前方部の形状が古墳出現期の最古級の古墳と同型式の撥形であることが明らかとなった。古墳の墳形、規模、構造などについての資料を得ることができ、国の史跡指定の申請を念頭におく同古墳にとって、古墳整備計画の策定に重要な資料を得ることとなった。兵庫沖遺跡では、真光寺の北東角の濠が発見された。濠の北側には道路・河道が発見され『元禄兵庫津絵図』に描かれたとおりに遺構が検出された。同絵図の正確性が立証されたとともに、兵庫津全体の復元に貴重な資料を得た。

文化財保護法に基づく届出・通知、試掘依頼等

発掘調査、整理作業件数一覧

No.	内 容	件 数
1	発見、発掘届・通知	690件
i	調査のための発掘届(57条第1項)	1件
	民間事業に伴う発掘届(57-2)	636件
	通常事業関連	520件
	復興事業関連	146件
ii	公共事業に伴う発掘通知(57-2)	53件
	通常事業関連	42件
	復興事業関連	11件
iii	発見届・発見通知(57-5・6)	0件
2	発掘調査の報告(保護法58条2)	71件
3	開発行為事前審査等各種申請	130件
4	試掘調査(依頼件数)	295件
i	通常事業関連	245件
	通常公共関連	56件
	通常民間関連	189件
ii	復興事業関連	50件
	復興公共関連	10件
	復興民間関連	40件
5	工 事 立 会	50件

No.	内 容	件 数
1	発掘調査(大規模確認調査も含む)	85件
i	公共事業に伴う発掘調査	28件
	通常事業関連	10件
	復興事業関連	18件
ii	民間事業に伴う発掘調査	51件
	通常事業関連	18件
	復興事業関連	33件
iii	開場整備事業に伴う発掘調査	6件
2	整理作業(復興調査整理作業を含む)	2件

発掘調査面積(単位: m²)

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	6,937	6,924	13,861	24,273
復興事業	11,167	3,177	14,344	29,313
計	18,104	10,101	28,205	53,586

発掘調査面積別件数

調査面積	件 数	調査面積	件 数
~ 100m ²	35	1,001 ~ 2,000m ²	2
101 ~ 300m ²	32	2,001 ~ 5,000m ²	3
301 ~ 500m ²	4	5,001m ² 以上	0
501 ~ 1,000m ²	9	合 計	85

平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（1）

No.	調査名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延面積削除	調査形態	調査内容	調査原因
1	岡本北通路第4次調査 1回目	東灘区西岡本4丁目	神戸市教育委員会	中谷 正	36af 36af	13.04.18～15.01.20 古墳時代中期の壺穴住居、土坑 中世の土坑、ピット		個人住宅 (因縁補助事業)
2	岡本北通路第5次調査 1回目	東灘区岡本9丁目	神戸市教育委員会	佐藤 宏	60af 90af	13.06.13～13.07.19 弥生時代中期の壺穴、土器溝まり 平安時代～律令時代の壺穴状遺構とその境 中世の柱、柱穴、土坑、牛頭跡		個人住宅 (因縁補助事業)
3	住吉宮周辺第35次調査 1回目	東灘区住吉本町1丁目	神戸市教育委員会	阿部 敬生	170af 190af	13.04.02～13.05.21 前年度から継続 古墳1基(覆石・埴輪跡) 平安時代～中世の土坑、ピット		個人住宅 (因縁補助事業)
4	邵家通路第9次調査	灘東区邵家町 影1330-2,1361-8,1361-9	神戸市教育委員会	東 高代秀	90af 90af	14.03.18～14.03.26 中世の段落ち、須恵器、土器壺類、羽釜		接骨院書(個人住宅 (因縁補助事業))
5	邵家通路第18次調査	灘東区邵家町4丁目	神戸市教育委員会	阿部 敬	57.8af 57.8af	13.06.14～13.06.21 弥生時代の遺物暨古墳		個人住宅 (因縁補助事業)
6	西水女郎古墳第12次調査 1回目	神戸市垂水区西水3丁目	神戸市教育委員会	内藤 俊哉	280af 280af	13.04.01～15.07.13 南方部塗瓦施部、段落ち、テラス部 前年度から継続		新規塗瓦 (因縁補助事業)
7	口戸通路第20次調査	中央区栗島通1丁目	神戸市教育委員会	西岡 幸次	121af 242af	13.08.27～13.10.11 弥生時代後期～古墳時代初期の壺穴住居 律令時代～中世の壺穴状遺構		共同住宅 (因縁補助事業)
8	兵庫通路第10次調査	兵庫区下津町通60-3	神戸市教育委員会	阿部 敬	40af 80af	14.01.22～14.02.01 弥生時代後期のピット 小窓のピット		店舗・工場付随宅 (因縁補助事業)
9	福・荒田町通跡第30次 調査	兵庫区荒田町3丁目	神戸市教育委員会	阿部 敬	86af 86af	13.09.04～13.09.28 弥生時代中期のピット 6世紀前半の壺穴住居2種(1つ1枚はカマド)、 窓井状構造物、土坑、ピット		個人住宅 (因縁補助事業)
10	兵庫松本通路第4次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	山本・内藤・ 山口・佐藤・ 中谷	925af 1,575af	13.06.16～14.03.13 弥生時代初期の土坑 平安時代～大和時代前期初頭の壺穴住居、独立柱建物 平安時代後期の壺穴		区画整理事業
11	兵庫松本通路第5次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	栗・中谷	22af 22af	13.09.10～13.09.13 弥生時代前の迷ら込み		個人住宅 (因縁補助事業)
12	兵庫松本通路第6次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	東 高代秀	46af 46af	13.09.17～13.09.20 弥生時代初期の迷ら込み		個人住宅 (因縁補助事業)
13	兵庫松本通路第7次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	中谷 正	35af 35af	14.01.07～14.01.17 弥生時代末～古墳時代前期初期の独立柱建物、土坑、 窓井状構造物		個人住宅 (因縁補助事業)
14	兵庫松本通路第8次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	山口 英江	80af 240af	14.02.20～14.03.13 弥生時代後期～平安時代前期初期の土坑、 平安時代中期の土坑、窓		個人住宅 (因縁補助事業)
15	兵庫松本通路第9次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	山口 英江	40af 40af	14.03.12～14.03.25 弥生時代初期の土坑、 平安時代後期の壺穴住居、土坑、ピット		個人住宅 (因縁補助事業)
16	兵庫松本通路第10次調 査	兵庫区松本通2丁目	神戸市体育協会	内藤 俊哉	70af 70af	14.03.12～11.03.26 弥生時代初期の土坑、 古墳時代の溝、ピット、土器壺類		事務所建設 (因縁補助事業)
17	人施跡第10次調査	兵庫区大河内通3丁目	神戸市教育委員会	佐藤 宏	170af	13.08.02～13.10.09 弥生時代初期の土坑、 平安時代後期～中世の獨立柱建物、土坑		共同住宅 (因縁補助事業)
18	兵庫岸通跡第35次調査	兵庫区兵庫町1丁目	神戸市教育委員会	東 高代秀	175af 1,575af	13.11.12～14.02.04 17世紀後半～19世紀の遺構を2面露出 建物、井戸、窓		共同住宅 (因縁補助事業)
19	兵庫岸通跡第36次調査	兵庫区沿岸野町1丁目	神戸市教育委員会	阿部 敬生 阿部 敬	745af 1,190af	13.11.27～14.02.04 近世後期、中世の遺構を2面露出 『兵庫岸通跡絵図』記載の真毛寺を巡る壁		共同住宅 (因縁補助事業)
20	上沢通跡第45次調査	兵庫区上沢通8丁目	神戸市教育委員会	佐伯 二郎	110af 330af	13.07.24～13.08.31 弥生時代後期の土坑、窓 平安時代後期から奈良・平安時代土坑、溝、ピット 中世の迷ら込み		個人住宅 (因縁補助事業)
21	御園通跡第44次調査	長田区御園通6丁目	神戸市体育協会	富山 重人 井尻 栄	276af 384af	13.05.16～13.12.21 奈良・平安時代の溝、ピット、方戸 弥生時代末～古墳時代前期初頭の水槽		区画整理事業
22	御園通跡第45次調査	長田区御園通5丁目	神戸市体育協会	高山 由人	50af 200af	13.06.11～13.06.20 弥生時代末～古墳時代前期初頭以後の水槽		個人住宅 (因縁補助事業)

平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（2）

23	街路遺跡第1次調査	反町区御藏通3丁目	神戸市教育委員会	井尻 格	26af	13. 10. 18～13. 10. 23	弥生時代後期～古墳時代初期の水田	公園整備
					26af			
24	園道遺跡第4次調査	長田区御藏通6丁目	神戸市体育協会	井尻 格	40af	13. 11. 27～13. 12. 07	弥生時代後期～古墳時代初期の溝ち込み	個人住宅 〔園道補助事業〕
					40af			
25	御藏遺跡第49次調査	長田区御藏通5丁目	神戸市体育協会	内藤 敏哉	210af	13. 12. 05～14. 01. 08	弥生時代末～古墳時代初期の土器底より食糞。平安時代の廐柱付建物	歩道 〔園道補助事業〕
					210af			
26	水笠遺跡16次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	池田 裕	235af	13. 06. 28～13. 12. 05	平安時代の溝	区间整備事業
					675af			
27	水笠遺跡17次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	池田 裕	50af	13. 07. 29～13. 08. 01	濃文時代後期～弥生時代初期の流路 (平成14年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					100af			
28	水笠遺跡18次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	池田 裕	50af	13. 06. 02～13. 06. 09	時期不明のビット (平成15年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					50af			
29	水笠遺跡19次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	山口 美正	160af	13. 10. 30～13. 11. 06	弥生時代後期の可能性がある溝 (平成14年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					160af			
30	水笠遺跡20次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	山口 美正	40af	13. 11. 06～13. 11. 12	時期不明のビット (平成14年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					40af			
31	水笠遺跡21次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	山口 美正	100af	13. 11. 15～13. 11. 22	時期不明の溝 (平成14年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					100af			
32	松野遺跡第6次調査	長田区名松町7丁目	神戸市教育委員会	須藤 宏	200af	13. 04. 09～13. 04. 27	平安時代の井戸、溝ち込み (平成14年度報告書刊行済)	区间整備事業
					400af			
33	松野遺跡第27次調査	長田区口吉町3丁目	神戸市教育委員会	佐伯 一郎	40af	13. 01. 09～13. 04. 13	古墳時代中期～後期前半の溝、ビット、溝ち込み (平成15年度報告書刊行済)	社屋建設 〔園道補助事業〕
					40af			
34	松野遺跡第28次調査	長田区松野通4丁目	神戸市教育委員会	井尻・池田 順彌	300af	13. 06. 22～14. 01. 29	濃文時代後期～象潟の流路 古墳時代後期の溝 古墳時代後期の整穴住居	区间整備事業
					90af			
35	松野遺跡第29次調査	長田区松野通4丁目	神戸市体育協会	井尻 格	60af	13. 06. 22～13. 07. 02	弥生時代後期の土坑 (平成15年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					60af			
36	松野遺跡第30次調査	長田区松野通4丁目	神戸市体育協会	井尻 格	60af	13. 08. 20～13. 08. 29	弥生時代のビット (平成14年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					120af			
37	松野遺跡第31次調査	長田区松野通4丁目	神戸市体育協会	須藤 宏	40af	13. 12. 04～13. 12. 27	時期不明の埋立柱建物、溝 (平成14年度報告書刊行済)	個人住宅 〔園道補助事業〕
					120af			
38	松野遺跡第32次調査	長田区名松町1丁目	神戸市体育協会	井尻 格	200af	14. 01. 22～14. 02. 26	弥生時代中期～後期の溝 (平成15年度報告書刊行済)	区间整備事業
					205af			
39	二浦遺跡第15次調査	長田区久保町5丁目	神戸市体育協会	船出 聰 石崎 一二和	1,030af	13. 04. 09～13. 05. 31 13. 07. 26～13. 09. 03	平安時代後半～鎌倉時代の溝 奈良朝御内閣免 奈良朝御内閣免	社屋再建 〔園道補助事業〕
					1,530af			
40	戎町遺跡第34次調査	須磨区大田町2丁目	神戸市教育委員会	河原 功 井尻 格	45af	13. 07. 05～13. 07. 23	弥生時代中期の環状住居	社屋再建 〔園道補助事業〕
					45af			
41	戎町遺跡第35次調査	須磨区寺町1・2丁目	神戸市教育委員会	東山・池田 山里	682af	13. 08. 09～14. 01. 17	弥生時代中期の整穴住居、土坑、溝 古墳時代後期の整穴住居	区间整備事業
					682af			
42	戎町遺跡第36次調査	須磨区寺町2丁目	神戸市体育協会	井尻 格	18af	13. 11. 09～13. 11. 15	弥生時代中期の溝	個人住宅 〔園道補助事業〕
					18af			
43	行幸町遺跡第2次調査	須磨区行幸町3丁目	神戸市体育協会	谷 正茂 佐伯 一郎	1,268af	13. 06. 04～13. 07. 10 13. 10. 11～14. 02. 21	飛鳥～奈良時代の人馬 中世の品、井戸 1,268af	沿岸建設 〔園道補助事業〕
					1,268af			
44	舞子古墳群第18次調査	舞子区舞子坂2丁目	神戸市教育委員会	荒野 会	140af	14. 02. 18～14. 03. 20	摩利麻部、前方後円墳と確認	認証対象 〔園道補助事業〕
					140af			
45	舞子古墳群第19次調査	舞子区舞子坂2丁目	神戸市教育委員会	東 寛代美 阿部 碩生	15af	14. 03. 12～14. 03. 26	転落石の撤去、削壁の保護	〔園道補助事業〕
					15af			

平成13年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（3）

46	船谷城第1次調査 西区櫛石町等々 北谷	神戸市教育委員会	西岡 巧次 250m ² 250m ²	14.02.19～14.03.27 13.08.21～13.08.30 265m ² 265m ²	二の丸の堀立建物、曲塙の櫛石建物 堀輪内廻宅4基	[国連援助事業]
47	白水瓢屋古墳第7次調査 西区伊川谷町御 所シンド山	神戸市教育委員会	山本 拓和 279m ²	13.08.21～13.08.30 279m ²	墳輪内廻宅4基	[国連援助事業] [国連援助事業]
48	白水瓢屋古墳第9次調 査 西区伊川谷町御 所シンド山	神戸市教育委員会	安田 達 279m ² 279m ²	14.02.04～14.03.31 13.08.22～13.07.19	前方部埋葬施設（楠竹形木棺）、後円部埋葬施設（竹状骨隨物） 先代生代後期後半～古墳時代前期・中期、 中世の堀立建物	[国連援助事業] [国連援助事業]
49	九坂塙跡第8次調査 西区九坂1丁目	神戸市教育委員会	西岡 巧次 400m ² 400m ²	13.05.22～13.07.19	先代生代後期後半～古墳時代前期・中期、 中世の堀立建物	[国連援助事業] [国連援助事業]

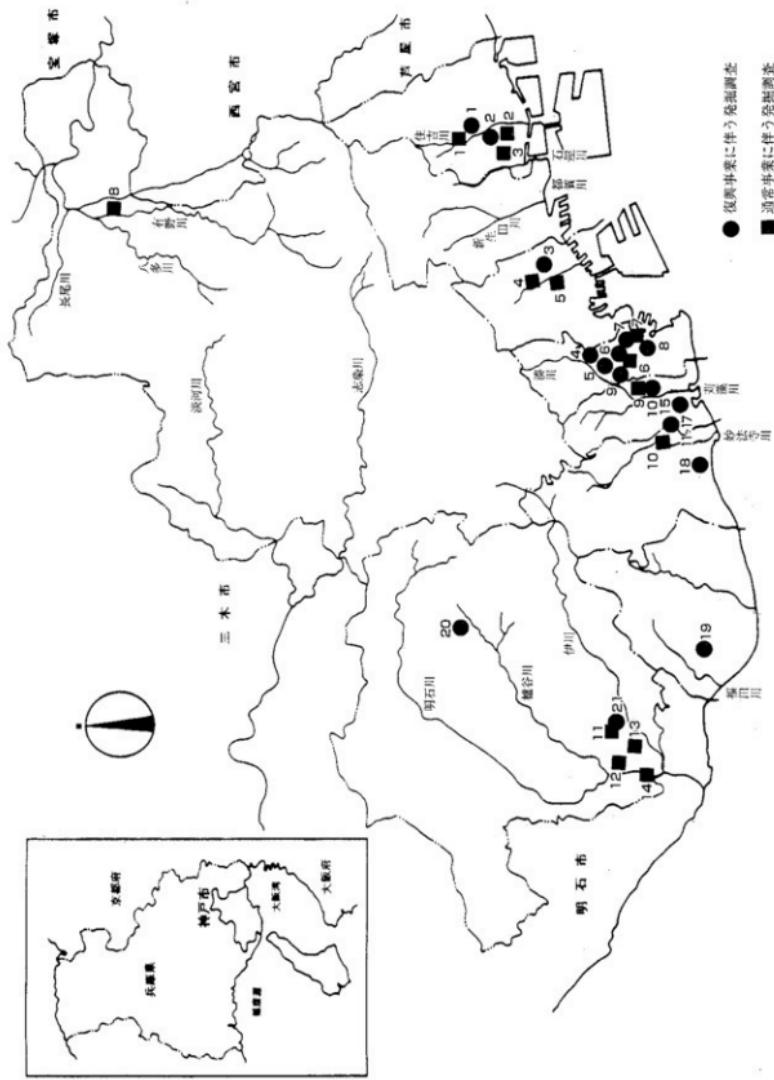
埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（1）

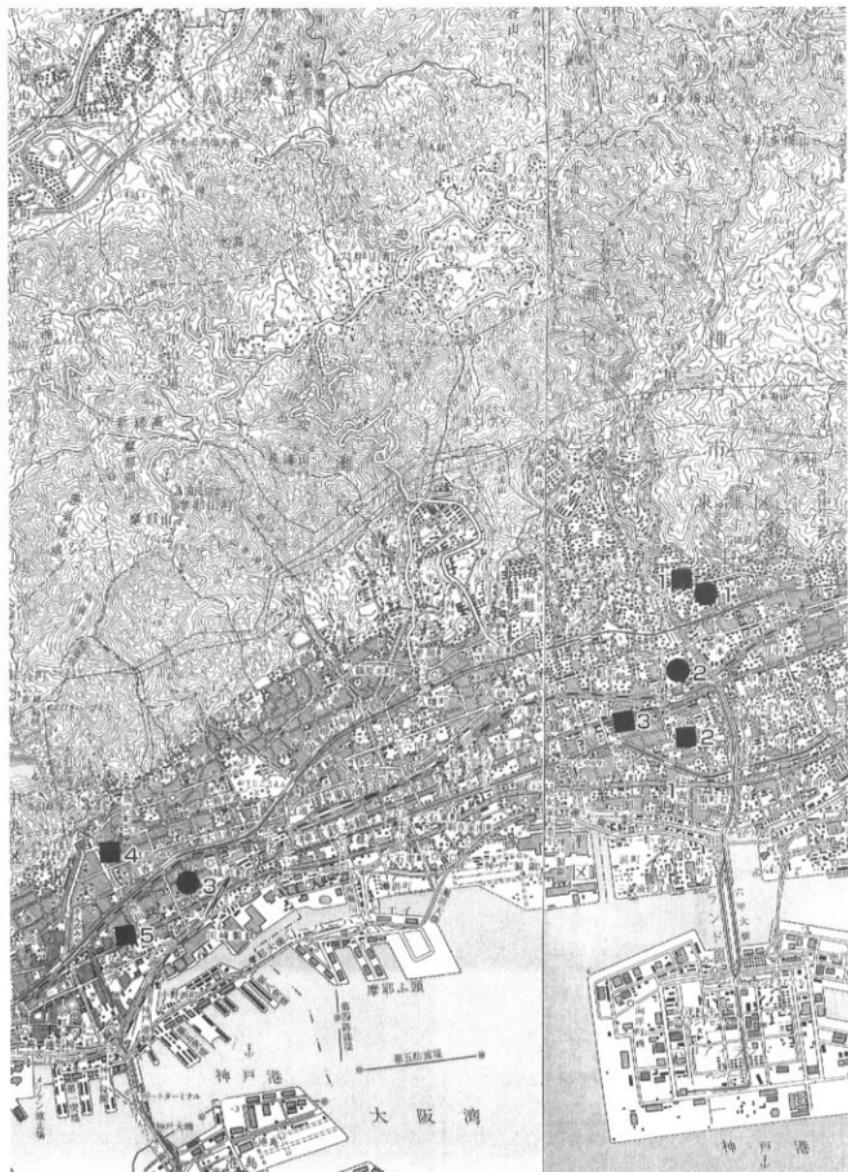
No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 調査担当者 延捲頭領様	調査期間	調査内容	調査原因
1	森北所廻跡第19次調査 東灘区森北町4 1丁目	神戸市教育委員会	関野 哲 17m ² 34m ²	13.12.12～13.12.25	弥生時代後期の遺物包含層、溝 縄文時代以前のピット	個人宅地 [国連援助事業]	
2	本山通路第30次調査 東灘区本山町3 3丁目	神戸市教育委員会	阿部 敏生 38m ² 35m ²	13.10.16～13.10.22	弥生時代中期の遺物包含層、ピット	看板设置	
3	西洞木遺跡第4次調査 東灘区西洞木3 1丁目	阪神戸市体育協会	吉山 広人 216.5m ² 216.5m ²	13.07.23～13.09.01	11世紀後半の船跡、ピット	下水道施設建設	
4	佐吉町通路第38次調査 西	東灘区佐吉町3 3丁目	神戸市教育委員会 東 当代秀 阿部 动 150m ² 150m ²	13.06.15～13.06.21	6世紀の堅穴住居1棟、土坑、ピット	共同住宅建設	
5	郡永通路第70次調査 東灘区郡永町3 1丁目	神戸市教育委員会	阿部 动 95m ² 474m ²	13.10.03～13.11.11 14.01.16～13.01.17	古墳時代の船跡建物、水田 森庭、平安時代の獨立柱性物	共同住宅建設	
6	筋内通路第3次調査 中央区筋内通路 5丁目	神戸市スポーツ協会	安近 透 7,000m ² 4,250m ²	13.04.01～13.11.29 前年度から継続	縄文時代早年の土坑、弥生時代後期の堅穴住居、埴之、印引引車原跡地整 理建物、鹿塚、古墳時代前期の堅穴住居、古墳時代、秦 始皇の木棺羨、上杭墓（中阪14年度復古審査付済）	共同住宅建設	
7	震井通路第12次調査 中央区琴ノ浦町 3丁目	神戸市教育委員会	吉山 広人 172m ² 172m ²	13.04.01～13.04.11	古墳時代中期の堅穴住居 古墳時代後期の堅穴住居	個人住宅建設 [国連援助事業]	
8	井手通路第18次調査 中央区尾井町2 3丁目	神戸市教育委員会	阿部 动 145m ² 145m ²	14.02.26～14.03.18	古墳時代後期の酒	共同住宅建設	
9	10／×橋内通路第6 9次調査	中央区北長浜通 5丁目	阪神戸市体育協会	河原 碩平 110m ² 110m ²	14.01.08～14.01.22	昭和40年のピット、落ち込み	電線共同配線設
10	祇園通路第9次調査 兵庫区祇園町 1丁目	神戸市教育委員会	阿部 动 19m ² 19m ²	13.06.26～13.07.27	通路包含層	道路建設 [跡地化評議]	
11	大間津通路第9次調査 兵庫区深澤通3 1丁目	神戸市教育委員会	関野 哲 980m ² 2,940m ²	13.07.09～13.11.05	平安～縄文時代の土坑、木棺羨、ピット 弥生時代初期の環濠	共同住宅建設	
12	兵庫津通路第24次調査 兵庫区七寅町2 1丁目	神戸市教育委員会	東 当代秀 中西さやか 1,560m ²	13.10.15～13.12.20	小池古～江戸時代末の面の造喰面を蛤山 通水口	共同住宅建設	
13	兵庫津通路第27次調査 兵庫区川上町1 1丁目	神戸市教育委員会	関野 哲 14m ² 28m ²	14.01.15～14.01.18	17世紀後半の土坑 18世紀後半の土坑	瓦屋増築	
14	上沢通路第46次調査 芦原区松木通8 1丁目	神戸市体育協会	吉山 広人 360m ² 1,280m ²	13.09.14～14.01.15	弥生時代末の堅穴住居、南 奈良時代の獨立柱建物、横列 (平成15年度復古審査付済)	道路整備 [木本源]	
15	上沢通路第47次調査 芦原区3番町3 1丁目	神戸市体育協会	山本 裕輔 112m ² 112m ²	14.02.28～14.03.10	古墳時代後期の土坑、溝、ピット ・平安時代後期の溝、道路	生垣路敷備	
16	オキダ古油畠第2次調 査 北区育智町2号 宇杉ノ木	阪神戸市体育協会	谷 正樹 760m ² 760m ²	13.07.13～13.08.15	古墳～平安時代の堀立柱建物、土坑、溝、ピット	道路建設 [遺構高縮]	

埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）(2)

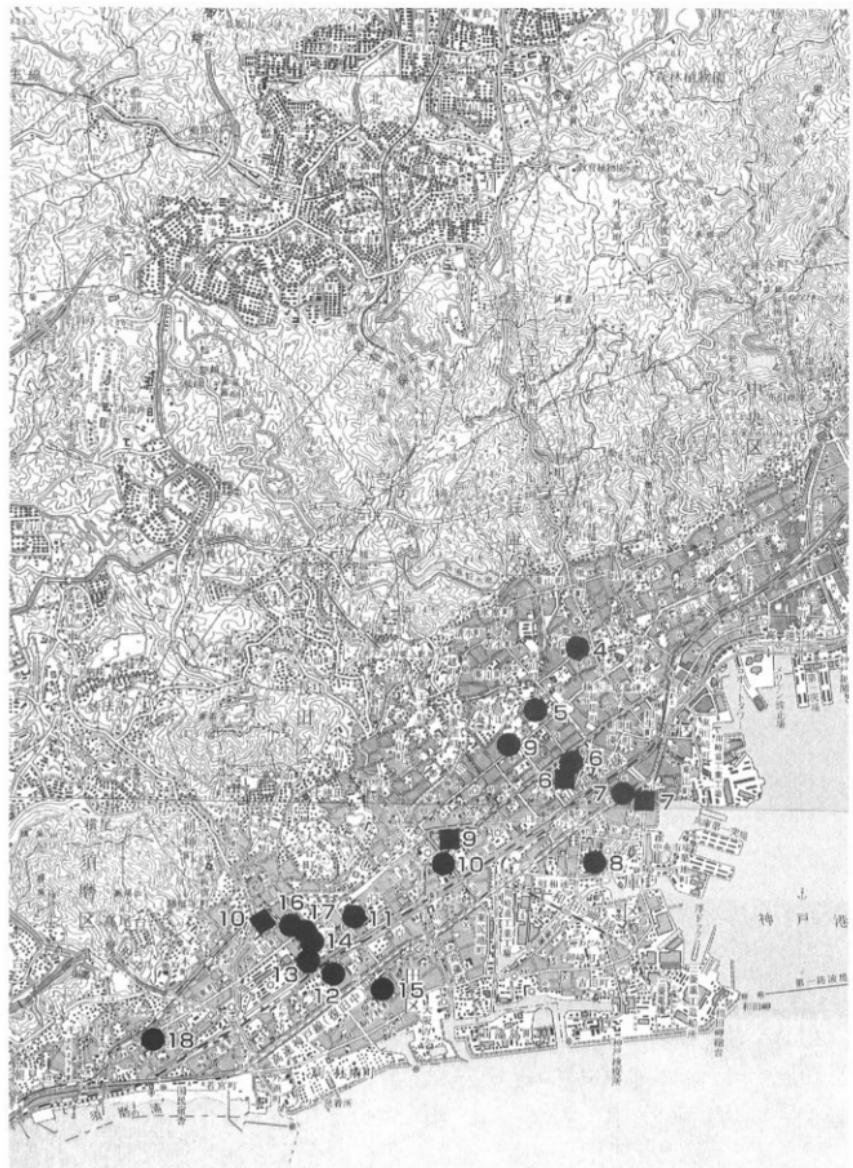
17	新庄山城址第8次調査	北区長尾町上津	神戸市体育協会	井尻 裕	77af 77af	13.07.30~13.08.06	明確な遺構なし	区間整理手帳
18	野瀬遺跡3次調査	北区佐河町野瀬 半沢	神戸市体育協会	井尻 裕 黒藤 宏	1,475af 1,475af	13.04.09~13.05.28 14.02.25~14.03.06	中世後半の土坑、落ち込み	遺跡基礎整備
19	五条の池跡第11次調査	長田区4番町6 丁目	神戸市教育委員会	鶴野 豊	160af 480af	13.01.09~13.05.11 前年度から耕種	鎌倉時代の独立柱建物、土坑、溝	区間整理手帳
20	御殿遺跡第15次調査	長田区御殿通4 丁目	神戸市体育協会	谷 正成	121af 309af	13.05.25~13.07.09	鳥居～奈良時代の踏道、柱列 平安時代前葉の独立柱建物、溝、ピット 半瓦束～鎌倉時代の溝、壁浜 (平成14年度報告書刊行済)	遺跡基礎 [国連登録]
21	東紀元遺跡第1次調査	長田区東紀元1 丁目	神戸市体育協会	井尻 裕 森空 義哉	205af 205af	13.12.01~13.12.13 14.01.10~14.01.17	古墳時代前葉～中世の遺物包含層	地盤整備
22	戎町遺跡第33次調査	須磨区半田町4 丁目	神戸市教育委員会	阿部 忠平	317.5af 317.5af	13.03.26~13.04.18	中世の土坑、溝、ピット	共用住宅建設
23	大手町遺跡第6次調査	須磨区大手町4 丁目	神戸市体育協会	内藤 義茂	180af 180af	14.01.09~14.02.15	奈良時代中期の踏道	道路建設 [山麓側]
24	神出古高社群	西宮市出町東字 道ノ谷	神戸市教育委員会	渡田 毅	120af 120af	13.06.12~13.06.25	11世紀中期～後半の土坑、落ち込み	個人住宅 [国庫補助金]
25	芝崎遺跡	西宮市平野町向井 字栗谷	神戸市教育委員会	阿部 功	170af 170af	13.07.10~13.07.14	13世紀～14世紀のピット、落ち込み	遺跡基礎建設 [国庫補助金]
26	寺谷遺跡	西宮市寺谷町寺谷 丁平尾	神戸市体育協会	石崎 二和	250af 250af	13.06.27~13.07.10	12世紀の遺物包含層	地盤整備
27	寺谷遺跡	西宮市寺谷町寺谷 丁平尾	神戸市体育協会	石島 二和	20af 20af	13.07.11	12世紀の遺物包含層	地盤整備
28	口木墓塚古墳第8次調 査	西宮市伊川谷町南 和字シンド山	神戸市教育委員会	西岡 均次	650af 650af	13.11.15~14.01.18	古墳2基、埴輪円筒枕	施設建設
29	高津横・四道跡	西宮市玉出町高津 横字同	神戸市教育委員会	西岡 均次	183af 183af	13.04.19~13.05.11	城島～奈良時代の溝	遺跡調査
30	高津横・四道跡第7次調 査	西宮市玉出町高津 横字同	神戸市教育委員会	東 泰代秀 阿部 功	2,500af 2,500af	13.06.18~13.07.27	古墳時代後葉の溝	宅地造成
31	今池瓦窯跡第3次調査	西宮市引田町今池 和字下近道	神戸市体育協会	山本 雅和 佐伯 二郎	551af 948af	13.11.08~13.11.19 13.11.28~14.02.20	奈良時代後葉の窯穴住居、土坑、溝 古墳時代後葉後半～末の窯穴住居、獨立柱建物、火葬車	道路建設 [洲谷新方線]
32	新力遺跡第43次調査	西宮市立塚町内川 等字野手	神戸市教育委員会	阿部 功	140af 343af	13.07.21~13.08.27	古墳時代中期後半～後期の土坑、溝	区間整理手帳
33	西津ヒュータウンNo. 62地点	西宮市垂谷町菅野	兵庫県教育委員会	山上 雅弘 長瀬 正則 正弘	7,928af 7,928af	13.06.18~13.10.20	奈良時代の窯穴住居、土器埋納土坑 古墳～奈良時代の窓穴住居、獨立柱建物、土坑 中世の独立柱建物、火葬車	道路建設 [神戸西バイパス]
34	垂木遺跡	西宮市垂谷町菅野	兵庫県教育委員会	山上 雅弘 長瀬 正則 正弘	4,732af 4,732af	13.12.25~14.03.12	奈良時代(?)窓の窓、土葬棺 鎌倉時代の窓、獨立柱建物、井戸	道路建設 [神戸西バイパス]
35	西津ヒュータウンNo. 62地点	西宮市垂谷町菅野	兵庫県教育委員会	山上 雅弘 長瀬 正則 正弘	5,798af 5,798af	13.12.06~14.02.15	奈良時代、古墳時代の窓穴住居、獨立建物 中世の溝、井戸	道路建設 [神戸西バイパス]
36	根戸城跡	西宮市平野町福山	兵庫県教育委員会	鈴内 香造 久保 弘平	1,402af 1,402af	13.12.10~14.03.12	外堀の南側～15世紀の獨立柱建物を岐山 塚から15～16世紀の遺物が出	道路整備
37	梅木遺跡	芦屋市猪名川町 日置	兵庫県教育委員会	涉 賛	774af 774af	14.01.28~14.03.15	難波時代の獨立柱建物	道路建設 [神戸西バイパス]
38	西神ヒュータウンNo. 62地点	西宮市谷町菅野	兵庫県教育委員会	中川 日置	148af 148af	14.01.28~14.03.15	中世の獨立柱建物、井戸、土坑	道路建設 [神戸西バイパス]

平成13年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図
 (各遺跡の番号は馬鹿遺跡と一致)

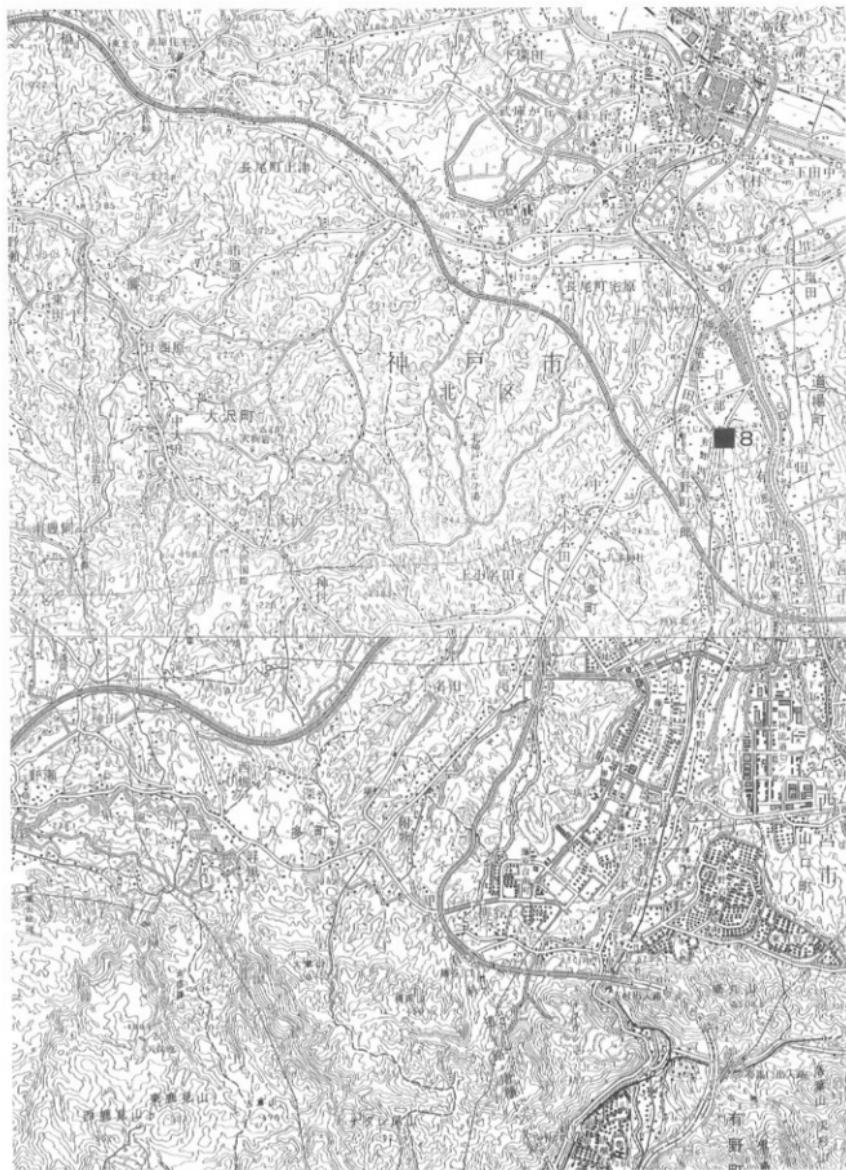




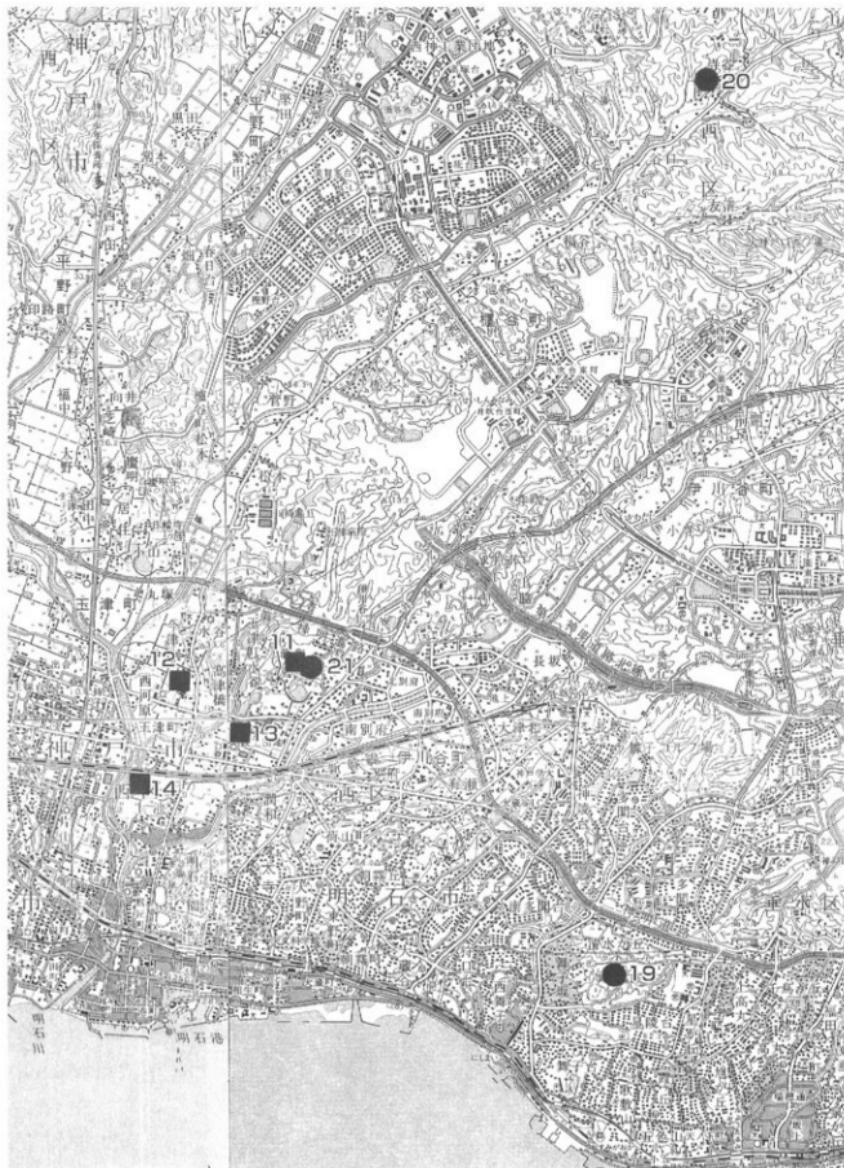
調査地点位置図 1



調査地点位置図 2



調査地点位置図 3



調査地点位置図 4

II. 平成13年度の復興事業に伴う発掘調査

1. 岡本北遺跡 第5次調査

1. はじめに

岡本北遺跡は旧揖津国菟原郡、六甲山南麓の傾斜地、住吉川の左岸に位置する。岡本北遺跡の東には岡本東遺跡、西には西岡本遺跡などが相接して存在する。

岡本北遺跡ではこれまで4次にわたり発掘調査が行われている。第1次調査で出土した縄文時代早期の土器が最古の遺物であるが、遺跡の中心は弥生時代末と鎌倉時代になる。



2. 調査の概要

今回の発掘調査は個人住宅建設工事に伴うもので、住宅建設によって遺跡の破壊される部分についてこれを行った。

遺構面 遺構面は2枚が存在する。ただし調査地周辺は傾斜地であり、段造成されて土地が利用されている。調査地においても斜面がカットされており、2枚の遺構面を確認できたのは調査区の北側の30mほどであった。

第1遺構面 中世を主とする遺構面である。北部の石垣SW01の背後は中世の洪水砂2b層に覆われる。ここでは石垣・柱穴・土坑・牛蹄あと・暗渠などが検出された。

中部～南部では溜め池および堤・土坑・柱穴などが検出された。南部は近代に石組溝SD02が築かれ、一部遺構の遺存状況が悪い。

SW01 段造成を行った際に築かれた石垣。根石の一部のみが遺存している。小片がほとんどではっきりしないが、裏込め土からの出土品は中世のものが多く、近世以降の遺物は出土していない。

畠地 石垣前面の耕土(13a層)には近世の遺物が含まれ、この耕土直下から暗渠が検出された。宅地として造成される近代までここが畠地として利用されていたものと推定される。

柱穴 直径0.3m程度のプラン円形の柱穴群が石垣背後の平坦面で検出された。SP08・09は柱痕部に炭が詰まっている。出土した遺物は小破片がほとんどで、時期も判然としないが

中世のものが多いと思われる。

牛跡あと 石垣背後の平坦面で検出。偶蹄目の動物跡あとで、おそらく牛のものであろう。

S G01・ 調査区南部で検出された溜め池状の遺構（S G01）とその堤（S X02）。これらは常時水

S X02 の流れるものかどうか明らかでないが、傾斜地の谷部分を塞き止め堤とし、その上流側を等高線に沿うかたちで溝状に掘削する遺構で、以下の通りの状況が観察できた。

①南側の堤となる部分 S X02 は、元の地形が谷状の流路である部分に盛土を行い、その上面の高さをそろえている。②堤の池側斜面には、盛土部分・地山掘削部分とともに拳大か

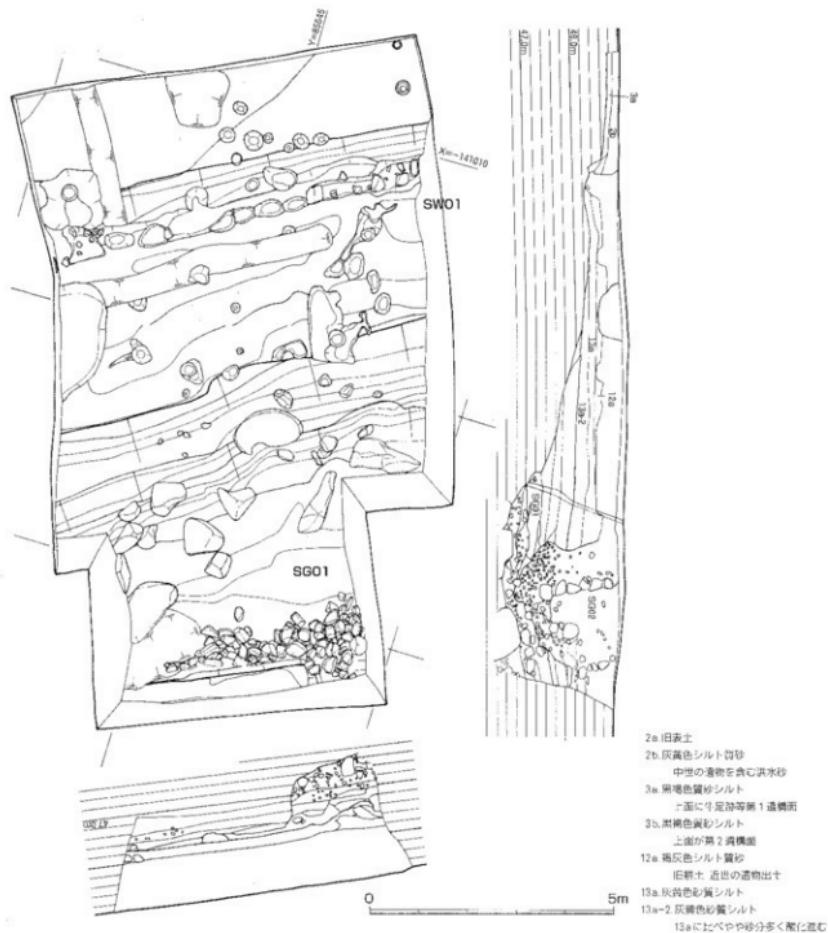


fig. 9 第1遺構面平面・断面図

ら人頭大の礫が乱雜に積まれ、一部に止め杭が遺存している。これは水による堤の浸食を防ぐための工法と推定される。③堤上面では余水吐状の堤を横断する溝が検出された。④馬踏から池底までの深さは約1.0mをはかる。⑤S G01の埋土は土壤化の進んだ砂質シルトが主体で、淀んだ状態の水成堆積である。

池の端が検出されていない状況では、この遺構が等高線に沿うかたちの堀切的なものである可能性も排除できないが、滯水していた状況が確認できることからすれば、貯水を目的とする遺構、すなわち溜め池である可能性の方が高いと判断される。

S G01・S X02からは平安時代末から鎌倉時代の遺物が主体的に出土しており、この時期に溜め池が築かれ、利用されたものと推定される。なお、流れ込みとして弥生時代末頃の遺物も出土している。

第2 遺構面 北部のみ遺存している。3b層上面で確認された弥生時代終わりごろの遺構面。柱穴・土器溜まり遺構が検出された。

S X01 調査区北部西端で検出された土器溜まり遺構。弥生時代末頃の土器が比較的多く出土した。

柱穴 調査区北部で検出された。柱穴ともシミとも判断つかないものが多く、建物などの遺構としてまとまるものもない。

3.まとめ 遺跡全体からみた調査面積は少いものの、これまでの調査によって、岡本周辺の遺跡群の様相もある程度判明してきた。平安後期から鎌倉時代については今回の調査で農業生産にかかわる部分が明らかとなり、今後調査が進展すれば、この時代のこの地域の様相がより具体的になるものと期待される。

なお、遺構は確認されなかったが、今回の調査で律令期の遺物が出土しており、周辺にこの時期の遺構が存在するものと推測される。



fig.10 第1遺構面全景



fig.11 S G01

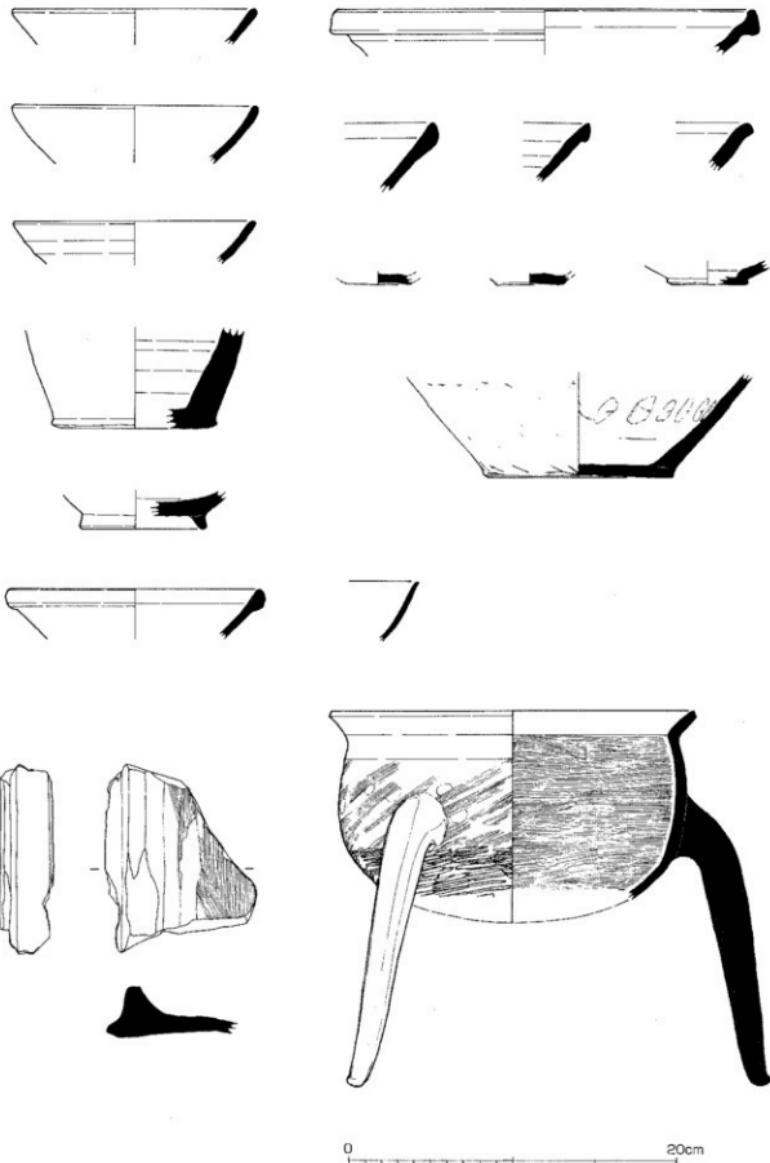


fig.12 S G01出土遺物

2. 住吉宮町遺跡 第35次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、神戸市東灘区に所在する遺跡で、住吉川や石屋川をはじめとする小河川によって形成された標高19~28mの扇状地末端付近に立地している。

これまでに実施した34次にわたる調査の結果、弥生時代~中世の複合遺跡であることがわかってきており、特に古墳時代においては、前方後円墳である坊ヶ塚古墳や帆立貝式古墳である住吉東古墳などの盟主墳を中心に約70基の方墳が集中して営まれている状況が判明してきており、注目されている。

今回の調査地は、平成8・9年度に実施した第24次調査地の北側に位置しており、同調査でも4基の方墳が確認されていることから、当調査においても、方墳などの遺構が確認されることが調査前より予想された。なお、当調査地の現標高は29~30mである。



fig.13
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、平成12年度より継続して調査を実施した。先年度内に、トラックヤード部分として掘削を行なわなかった南東隅部を除き、主に東半部に安定して堆積がみられた黄褐色粘質砂上面を第1遺構面として調査を実施した。その結果遺溝が検出されず、調査区外に遺構が延びるものと考えた。

今年度は、まず未調査であった南東隅部分について調査を実施した。その結果、第1遺構面とした黄褐色粘質砂上面では遺構が検出されず、さらに下層の灰色小礫混じりシルト質細砂層上面（現地表下55cm）で土坑3基（SK01・SX01・02）を検出した。遺構内からは土師器や黑色土器の小片が出土しており、平安時代~中世頃のものと考えられるが、

詳細な時期については不明である。

また、先述のように今回の調査区内にも古墳が存在することが考えられたため、下層の調査を実施した。その結果、後述する古墳1基（1号墳）及びその周壕がある程度埋没した段階で掘削されたピット4基（S P01～04）を検出した。

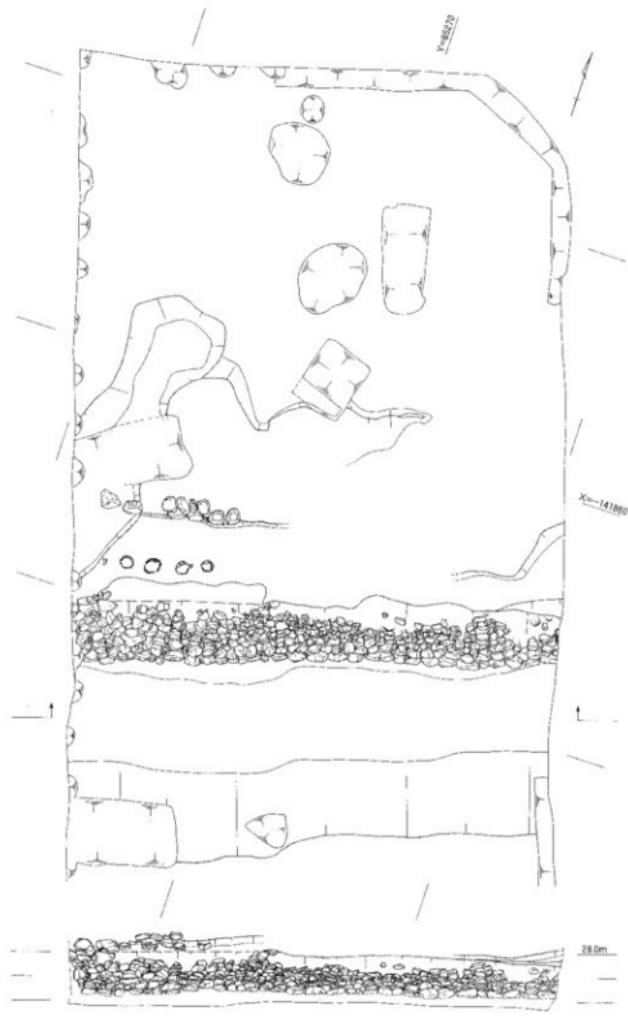


fig.14 1号墳平面・立面図

0 3m

S P 01~04は直径0.2m前後のもので、1.3~1.65mではほぼ等間隔で並ぶが、1列のみの検出であるため性格については不明である。これらのピットについては、S K01・S X01・02とはほぼ同一面で検出しており、ピット内からの出土遺物がなく断定材料には乏しいものの、両者は同一時期のものである可能性が考えられる。検出層位からは、1号墳よりも新しい時期のものと考えられるが、詳細については不明である。

以上の結果から、先年度第1遺構面とした黄褐色粘質砂上面については、調査区外に遺構が存在することを全く否定することはできないものの、現段階では遺溝面と捉えることを保留し、土坑及びピットを検出した面を改めて第1遺構面と呼称することとする。

1号墳

検出した古墳は、調査区のはば2/3を占める大規模なもので、墳丘の一部や周濠、墳丘南法面の葺石、埴輪列、2段目基底石などを検出した。調査区外へ延びているため、全体の形状や規模は明らかではなく、古墳の主軸方向も不明である。また、埋葬施設

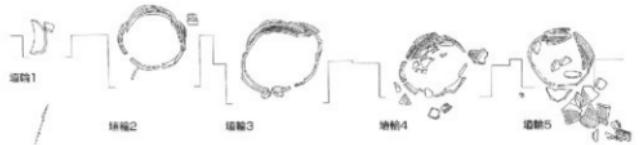


fig.15 1号墳埴輪列
平面・立面図

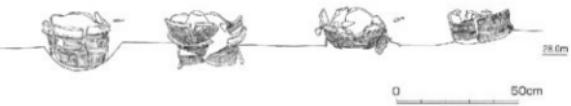


fig.16 1号墳埴輪列

も削平により失われている。検出した規模は、墳丘の東西長10.2m、同南北長11.2m、周塚の幅4.7m、同深さ1.1mである。

円筒埴輪列 墳丘の南西部、周塚の北肩部際で、円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪列は5個体（うち1体は底部及び口縁部のみ検出）が等間隔（芯々間で50~60cm）で並んでいる。

円筒埴輪列は墳丘の南西部でのみ検出した。墳丘のその他の場所にも埴輪が並べられていた可能性については、周塚内から各種の埴輪が出土していることからも十分に考えられるが、精査を実施したにもかかわらず一部分にのみ埴輪列を検出したことは、少なくとも1段目の墳丘については、特定の部分にのみ埴輪を設置していた可能性がある。その場合断定はできないものの、円筒埴輪列を検出した部分が墳丘コーナー付近であることが考えられる。葺石も西端部付近は斜め方向（北西→南東方向）に積んでいる状況を読み取れ、墳丘コーナーを意識した積み方と考えることができる。

円筒埴輪列のうちの1体（埴輪3）については、焼成が良好な土師質の埴輪で、接合作業の結果ほぼ全体の器形を復元することが可能である。4段構成の埴輪で、最上段にはヘラ状工具による線刻（船？）が認められる。円筒埴輪に線刻が認められるものは、住吉宮町遺跡の調査では第32次調査でも確認されているが、線刻の内容に若干の違いがある。

2段目 また、墳丘の南西部には人頭人の花崗岩を4石、周塚肩ラインと平行に並べている部分

基底石 が検出された。下部に2石が存在し2段積みになっており、2段目の墳丘の基底石と考えられるが、2段目の墳丘については、後世の洪水による削平のためほとんど失われている。

墳形 1号墳の形状や規模については以上のように不明であるが、これまでに住吉宮町遺跡内で検出した古墳の大半が方墳であることや、検出した周塚が調査区内をほぼ真っ直ぐに延びる点を重視すれば、方墳の可能性が高いと考えられる。ただし周塚の幅が5m近いものであり、これまでに住吉宮町遺跡内で検出した単独の方墳の塚としては突出するものである。墳丘の規模に伴う問題ではあるが、坊ヶ塚古墳よりもさらに北側に立地することなどを考慮すれば、前方後円（方）墳の可能性も全く考えられないわけではなく、今後隣接地の調査などを待って更に検討を要する重要な問題である。

出土遺物 1号墳墳丘及び周塚内より出土した遺物の大半は埴輪であり、他に器形の判明するものは須恵器环身1点、土師器壺1点があるに過ぎない。第24次調査などで検出している供獻土器も今回の調査区内では検出されていない。須恵器环身は小片ではあるが、TK208型式のものと考えられる。

埴輪については、円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか、人物埴輪（武人？）、韁形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪などの各種の形象埴輪がみられる。円筒埴輪の特徴は川西編年のIV期の様相を示しているものと考えられる。

整理作業の未了な現段階では詳細については明確でない面もあるが、以上のことから、現段階では1号墳は5世紀中頃に築造されたものと考えておきたい。

今回の調査地の南側に位置する第24次調査地点でも古墳（方墳）が4基検出されているが、いずれも周塚の大半が洪水砂によって埋まっていることが確認されている。こ

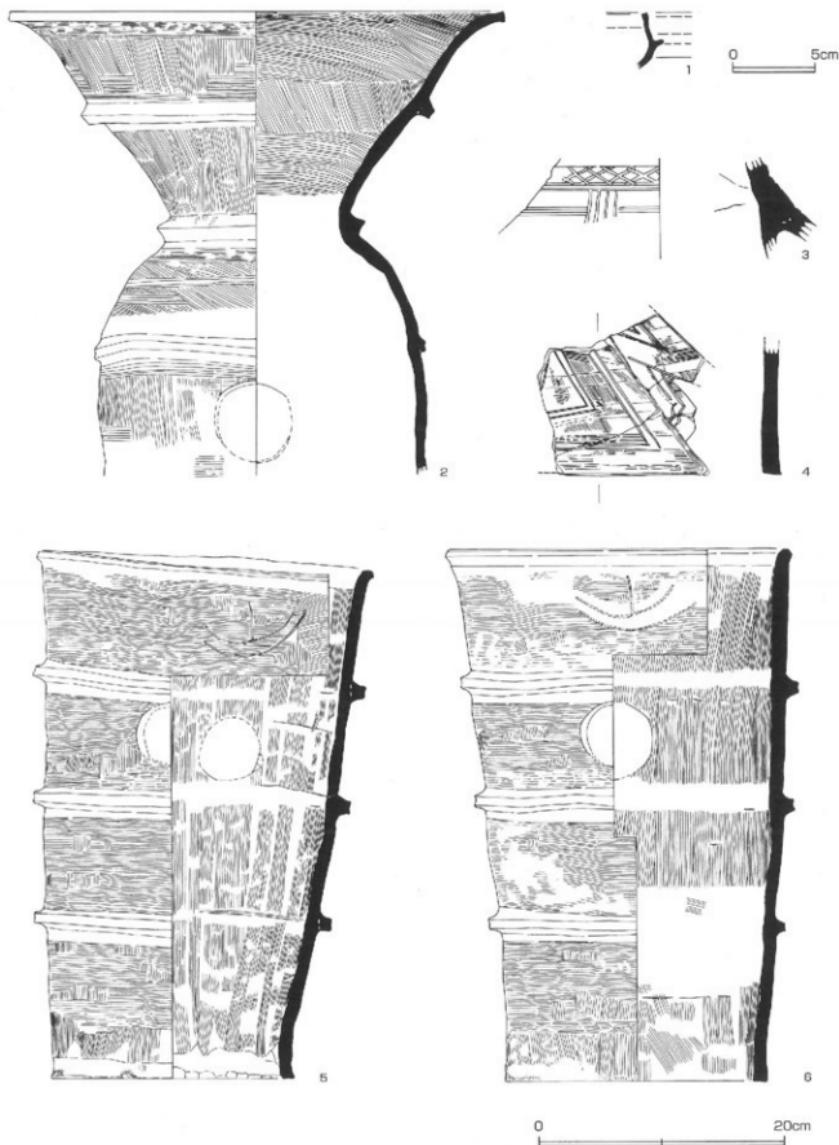


fig.17 出土遺物 (5:埴輪列3 6:埴輪列5)

の洪水砂は6世紀初頭頃の洪水の痕跡を示すものと考えられているが、今回検出した1号墳の周壕はその下半部に厚くシルトの堆積がみられ、上半部にのみ洪水砂が堆積している。今回の洪水砂が第24次調査地点で検出した洪水砂と同一時期のものかどうかの断定は難しいが、いずれにせよ、今回検出した1号墳が第24次調査の4基の古墳が埋没するよりも早い段階に埋没した可能性、言い換えればより古い時期に築造された可能性が高いと考えられ、上記の築造時期の想定を傍証するものとも考えられる。

なお、墳丘の中央部に南北方向のトレンチを設定して断ち割り調査を実施したが、その結果、少なくとも1段目の墳丘については自然堆積層を整形して古墳を築造したものと考えられる。2段目の墳丘については基底石しか残存していないため明らかではないが、周壕掘削時に生じる土を用いた、盛土による成形の可能性も十分に考えられる。

そのほか、調査区南端部でピット2基を検出した。出土遺物がなく時期については不明であり、1号墳との関連も不明である。

3.まとめ

今年度の調査では古墳1基及び平安時代～中世頃の土坑、ピットを確認した。特に古墳（1号墳）は、住吉宮町遺跡の範囲のなかでは最も北側で検出されたものである。整理作業が未了なため詳細については不明な点が多く、また規模や形状も明確ではない。墳形が從来検出されているような方墳になるのか、あるいは前方後円（方）墳になるのかは断定できないが、いずれにせよこれまでに検出した古墳のなかでも、大型の古墳であることは間違いない。また築造時期についても、第24次調査の4号墳と同時期或いは更に遡る可能性も考えられる。今後住吉宮町遺跡内の古墳群の様相を考える際に重要な意味をもつ古墳と捉えることができよう。



fig.18 調査区全景

3. 日暮遺跡 第20次調査

1. はじめに

日暮遺跡は生田川と西郷川に挟まれた地域にあり、扇状地末端から低位段丘面に立地する。日暮遺跡は、昭和61年の第1次調査以来、弥生時代から室町時代におよぶ広範囲な複合集落遺跡として知られている。これまで、弥生時代後期末の竪穴住居、古墳時代前期・中期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、鎌倉時代後期の土坑・溝・井戸等が発見されている。調査を実施した地点は、北西から南東方向に下がる緩やかな傾斜面に占地している。今回の調査は、共同住宅新築工事に伴う調査である。調査地は第19次調査の南西隣にあたり、室町時代と鎌倉時代後期の遺構面が検出されることが予想された。

fig.19
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

基本層序

調査地の基本層序は、現地表下1m前後まで造成土に覆われ、造成土の下に旧耕作土が厚さ0.2~0.3mで被覆している。この旧耕土層下に中世の遺物包含層（暗黄褐色粘性砂質土）が堆積し、その下面が黒灰色粘性砂質土の第1遺構面となっている。黒灰色粘性砂質土の下層は暗褐色砂質土が堆積し、その下は黄茶褐色砂質土で第2遺構面となっている。第2遺構面である黄茶褐色砂質土は南方向に緩やかに傾斜している。

第1遺構面

第1遺構面では苑池と考えられる落ち込み1ヶ所、苑池への導水溝・排水溝各1条、掘立柱建物2棟、柵2条、井戸1基を検出した。

S B01

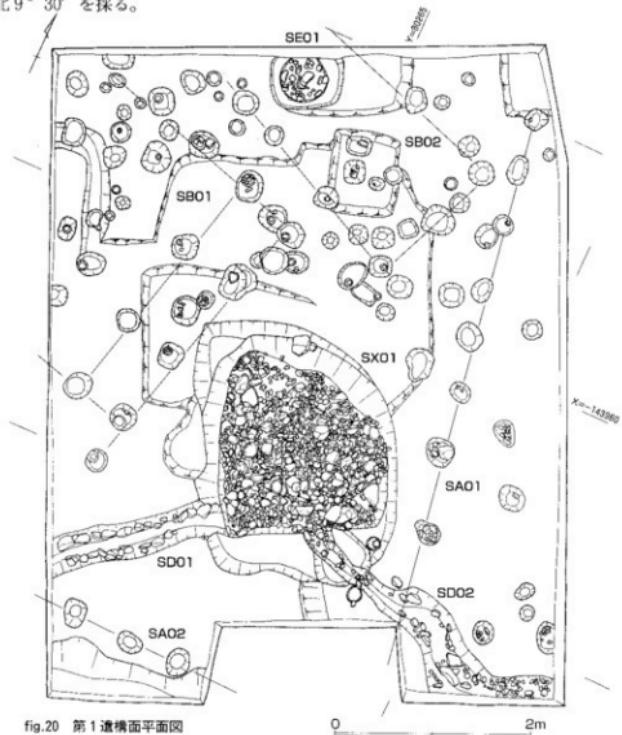
南北5間(6.4m)、東西4間(5.0m)の南・東・西に庇を設ける南北棟の掘立柱建物である。梁間（東西）で1.2m等間の東西2間、1.8m等間の南北4間の母屋を構え、東・西側に1.2m、南側0.8mの庇を設ける。柱掘形は一辺0.6m前後の方形や、長径0.6m前後の不定形円形で検出したが、掘形底部は概ね方形で、本来柱掘形は方形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.3~0.45m前後の深さを残し、掘形底部及び掘形の上層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形埋土内では一部の掘形で河原石と角礫が充填され、柱材の固定がおこなわれている。また、柱材は掘形の壁に接して据えられていた。掘形からは、土師器の細片が出土している。建物の方位は北18°30' 東を採る。

S B02

南北2間(2.8m)、東西3間(4.2m)以上の東西棟の掘立柱建物である。南に接する

S B01との間隔は1.0mで極近接している。桁行（東西）で柱間は1.8m等間、架間（南北）で1.4m等間を計測する。建物の東側1間分は中央に東柱があり、建物の東辺は掘立柱建物S B01の庇と柱どおりが概ね一致している。建物の南側第2柱間中央には大型の柱掘形が検出され、扉等のもたせ柱とも考えられる。なお、建物の中央西よりで、井戸（SE 01）を検出した。井戸中心に建物棟方向が通り、土間に設けられた屋内井戸の可能性がある。柱掘形は一辻0.45m前後の方形や、長径0.6m前後の不定格円形で検出したが、掘形底部は概ね方形で、本来柱掘形は方形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.2~0.3m前後の深さを残し掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形埋土内では一部の掘形で河原石と角礫が充填され、柱材の固定がおこなわれている。掘形からは、土師器の細片が出土している。建物の方位は北23° 00' 東を探る。

SA01 7間分検出した。柱掘形は長径0.4~0.6m前後の不定格円形で検出したが、掘形底部は概ね円形で、本来全て柱掘形は円形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.3~0.4m前後の深さを残し掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形埋土内では一部の掘形で河原石と角礫が充填され、柱の固定が行われている。掘形埋土内からは、土師器の細片が出土しているが明確な遺物はない。柵の方位は北9° 30' を探る。



S A02 2間分検出した。柱間間隔は1.2m等間を計測する。柱掘形は長径0.4~0.6m前後の不定梢円形で検出したが、底部は概ね円形で、本来柱掘形が円形に掘られ、一部の掘形で柱の抜き取りが行われたと考えられる。柱掘形は0.3~0.4m前後の深さを残し掘形底部及び掘形の土層断面に柱の痕跡が明瞭である。掘形からは土師器の細片が出土している。柵の方位は北 $80^{\circ} 30'$ 西を採る。

S E01 その位置関係からS B02に伴う室内井戸とも考えられるが明確ではない。井戸の東半は近代の擾乱によって底部のみを残す。井戸は東西1.8m、南北1.2m前後、深さ0.6mの方形掘形に直径0.9m前後の円形井戸枠を据えて構築している。井戸枠の痕跡と考えられる木質部等は検出されなかった。井戸の底部は湧水層である明黄褐色砂礫層まで掘り抜き、角礫を敷き黒灰色粘質土と褐色砂を混えた土で充填した上に井戸枠を据えている。井戸内埋土・掘形埋土内から土師器の細片が出土しているが明確な遺物はない。

S X01 検出当初、上面では近世遺物を含む土層が被覆し、西側及び南東側には溝状の掘形が錯綜した状態で検出され、近世以降の落ち込みとも考えられた。しかしながら、上層被覆土を除去した結果、人頭大から拳大の花崗岩が投棄された状態で多量に検出され、石材の間から土師器羽釜・須恵器捏鉢が出土した。さらにS X01内の石材を除去し、溝状の落ち込みを精査した結果、S X01の底部には比較的扁平な花崗岩による石敷きを設けていた。また西側の溝状の落ち込みは、花崗岩による護岸を施した溝(S D01)であり、西からS X01の南隅部に水を落としこむ構造の溝であることが判明した。南東側の溝状の落ち込みはS X01の石敷き面から流れ出る溝(S D02)であることが明らかになった。

以上の検出状況から復元されるS X01は、南北5.2m、東西4.2mの不定梢円形、断面逆台形状に掘形を掘り、さらに掘形の北側を段状に掘り込んで、底部から10cm~20cm前後小礫混じりの暗褐黄色粘性砂質土を敷いた上に石敷きを設けていた。石敷きは、段状掘形の南西部を「要」とするほぼ中心角90°、半径1.5m~1.8mの扇状に花崗岩（まれに凝灰岩含む）が敷詰められていた。石敷きは、扁平な花崗岩・凝灰岩を敷き隙間を小型の花崗岩礫で埋めてつくる。石敷きの南東隅部で比較的大型の花崗岩が石敷き上に据えられていることから、これらが護岸の基底石と考えられる。さらに、石敷き掘形の南側は段状に幅0.6mの平坦面をつくり、石敷き端部から石材を据え、平坦面部に裏込めして護岸したことが土層断面から観察できる。このように護岸は石材を敷詰めた上に石積みを行い、裏込めして構築されていたと考えられるが、破却時に持ち去り・抜き取り・破碎・裏込め土の崩壊により壊滅したと考えられる。

花崗岩による護岸を施した溝(S D01)は、扇形石敷きの「要」の部分に取り付き、石敷き面との落差約0.2mでS X01に流れ込んでいる。S D01とS X01際には柵等の水量を制御する施設があったと考えられるが、明確な制御施設は検出できなかった。また、S X01の南辺中央に取り付

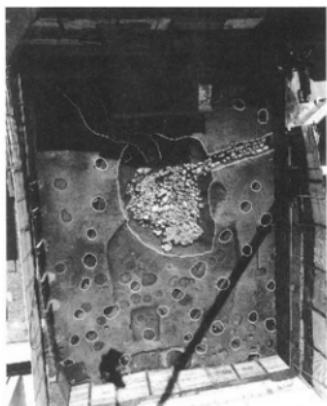


fig.21 第1遺構面全景

く溝（S D02）は、溝底石敷きがS X01石敷きに連なって施され、また石敷き掘形に接して石材の掘付痕跡が検出されている。樋等の施設は検出されなかったが、S X01掘形際に直径0.2m大の石材を据えるピットが検出され、何らかの樋相当の施設があったことが推察できる。

溝 遺構名	上端幅	底 幅	深さ	断面形	備 考	
					基部に2段以上の20~40cm大の花崗岩をたて積み埋土上層からは青磁碗底部・須恵器片・土師器片	
S D01	0.7m	0.4m	0.3m	逆台形		
S D02	0.5~0.7m	0.2~0.3m	0.5m	V字形		

第2遺構面 第2遺構面では、堅穴住居2棟、土坑状の落ち込み3ヶ所を検出した。

S B201 方形の堅穴住居である。南西部では明確なコーナー部は検出できなかった。壁体沿いに幅0.2m前後、深さ0.12m前後の溝がめぐる。堅穴住居の壁体は削平されており、検出時点で住居の床面を検出している。床は暗褐色粘性砂質土に黄褐色砂を混えてつくられ、黄茶褐色粘性砂質土上面から貼り付けられる。周壁溝内から土師器細片が出土している。

S B202 堅穴住居の大部分は調査区外となり、規模などは明確にできなかった。壁体は0.1m前後残り、壁体沿いに幅0.12m、深さ0.1m前後の周壁溝がめぐる。堅穴住居の床は暗灰黄色砂質土が厚さ0.06m前後で黄茶褐色粘性砂質土上面から貼り付けられている。堅穴住居の北側には、住居に取り付く溝を検出した。溝は検出長2.4m、上端部0.8mで断面V字形をしている。堅穴住居内埋土・溝理土内からの出土遺物はない。

落ち込み 遺構名	形状	断面形状	直径（m）	深さ（m）	埋 土	遺物
S X201	円	皿状	1.05	0.24	暗茶褐色砂質土	なし
S X202	不定橢円	緩やかな皿状	1.6（南北） 2.0（東西）	0.12		なし
S X203	橢円	皿状	1.0（南北） 4.0（東西）	0.24	暗茶褐色砂質土	土師器

3.まとめ

概ね第1遺構面検出遺構の廃絶時期は苑池内の埋没土出土土器から鎌倉時代後半から室町時代前半を降らない時期、さらに第2遺構面は出土遺物が微量であるが、出土遺物に須恵器を含まない点から古墳時代前期以前と考えられる。

今回の調査では、第1遺構面で柵（S A01・02）に区画された敷地に、方位を概ね同一にした掘立柱建物2棟（S B01・02）を検出した。S B01は東・西・南に縁ないしは庇を設ける比較的大型の建物である。この建物の東縁庇に面して苑池（S X01）が造られている。苑池へは地形を利用して溝（S D01）を穿って北西から導水し、南東に溝（S D02）を穿って排水している。また、柵（S A01・02）直交して屋敷地の南東隅を画し、この苑池は屋敷地の南東隅地を利用した小規模な庭園であったことが、建物・柵の屋敷地内での位置関係から推察される。さらに、2棟の掘立柱建物は柱通りを揃えた一連の建物であり、柵との位置関係から屋敷地の主屋はS B01の北西側に位置すると推察される。このように、鎌倉時代後半にたとえ小規模とはいえ庭園池を構え、縁庇をもつ建物を脇屋とする屋敷を営みたのは、寺院もしくは荘園の在地領主に相当する地域の有力者層であったと考えられる。

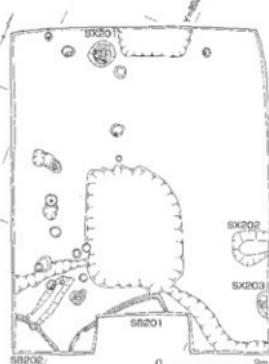


fig.22 第2遺構面平面図

4. 楠・荒田町遺跡 第30次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、旧湊川東岸の六甲山から派生する丘陵端部の段丘上に位置する遺跡で、市営地下鉄山手線の建設工事に先立つ工事立会によりその存在が確認された。昭和53年度に実施された発掘調査では弥生時代前期～中期を中心とする竪穴住居、貯蔵穴等の遺構、また銅鐸の鋳型等を含む多くの遺物が検出され、西摂地域の弥生時代の拠点集落の一つであり、出土土器は、弥生時代前期～中期の当地域の基準資料となっている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事による掘削影響範囲について、発掘調査を実施した。



2. 調査の概要

基本層序

調査区内の基本土層は、近代～現代の盛土、擾乱層の下は遺物包含層である暗褐色砂質シルト（4層）であり、その下層が遺構面である暗茶褐色シルト質細砂（14層）である。地形は基本的に北から南へ緩やかに傾斜するが、調査区の中央部付近を中心に東、南西へも傾斜が確認される。現地表面から遺構面までは、0.7m前後である。

弥生時代

直径0.2m、検出面からの深さ0.14mのピットで、埋土は暗褐色砂質シルトである。弥生土器片が出土した。出土遺物から弥生時代中期と考えられる。

古墳時代 調査区東半部南側で検出した竪穴住居である。北側に竈を有している。東側及び南側は調査区外へと続くため全体の規模は不明であるが、竈を中心し復元すると、一辺約6mの規模であると推定される。深さは検出面から0.25m前後である。

床面上には炭、炭化材が点在し、焼土もみられることから、焼失した竪穴住居であると推定されるが、床面上の焼成は大きくなく、炭の量からみても激しい火災により焼失したものではないと考えられる。柱については、ピット1基が検出されたが、攪乱が著しく、また、検出されたのが一部であるため、構成する柱数については不明である。

出土遺物は床面上から滑石製臼玉2点が出土した他、竈付近からは土師器の瓶が出土した。また、竈の壁土にも遺物が混入しており、須恵器、土師器片が出土している。崩壊しやすい砂質の土壤につなぎとして混入している可能性も考えられる。この他、埋土巾から須恵器、土師器片が出土している。出土した遺物の多くは微細な小片であるが、TK47～TK10型式にかけてのものと考えられる須恵器片が出土している。

S B01 調査区東半部南側で検出した竪穴住居で、東側は調査区外へと続き、南側はS B01に切られており、全体の規模は不明である。検出面からの深さは0.1mである。出土遺物はない。

S B03 調査区西半部北側で検出した総柱の掘立柱建物である。東西2間、南北1間分を検出した。調査区北側へ延びるものと推定される。柱間はP2とP3の間が1.15mである他は、東西が1.25m、南北が2.0mである。主軸はやや西に振る。ピットの直径は0.6～0.8m前後、深さは0.2～0.35m前後である。須恵器、土師器片が出土している。出土した遺物は微細な小片であるが、TK23～47型式にかけてのものと考えられる須恵器片が出土している。

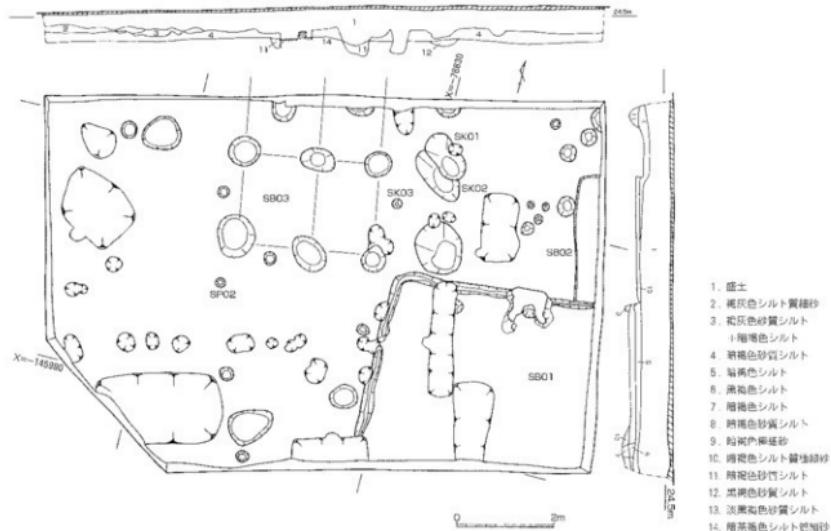


fig.24 遺構平面・断面図

土坑 S K01～03から出土した遺物はいずれも微細片であり、時期の特定は困難であるが、概ね6世紀前半（古墳時代後期）の時期が考えられる。

遺構名	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	形狀	埋 土	遺 物
S K01	1.08	0.56	2.2	椭円形	黒褐色粘質土、暗褐色粘質土	須恵器、土師器
S K02	1.2	0.6	0.2	椭円形	黒褐色粘質土	須恵器、土師器
S K03	1.1	0.9	0.32	不整円形	黒褐色粘質土	須恵器、土師器

ピット 22基を検出した。直径は0.15～0.8m前後、深さは検出面から0.1～0.3m前後である。遺物が出土したのはごくわずかであり、大半は出土遺物がなかった。

3. まとめ

今回の調査では古墳時代の遺構を中心に検出された。古墳時代の遺構は昭和53年度の調査でも6世紀前葉の竪穴住居が確認されていたが、今回の調査で古墳時代の遺構が荒田町4丁目付近にも分布することが確認された。特に、竪穴住居と掘立柱建物が確認された点は調査地付近に古墳時代の遺構が濃密に分布するものと推定され、集落の中心である可能性も想定される。

今回検出された竪穴住居と掘立柱建物の時期については、出土した遺物は微細な小片であるため、時期の特定は困難であるが、わずかな時期の確認できる遺物から判断すれば、竪穴住居S B01がT K47～T K10型式にかけての時期が考えられ、S B02は出土遺物がなかったが、切り合い関係からS B01よりも古く、掘立柱建物S B03はT K23～T K47型式にかけての時期が考えられ、S B01よりも先行するものと思われる。

弥生時代の遺構については、遺物の出土が確認されたのは、ピット1基であり、遺物の出土も極めて少量であることから、調査地付近での遺構の存在は希薄である可能性が考えられる。



fig.25 S B01

5. 兵庫松本遺跡 第4次調査

1. はじめに

兵庫松本遺跡は、六甲山系から流れる旧湊川をはじめとする幾つかの小河川によって形成された扇状地上に位置する。平成10年度に市営住宅建設に伴い初めてその存在が確認され、調査が行われた。その結果、弥生時代末～古墳時代初頭の住居、また弥生時代前期～古墳時代前期の自然流路が検出された。その後、数回調査が行われているが、遺構・遺物の密度が薄く、遺跡の内容を把握できるような資料は得られていない。

遺跡の周辺には、北に弥生時代中期～後期の集落である東山遺跡、東西には縄文時代末～中世の複合遺跡である楠・荒田町遺跡、上沢遺跡が存在している。

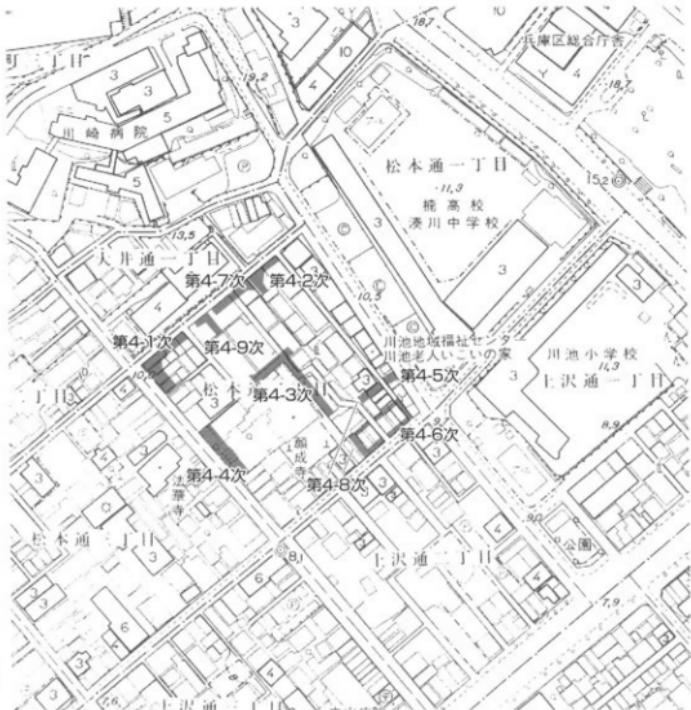


fig.26
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、平成11年度から継続して行われている区画整理事業に伴い、区画街路予定地の調査可能な箇所について調査を実施した。

調査の結果、弥生時代前期～中世の遺構・遺物を確認している。以後は調査区毎に時代を追って記述する。また第4-1次～第4-3次については、南北トレンチをI区、東西トレンチをII区と呼称する。

第4-1次調査 今回の区画整理計画地の北西隅に位置する調査地である。盛土・耕作土を除去すると中世の遺構面（灰褐色砂交じり粘質土）、さらに0.2m掘り下げる、古墳時代以降のベース面（灰黒色粗砂）、また0.3m掘り下げる、弥生時代前期（灰色シルト質極細砂）の遺構面が検出された。標高はそれぞれT.P. 8.6～8.9m、8.6m、8.2mである。

中世

耕作に伴う溝5条、土坑3基、ピット2基を検出した。

鍛溝は、ほぼ2.0mの等間隔に並んでおり、幅0.3m、深さ0.05m～0.15mの規模をもち、北東～南西方に向延びている。底部には僅かに耕作具の痕跡が確認された。埋土は、灰色または灰黄色砂質上で、須恵器・土師器の小片が出土している。土坑は、S X101以外は窪みのようなものであった。S X101は、直径0.6m、深さ0.2mの楕円形の土坑で、埋土からは須恵器・土師器の小片が出土している。

古墳時代以降 I区北端部分～II区で、土坑2基・ピット7基を検出している。遺構は、ほとんど0.05mほどの浅い堆積で、明確な遺構は確認されなかった。I区中央で、最大長7.0mの浅い落ち込みを検出したが、上層の土が堆積しており、窪みとして理解すべきものと考えられる。また地形は南に緩やかに下がっていく。

遺構面として検出することはできなかったが、断面観察および第4-2次の成果から、弥生時代中期～後期の生活面が存在しているようである。II区で検出した2条の流路S R 301・S R 302がそれに当たると考えられる。東側は幅約4.0m以上、深さ0.8m、西側は幅約3.0m、深さ0.8mと比較的規模が大きい。埋土は灰色細砂～粗砂で、遺物はほとんど出土しなかった。

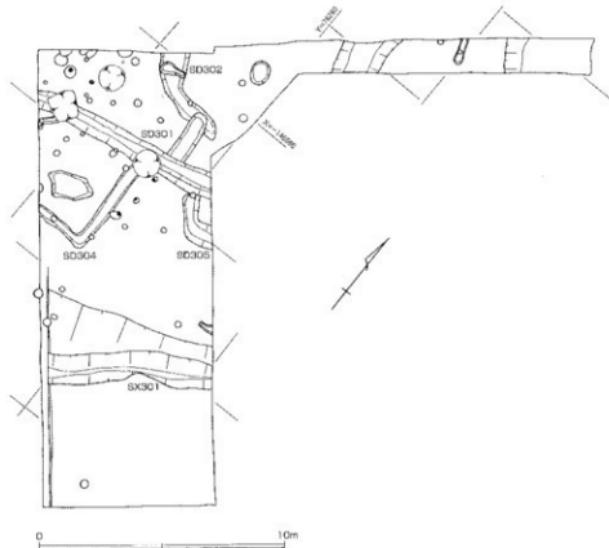


fig.27 第4-1次第3遺構面平面図

弥生時代前期 溝5条、土坑4基、ピット40基、落ち込みを検出した。なお、落ち込み以外からは時期の明確な遺物は出土していない。

溝 S D301は、自然地形に並行して掘削された溝で、その規模や断面形から集落内部を区切る溝のように考えられるが、遺物が細片のため明確な時期は判明していない。

遺構名	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	断面形	埋 土	遺物	備 考
S D301	8.0	1.0	0.3	U	暗灰色系のシルト	弥生土器	東西方向に直線的
S D302	4.0	1.0	0.15	皿	黒灰色砂質シルト	無	「く」字形に屈曲し調査区外へ
S D303	2.5	0.8	0.1	皿	黒灰色シルト質細砂	無	S D301のため南部分を消失
S D304	6.5	0.4	0.1	皿	暗灰色粘性細砂	無	「く」字形に屈曲しS D301と合流?
S D305	2.0	0.6	0.1	皿	暗灰色粘性細砂	弥生土器	「く」字形に屈曲し調査区外へ

土坑 4基の土坑を検出している。II区西端で検出したSK302は、最大長0.9m、深さ0.1mの楕円形で、埋土は暗灰色シルト質細砂である。埋土からは、弥生時代前期の土器が出土している。しかし他の土坑は、深さ0.05m前後の浅い窪み状で、遺物は出土していない。

S X301 調査区のはば1/3をはじめており、最深部は検出面から約0.5mの深さがある。北側ではなだらかな傾斜を形成し一旦急激に落ち込み、また徐々に高くなっている。埋土は3層に大別され、上・中層で大量の弥生時代前期の土器が出土している。土器はほとんど投棄された様な状態で出土しているが、肩部西端で検出した土器は掘えられたような状況である。埋甕とも考えられるが、掘形は確認されなかった。なお、土器が捨てられた時点では、湿地状であったと考えられ、肩部付近や、I区南端には多くの馬蹄印の足跡が確認された。

小結 今回は3面におよぶ遺構面を検出したが、明確な遺構を検出したのは、弥生時代前期と考えられる生活面だけであった。多量の土器が出土した落ち込みより北側に、S D301をはじめとする遺構が検出され、当時の集落の中心が近いことを示唆している。また弥生時代前期の土器とともに突堤文土器片も出土している。

第4-2次調査 今回の区画整理事業計画地の北東部分で、第3-3次調査区の西隣に位置している。盛土・耕作土・旧耕土・床土を除去すると、GL-1.0m前後で中世遺構面および古墳時代遺物包含層、さらにその下には、弥生時代末～古墳時代初期遺構面を検出している。層位的には、布留式並行期・庄内式並行期に区分できると考えられる。またGL-1.3m前後では、弥生時代中期頃の遺構面も確認している。GL-2.0mまで掘削を行ったところ、人頭大の礫を多く含む屑を確認している。

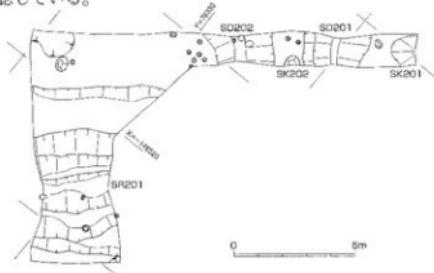


fig.28 第4-2次第2遺構面平面図

- 平安時代** 調査区全体にビットを17基検出した。柱痕跡を確認したものはI区の1基のみで、それ以外は直径0.25~0.3m、深さ0.3~0.4mで、暗灰色・淡乳茶色シルト質細砂~極細砂が堆積している。II区西部に柱間2.5mで3分間の櫛列状の遺構が検出された。
- 弥生時代末~古墳時代初頭** 検出した遺構は溝2条、土坑2基、ビット16基、自然流路1条である。ただし調査区壁面の断面観察から若干の時期差をもつことが判明している。
- 溝** II区で検出された遺構で、SD201が検出長1.4m、最大幅2.3m、深さ0.5mで断面形は開いたV字形、SD202が検出長1.4m、最大幅2.9m、深さ0.5mで断面形は逆蒲鉾形である。埋土に若干の差があるため時期差が存在する可能性はあるが、規模や方向性が共通することから、何らかの関連がある遺構と考えられる。
- 自然流路** I区のほぼ全域に位置し、規模は検出長3.6m、幅5.2m、深さ1.1mである。第1次調査のSR01と同一のものと考えられる。北肩部で一旦テラス状の平坦面を形成し、そこから大きく落ち込む。また底面は凹凸が激しく一定していない。埋土は上層がシルト質細砂層、下層が砂礫層である。上層では、拳大の礫を多く含み、完形の庄内式土器が数点出土している。下層では、木葉文をもつ弥生時代前期の土器片が少量出土している。
- 弥生時代** 溝1条・自然流路1条を検出している。溝はI区北西隅に位置し、規模は検出長4.3m、幅1.4m、深さ0.6mで南北方向に走っている。埋土は3層に分けられ、弥生時代中期と考えられる土器片が出土している。断面観察でも弥生時代末~古墳時代初頭の遺構面より下層から掘り込まれている。また自然流路の位置はほぼ変わっていない。弥生前期の遺構面は掘削深度が2mを超えると予想されたため、安全上から調査は行わなかった。
- 小結** この調査区では弥生時代前期~古墳時代初頭の自然流路を検出しただけではなく、平安時代の遺構面も検出した。この時期の遺構はこれまで確認されておらず、今後周辺で同時期の遺構のさらなる発見が期待される。
- 第4-3次調査** 平成10年度に行なわれた第1次調査地点に接している。T字形の形状をした調査区は東西約24m、南北約40mの範囲に及ぶが、堆積状況はほぼ同一である。盛土・耕作土・旧耕土・床土を除去すると、古墳時代遺物包含層若しくは、淡灰黄色砂質シルト（古墳時代初頭遺構面）を検出する。さらに1m弱下層に黒灰色シルト（弥生時代前期遺物包含層）を検出する。その下層には灰色粗砂・砂礫といった河川堆積が確認された。
- 弥生時代末~古墳時代初頭** 検出された遺構は堅穴住居2棟、掘立柱建物2棟、土器溜まり1ヶ所、溝6条、ビット41基を検出している。その他には南端では流路、西半では落ち込みを検出しており、それを境に遺構・遺物の分布が希薄になるため、集落域の境界となるものと考えられる。
- S B101** I区北部に位置しているおよそ 4×4 mの方形の堅穴住居であるが、東半分が調査区外に延びている。また北は江戸時代末頃の井戸によって、南はSD102によって切られている。大きく削平を受けており、深さは0.1m程度であるが、検出した部分についてほぼ周壁溝が検出された。またビットを数基確認しているが、主柱穴は検出されていない。北側は暗灰色シルトで盛土し、床面を仕上げている。埋土からは土師器片が出土している。
- S B102** I区北東端部に位置しているおよそ 6×6 mの方形の堅穴住居で、ほぼ1/2を検出した。検出面からの深さは約0.3mで、比較的良好な状態で検出された。内部は幅1.3mのベッド状遺構が存在し、さらに床面には厚さ1~2cmの貼床が施されていた。コーナー部に直径

0.2m、深さ0.5mの主柱穴を2基検出している。また一部の周壁溝底に板状の痕跡を確認した。埋土からは土師器が出土しており、特に上層からの出土が多かった。

S B103 I区中央部に位置している2間×1間以上の掘立柱建物である。主軸方向は現在の地割と一致している。柱間は1.2~1.4mで、掘形直径・深さが0.2~0.3mで、直径0.2mほどの柱痕跡をもつピットで構成されている。また建物は西方向に延びるようである。埋土からは土師器片が出土している。

S B104 II区中央部に位置し北側に延びる2間×1間以上の掘立柱建物である。柱穴はいずれも掘形で直径0.5~0.6m、深さ0.4m前後で、柱痕跡は0.1m前後である。埋土からは土師器片が数点出土している。



fig.29 S B102

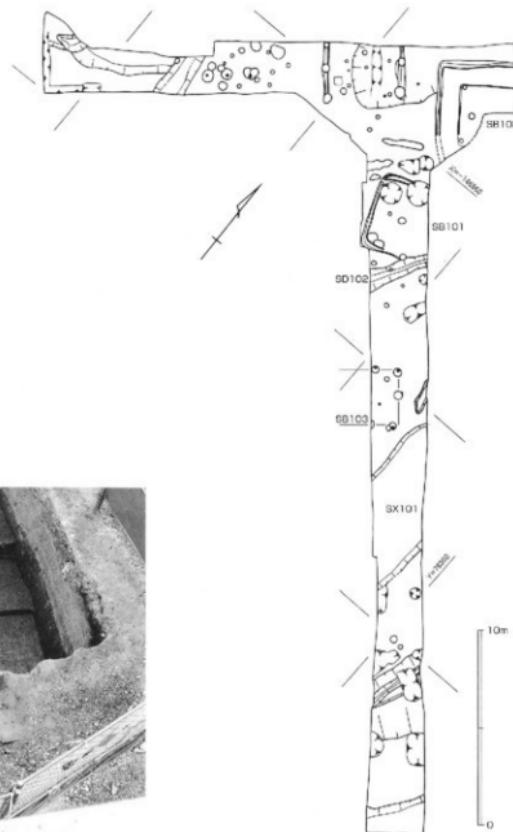


fig.30 第4-3次第1造構面平面図

- S X101** I区中央部に位置している検出長4.0m、幅4.6m、深さ0.2~0.3mの土器溝まりである。弥生時代末~古墳時代初頭の土器が多量に出土しており、完形の甕などの土器や人頭大の礫が出土している。土器は、遺構の肩部付近に比較的多量に分布する傾向がみられる。底面は平坦で、ピットなどの遺構は確認されていない。
- S D102** I区中央部に位置し、S B 101を切る検出長3.2m、幅1.0m、深さ0.3~0.4mの溝である。断面はやや崩れたV字形をしており、埋土からは土師器片が出土している。
- S D107・108** I区北端部に位置している検出長3.0m前後、幅0.3m、深さ0.3mの並行した溝である。いずれも断面形は箱形で、暗灰色・灰黄色砂質シルトが混じった土で埋まっている。溝と重複して直径0.8m、深さ0.6~0.7mのピットが溝の南端から1.3mの間隔で掘られている。南端のピットは溝上面から検出したが、他のピットは溝を掘り終えた段階で検出している。その検出状況から布堀りの掘立柱建物である可能性がある。
- 弥生時代前期** 遺構面上層には弥生時代前期の遺物包含層が堆積しており、その中から削出突帯・多条沈線・貼付突帯をめぐらす壺・甕などの土器類と蛤刃石斧片が出土している。遺物包含層を除去すると、北側では灰色粗砂を、中央~南側では淡灰褐色砂質シルトをそれぞれ遺構面として検出した。残存状況は良好ではないが上坑9基、溝1条、不明土坑1基、ピット31基を検出した。
- 土坑** 数基の土坑を除いてはすべて深さ0.05m程度で、暗灰色シルトが僅かに堆積していた。その中に残りの良かったものはSK 201である。
- S K 201は長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.2mの規模を持つ長方形土坑である。埋土は黒灰色砂質シルトで、弥生土器の小片が出土した。
- またSK 206~209は直径0.5mほどの円形土坑で、検出面から0.3m程度掘り込まれていた。炭粒が混じった暗灰色細砂交じりシルトが堆積し、弥生時代前期の土器片を含んでいた。
- S X201** I区中央やや北よりで検出された検出長一辺4.0m、深さ0.1m弱の竪穴住居状の遺構である。肩部はなだらかに落ち込み、周壁溝などは確認されなかった。
- 小結** 第1次調査で検出した弥生時代末~古墳時代初頭の集落の一部を確認した。トレンチ状の調査ではあるが、遺構の広がりを押さえることができたことや、弥生時代前期の遺物包含層が広域に広がることなど大きな成果を得た。
- 第4~4次調査** 区画整理用地の南西端にあたる調査地で、北側を平成12年度に行なわれた第3~2次調査地点、南側を第3~5次調査地点に挟まれている。調査区は、道路の拡幅部分で幅6m、延長36mの南北に長い。
- 調査区の堆積状況は、ほぼ同一である。盛土・耕作土・旧耕土・床土を除去すると、中世の遺物を含む旧耕土状の淡灰色砂質土・褐色土を経て遺構面と思われる暗褐色砂質土・淡灰黄色粘土を検出する。この層より下はシルト・細砂~粗砂・砂礫といった河川堆積が確認された。
- 中世~古墳時代** 今回の調査においては、遺構のベース層となると考えられる暗褐色砂質土や淡灰黄色粘土は検出されたものの明確な遺構等は確認されなかった。
- 弥生時代前期** 先述の暗褐色砂質土・淡灰黄色粘土層には弥生時代前期の遺物が含まれており、さら

に下層に堆積する砂・シルト層からも同時期の遺物が出土する。周辺の調査成果より弥生時代前期の流路が存在すると考えられる。さらに調査区の南側で検出された砂疊中からは縄文時代晚期頃の遺物が出土しており、より古い時期の流路が存在すると思われる。いずれの流路についても明確な肩は検出されていない。

小結 今回の調査では、明確な遺構は確認されなかった。遺構面の下層において検出された流路状の堆積も、第1次調査において確認されている弥生時代前期の遺物を多量に含む流路とも違うようである。しかし、さらに下層に縄文時代晚期の遺物を含む流路が存在することが確認された。

ただ前回の第3-5次調査との成果ともあわせて、遺構の存在が希薄なことや流路に含まれる遺物も少量であることなどから、やはり今回の調査地付近が遺跡の西限および南限である可能性が高い。

第4-5次調査 今回の区画整理計画地の南東隅付近で、平成12年度の第3-4次調査区の北隣に位置している。現在の遺跡分布範囲の東端であったが、現地表面から盛土・旧耕土層を除去したGL-1.0mで古墳時代初頭の遺物包含層・遺構面を検出した。その下層には灰色砂疊など河川状堆積が確認された。

弥生時代末～古墳時代初期 検出された遺構は土坑2基、溝1基、ピット6基である。北東部では削平が激しく、遺構は確認されていない。

土坑 SK101は長さ1.6m、幅1.2m、深さ0.15mの不整形な長楕円形土坑である。暗灰褐色シルトの埋土からは土師器片とともに、穿孔のある小型の砥石が出土している。SK102は直径0.8m、深さ0.15mの円形土坑である。埋土から土師器片が出土している。いずれの土坑も削平を受け浅く、底面も凹凸があり一定していない。そのため墓坑のようなものではないと考えられる。

S D101 調査区南西隅で検出された南北方向に走る溝である。検出長2.3m、幅0.7m、深さ0.2mで、断面形は開き気味のV字形、底面はピット状の窪みがあり一定していない。埋土からは土師器片が出土している。

ピット ほとんどが直径0.3m前後の規模で、半数のピットで直径0.15m、深さ0.2~0.4mの柱痕跡を確認している。これまで検出されてきた建物の柱間と同様な規模であるため掘立柱建物である可能性が高い。柱穴からは土師器片が出土している。

小結 今回の調査では、削平は受けているが良好な遺物包含層と遺構面を検出し、第3-3次調査の結果と異なる成果を得た。しかし北東方向では削平が激しく、包含層・遺構が検出されず、おそらく遺跡の東限は2丁目の区画内に収まる可能性が高い。また南側には流路状のものが存在するものと推定される。

第4-6次調査 北・東側は擁壁部分、南側は道路拡幅部分に相当する。西接する個人住宅部分と一括して調査を行っており、以下の遺構の記述についてはそれを含めて行う。

堆積状況は第4-5次とほぼ変わらない。ただし西部分では遺物包含層は希薄であった。淡茶灰色シルト質

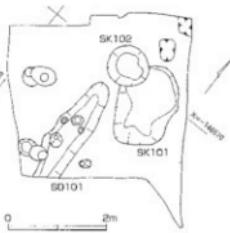


fig.31 第4-5次遺構平面図

細砂の上面で掘立柱建物1棟、溝5条、ピット4基を検出した。

S B101 南半部で検出された1間×3間以上の掘立柱建物である。柱穴はいずれも直径0.3m前後、深さ0.3mで、柱痕跡は直径0.2m前後である。東西の柱間隔は約1.3m、南北約2.8mである。建物方位は現在の地割とほぼ同様である。柱穴から土師器の小片が出土している。

その他遺構 溝は5条検出しているが、大半が幅0.4m、深さ0.1~0.2mほどの規模である。

S D103 は幅1.0m、深さ0.3mと規模はやや大きいが、個人住宅部分に延びており未調査分が多く不明な点が多い。

またピットも検出しているが、小規模で建物を構成するものとは考えられない。

小結

この調査区では、これまで遺構が乏しいと考えられた街区南側を考える上で大きな成果が得られた。さらにこの周辺で掘立柱建物などの遺構が存在する可能性が高く、遺跡の範囲が南に広がる可能性を示している。また、北東部で確認されている遺物包含層は大きな落ち込みの埋土である可能性がある。

第4-7次調査 道路拡幅部分に相当する。市営住宅入口部分に接していることや既存埋設管保護のため、調査区を3分割して調査を実施した。

遺構面は平安時代後半・弥生時代末～古墳時代初頭・弥生時代前期の3面を検出した。

平安時代後期 弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層上面で検出した遺構面で、柵列2列・溝1条・ピット8基を検出している。

柵列 調査区東半部で検出したS A101・中央部で検出したS A102があり、どちらも柱穴が直径0.3m前後、深さ約0.4m、柱痕跡は約0.2m程度の規模で、柱間距離は約2.0mある。前者は5間分を検出しており、そのうち1基には、平安時代後期の須恵器碗が柱の抜き取り後に埋められた状況が確認できた。

一方後者は、2間分を検出したのみで、目立った特徴はみられない。

溝 調査区東端で検出した幅0.4m、深さ0.2mの南北方向の溝である。埋土は淡灰褐色粗砂混じりシルトの単層で断面形は逆蒲鉾形である。埋土からは土師器小片が出土したのみであった。

弥生時代末～古墳時代初頭 遺物包含層を除去した後に検出した遺構面で、溝1条・河道1条・落ち込み1ヶ所を検出した。

河道は落ち際を検出したのみに止まっており、全体の規模等は不明なことが多い。

また、落ち込みは、遺物包含層の上が幅約3.5mで、深さ0.4mの範囲に堆積するものであった。

明確な遺構として捉えられたものは、調査区東半部で検出した溝S D204だけであった。

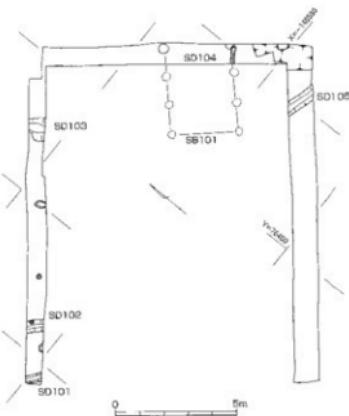


fig.32 第4-6次遺構平面図

規模は幅0.3m、深さ0.2mである。濁灰褐色砂質土が堆積しており、断面形はU字形である。遺物は出土していない。

弥生時代前期 上層の遺構面・間隔・弥生時代前期遺物包含層を除去した面で遺構を検出した。遺構は東端および西端に検出された。遺構は、土坑・溝・河道を各1基検出した。

S K301 東端に検出された長さ約0.9m、幅約0.6m、深さ約0.3mの規模の隅丸方形土坑である。断面は若干いびつな逆舟鉢形で底面は一定ではない。埋土は、暗灰色シルトで炭粒が多く交じっており、土器片・サヌカイト剝片が出土している。

S D301 調査区西端で検出した南北方向の溝である。規模は幅1.3m、深さ0.2mで、断面形は皿形である。埋土からは遺物は出土していない。断面観察等から上層の落ち込みは、この溝を踏襲して形成されていたようである。

S R301 調査区東端で検出した河道である。上層の河道とほぼ同じ場所で検出した。灰色粗砂がかなり鋭角に落ち込んでいる。既存埋設管の保護により本調査の部分が多くあり、幅・深さ等不明な点が幅5mを越える規模と推定される。埋土からは弥生土器片が出土している。

小結 第4~2次調査と同様に平安時代後期の柵列等が検出され、都市計画対象地のさらに北側に遺跡が広がる可能性が高くなった。

しかし弥生時代末~古墳時代初頭の遺構はわずかに検出されるのみに止まった。これまでの調査と同様、自然河道の右岸での遺構の希薄さをより鮮明にした。

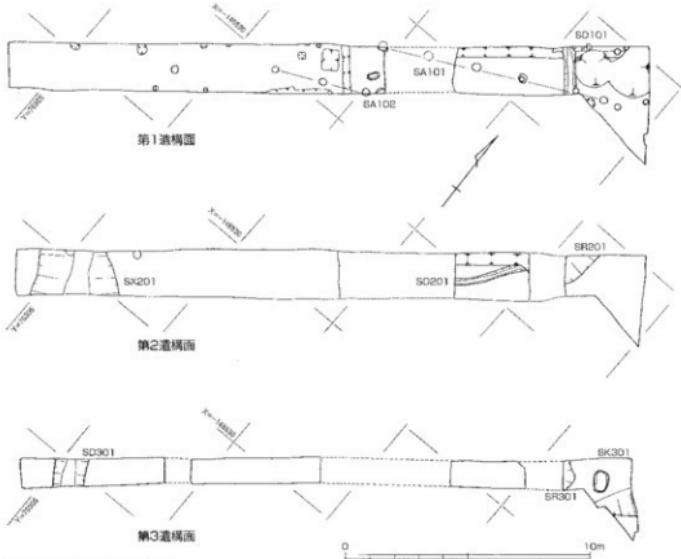


fig.33 第4~7次遺構平面図

第4-8次調査 道路予定地部分と擁壁部分の調査である。北東側の調査区をI区、南西側の調査区をII区と仮称する。

基本層序 I区の基本層序は、盛土・洪れ砂・旧耕土・黄褐色粘性砂質土（旧床土）・灰褐色砂および暗褐色粘性砂質土（遺物包含層）・暗茶灰色粘性シルト・茶灰色細砂質土・淡褐色細砂である。以下、深掘で下層を確認したが、淡黄褐色細砂質シルト・淡灰色シルト・淡褐色細砂・淡褐色シルトとなり、標高6.8mで湧水が確認された。なお、淡灰色シルト層上面で縄文時代と思われる土器片がごくわずか出土した。

II区の基本層序は、盛土・濁灰色砂質土・淡灰茶色細砂質土・黄褐色粘性土（末土）・灰褐色粘性砂質土・暗灰色粘性砂質土（マンガン含む）・黄灰色粘性シルト・灰黄色粘性シルト・灰茶色シルト・暗黄褐色シルト・淡黄褐色シルト・茶灰色細砂・淡褐色シルト質細砂（遺構基盤層）で、ほぼ水平な堆積を示す。遺構面のレベルは7.5~7.75mである。

II区-2調査区において、下層確認のため一部深掘をおこなったが、以下淡黄灰色シルト・淡黄灰色粘性細砂・淡黄灰色細砂・淡青灰色シルト・淡青灰色極細砂（植物遺体含む）・植物遺体層・青灰色粗砂となり、湧水が認められた。

淡黄灰色シルト層よりサヌカイト片が1点出土している。

I区 黄褐色粘性砂質土を除去した後、調査区東半は遺物包含層上面で、調査区西半は灰褐色砂層上面で検出した遺構面である。ピット、土坑、溝を確認した。遺構面の時期は、近隣の調査結果から、平安時代後半から鎌倉時代にかけてと思われる。

東半のピット群は東西方向に並ぶものがみうけられるが、掘立柱建物としては確認できなかった。遺構の埋土は、ほとんどが暗褐色シルト質土である。

第2遺構面 調査区東半で、暗褐色粘性砂質土を除去して検出した遺構面である。溝、ピット、土坑を検出した。遺構面の時期は、弥生時代後期から古墳時代初頭と思われる。

S D201 調査区中央で検出した溝である。東西方向に緩く弧を描く。幅1.8m、深さ0.4mで、埋土は上層が暗褐色粘性土、中層が暗褐色粘性砂質土、下層が灰褐色粗砂である。遺物は、弥生土器とサヌカイトが出土している。

S X201 調査区中央で検出した深さ0.1mほどの浅い落ち込みである。遺物は、庄内式期に属すると思われる上器が出土している。

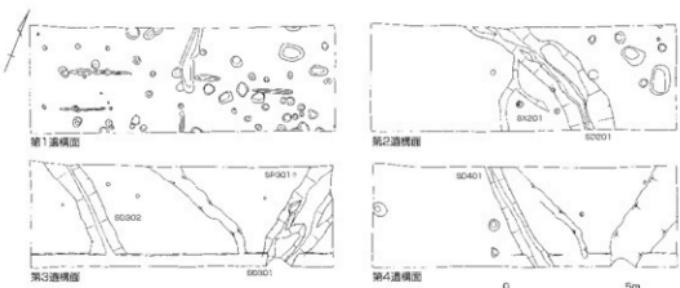


fig.34 第4-8次I区遺構平面図

- 第3遺構面** 暗茶灰色粘性シルト上面で検出した遺構面である。溝2条とピットを検出した。遺構面の時期は、弥生時代中期と思われる。
- S D301 調査区西端で検出した南北方向の溝である。幅1.9m、深さ0.8mで、埋土は黄褐色砂から暗褐色砂である。強い水流があったようで、壁面や底面は平坦ではなく凹凸が著しい。遺物は弥生土器が出土している。
- S D302 調査区東半で検出した北西～南東方向の溝である。幅1.1m、深さ0.3mを測り、断面は浅いV字形を呈する。遺物は弥生土器が出土している。
- S P301 S D301西側で検出したピットである。直径0.24m、深さ0.27mで、埋土は暗茶褐色粘性細砂質土を主体とする。遺物は、弥生土器が出土している。
- 第4遺構面** 淡褐色細砂層上面で検出した遺構面である。中央部から西は緩く傾斜していく、約0.2m深くなる。遺構は、溝とピットを検出した。遺構面の時期は、弥生時代前期から中期にかけてと思われる。
- S D401 調査区中央で検出した北西～南東方向の溝である。幅0.86m、深さ0.33mで、埋土は暗褐色シルト質細砂を主体とする。遺物は、弥生時代中期の壺形土器が、底部が欠損しているもののはぼ直立した状態で出土している。検出は第4面であったが、出土遺物から考えると第3面での遺構であった可能性が高い。
- II区-1 工事影響深度の関係で現地表下1mの灰茶色シルト層までしか掘削していない。遺物は、旧耕土および黄灰色粘性シルトより土師器が出土している。遺構は確認できなかった。
- II区-2 西側は現在も排水路が供用されているため、調査予定範囲は全掘できていない。
灰褐色粘性砂質土層以下、各層ごとに精査をおこなったが遺構は確認されず、現地表下約1.3mの淡褐色シルト質細砂層上面でピット、土坑を検出した。遺物は黄灰色粘性シルトから土師器、灰茶色シルト・淡黄褐色シルト・茶灰色細砂から弥生土器が出土している。
各遺構の埋土は茶灰色細砂で、深さ0.1m以下の浅いものがほとんどである。遺構からは、小片ながら弥生土器が出土している。
- II区-3 II区-2同様、淡褐色シルト質細砂層上面で上坑、ピットを検出した。遺物は、黄灰色粘性シルトから土師器、灰茶色シルト・茶灰色細砂から弥生土器が出土している。
各遺構の埋土は茶灰色細砂で、深さ0.1m以下の浅いものがほとんどである。遺物は、弥生土器が出土している。
- II区-4 調査面積が著しく狭小であったため、明瞭な遺構を確認するにはいたらなかった。
- 小結** 今回の調査では、I区において4時期の遺構面を検出できた。第1遺構面はピット群が検出され、掘立柱建物が存在した可能性がある。第2面以下は溝が主体となるが、東西と南北の2方向が認められる。遺物は、弥生時代中期の土器が出土しており、当該期の遺構の分布に関して新たな資料を得ることができた。
- またII区-2、II区-3では、淡褐色シルト質細砂層上面で遺構が検出され、当遺跡の範囲が南側にも若干拡がる可能性が高まつた。
- 第4-9次調査** 今回の調査は区画道路予定地にあたり、西に隣接する個人住宅新築予定地と一括して調査を実施した。以下の記述については個人住宅新築予定部分（第8次調査）も含めて行う。
隣接する第4-1次・第4-7次調査地点の調査成果と同様、弥生時代前期から平安時代後

半の3面の遺構面を検出した。

第1遺構面 平安時代後半の遺構面で、弥生時代末から古墳時代初頭の包含層上面で検出された。南西方向に緩やかに傾斜しており、溝・土坑等が数基検出されたにとどまる。

S K101 長径約2.2m、短径約1.7m、深さ0.15mを測る不定円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

S K102 長径1.8m以上、短径約1.6m、深さ0.15mの不定形の土坑である。埋土より直径10cm程度の円礫を10数点検出したが、遺物は出土しなかった。

S D101 幅約1.5m、深さ約0.6mの溝で、調査区を東西方向に流れる。埋土より平安時代後半の遺物が若干出土した。

S X101 深さ0.1m程度の不定形の落ち込みで、調査区の西側に続く遺構である。遺物の出土はなかった。

S X102 短辺1.8m、長辺2.6m以上の不定形の遺構である。遺物の出土はない。

第2遺構面 弥生時代末から古墳時代初頭の遺構面である。南西方向に緩やかに傾斜しており、溝と不明土坑が検出されたにとどまる。

S D201 幅約2.0m、深さ0.8mの溝で、調査区のほぼ中央を南北方向に流れる溝である。埋土より当時期の遺物が少量出土した。

S X201 短辺約2.3m、長辺約3.7mの不定形の遺構である。北端部は逆L形に曲がる溝が付設されている。当溝の用途は不明である。南辺部は2段に落ち込み、南壁に取り付く溝が確認できた。用途は不明である。

第3遺構面 弥生時代前期後半の遺構面で、南方向に緩やかに傾斜している。柱穴、土坑等が数基検出された。

S P301 直径約0.5m、深さ0.3mの柱穴で、弥生時代前期後半の壺が、約1/2個体分出土した。対応する柱穴は検出できなかった。

S K301 短辺約0.5m、長辺1.0m以上、深さ約0.05mの土坑である。杭状の木製品の痕跡が検出された。

小結 弥生時代前期後半の遺構・遺物は比較的豊富で、第4-1次調査地点の様相と類似している。第4-7次調査地点では、当時期の遺構の分布は希薄である事から、前期の居住域の広がりは、北西方向から南東方向に伸びる微高地上に展開することが判明した。弥生時代末以降の遺構分布は希薄になり、第4-3次地点で見られたような居住域は、当調査区までは展開しない。平安時代後半も同様であり、以降は生産域として利用されている。

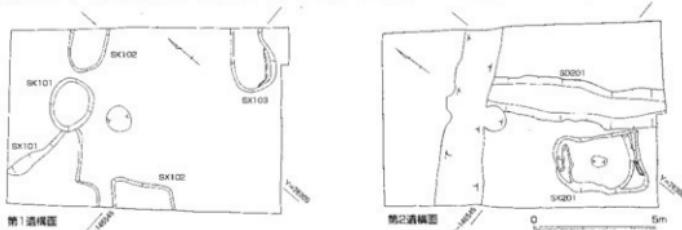


fig.35 第4-9次遺構平面図

3.まとめ

今年度は、現在のトレンチ調査であるが遺跡範囲内を満遍なく調査することができた。その結果、第4-4次調査区では明確な遺構は確認できなかったが、他の調査区からは縄文時代末～中世の遺構・遺物が発見された。今回の重要な成果として挙げられるのは、街区北側で検出された平安時代後期の柵列などの遺構群である。これまで遺物は出土していたが、柱穴などの遺構は確認されておらず、第4-2次・4-7次・4-9次調査区を中心として集落が形成された可能性が高くなった。

また、第1次調査で確認された弥生時代末～古墳時代初頭の集落が、さらに南東側に延びていることが判明した。第4-3次調査区は集落の中心と考えられ、竪穴住居・掘立柱建物などが4棟も検出された。また第4-6次調査区で検出された掘立柱建物も方位や規模から同時期のものと考えられ、集落が2丁目街区の南端まで広がっていたことが判明した。一方、第4-4次調査区など遺跡の西側は弥生時代末～古墳時代初頭の建物などは確認されず、流路や湿地のような地形が広がっていたものと考えられる。

第1次調査では、流路肩部で土器を集積させた祭祀遺構が検出されており、今回も同じ流路から磨き歯文を施した壺や、赤色顔料が塗布された高环などの遺物が出土しており、周辺で祭祀が行われていたことが推測される。一方、第4-6次調査区では西部瀬戸内地域の影響を受けた壺、第4-2次調査区では讃岐もしくは河内産と考えられる壺片が出土しており、兵庫松本遺跡の交流範囲を考える上で重要な遺物であるといえる。

若干であるが、弥生時代中期と考えられる遺構が第4-2次・4-8次調査区で検出された。これまでこの時期の遺構は確認されておらず、集落が縄文時代末～古墳時代初頭に至るまではば途切れることなく営まれた集落であることが判明した。また北隣に位置する東山遺跡との関係も今後考えていく必要がある。

さらに今回の調査では、これまであまり明確ではなかった弥生時代前期の遺構・遺物が比較的多く検出された。遺構は主に北部から中央部に存在し、ほとんどは浅い窪みもしくは土坑であった。しかし第4-1次調査区では溝やピットなどが密集して検出されており、当時の集落が現在の遺跡範囲の北東隅を中心に広がっていたものと推測する。また遺物の大半は遺物包含層からの出土であるが、ヘラ描き沈線を2～5条施す壺や、削出突帯・貼付突帯を施す壺などが出土した。これらの遺物からおそらく遺構面は前期後半に属するものと考えられる。しかし、第4-2次調査区のS R201から木葉文土器が出土していることや、下層の砂礫層から突帯文土器がわずかながら出土することから、兵庫松本遺跡周辺に縄文時代末～弥生時代前期中頃の遺跡が存在する可能性がある。

6. 大開遺跡 第10次調査

1. はじめに

大開遺跡は、六甲山系南面、旧湊川右岸の沖積地に所在する。これまでの9次にわたる発掘調査の結果、縄文時代晚期から近世にいたるまでの遺構・遺物が確認されている。とりわけ1988年、はじめて行われた発掘調査で、弥生時代前期前半の環濠集落のほぼ全域が確認され注目をあびた。その後、第1次調査の東で行われた第5次調査・第8次調査で第1次調査のものとは別の環濠と思われる時期的にもやや新しい溝が確認され、大開遺跡における弥生時代集落の変遷についての手掛かりが得られるようになった。しかし、これらは小面積の調査で、それぞれで確認された溝同士の関係、また、どの位置に集落が展開するのかも明らかにされていなかった。



fig.36
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

遺構面

今回の調査は集合住宅の建設によって遺跡が破壊される範囲・深度について実施した。

発掘調査の結果、4面で遺構を検出した。それぞれの標高は以下の通りである。

現 地 表 (1a層上面)	: 約4.4~4.1m
第1遺構面 (5a層下面 中世)	: 約3.4~3.5m
第2遺構面 (5b層下面 古代~中世)	: 約3.2~3.5m
第3遺構面-1 (6a層下面 弥生時代前期)	: 約3.2~3.3m
第3遺構面-2 (6b層下面 弥生時代前期)	: 約3.1m

この遺跡は遺構の検出が困難で、淡い色のシルト層である場合など遺構の底面が明瞭な場合、この底面を追っていくと検出時のプランとおよそ違ってくることがある。過

去の調査における遺構プランが不整形であるのもそのためであろう。

第2面の検出時に第3面の遺構の一部、炭などを多く含むものについてはこれを検出できるものがあった。また環濠についても平面的には確認できなかったが、土層断面を観察すると6a層のうちから切り込まれているようである。したがって第3遺構面で確認した遺構のほとんどは本来第2遺構面を確認した面から掘り込まれたものと考えられる。

また第3遺構面-2で検出した遺構のうち、土層断面観察の結果、明らかに第3遺構面-2のものと確認できた遺構も存在するが、第3遺構面-1から切り込まれたものであることを確認できたものも存在する。両遺構面はその弁別が困難であり、時期的にも共に弥生時代前期であるため、ここでは両面をあわせて報告する。

なお第3遺構面の調査完了後、下層の状況を確認するため、一部断ち割りをおこなったが、この範囲内では下層に遺構・遺物は確認されなかった。

第1遺構面 中世の遺構面。畠の耕作痕と掘立柱建物が検出された。

畠 この耕作痕に対応する耕土である5a層から出土した遺物の主体は中世のものである。より細かな時期の比定は遺物の整理後に行いたいが、中世でも後半のものであると思われる。なお、注意すべき遺物として馬の歯と動物の骨4点が近接した位置から出土している。

S B01 同じ面で確認された畠より新しい遺構である。真北から西へ32°振った方向に主軸をもつ掘立柱建物で、柱は南北2間×東西2間分が検出されたが、調査区外に建物の範囲は拡がるものと思われる。南北の柱間は約1.8m、東西の柱間は約2.5m。柱穴プランは直径約0.25~0.3mの円形すべてに直径0.1~0.15mの断面円形の柱痕が残る。出土遺物は小破片ばかりで、遺物からの時期判断は困難だが、畠との関係、また埋土の色調などから中世でも新しい方、あるいは近世のものである可能性を考えられよう。

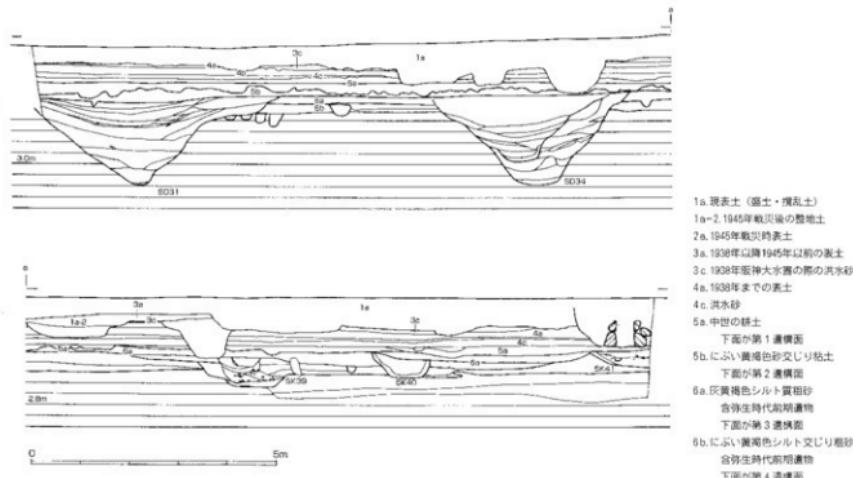


fig.37 調査区西壁土層断面図

第2遺構面 5b層下面で検出される遺構面。平安時代後期から室町時代にかけての遺構面。掘立柱建物・土坑・柱穴などが検出された。

S B02 調査区南部で検出された掘立柱建物で、真北から西に35°振った方向に主軸をもち、南北4間(8.0m)×東西1間が検出された。東の調査区外に建物の範囲は拡がるものと思われる。南北の柱間は約1.8~2.2m、東西の柱間は約2.1~2.2m。柱穴プランは直径約0.3~0.4mの円形でそのうち4本に直径約0.2mの断面円形の柱痕が残っていた。P4の柱痕内から土師器小皿1枚が出土している。出土した遺物からこの遺構は平安時代終わりごろのものと推測される。その他全域で柱穴は確認されているが、建物などとして把握できたものは他になかった。

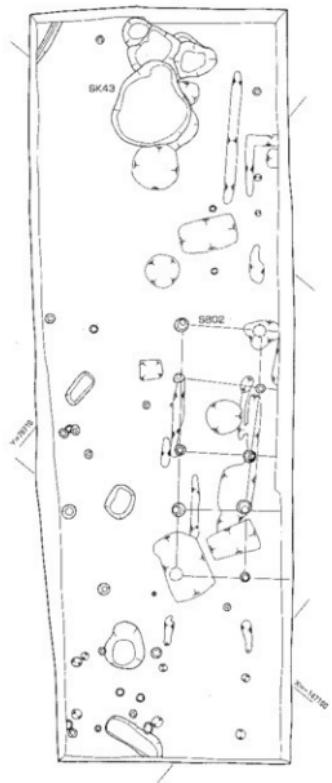


fig.38 第2遺構面平面図

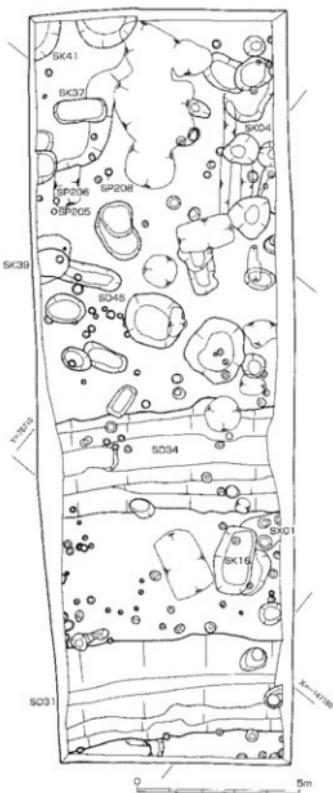


fig.39 第3遺構面平面図

第3遺構面 第3遺構面-1は6a層下面で、第3遺構面-2は6b層下面で検出した遺構面である。弥生時代前期の環濠・土坑・溝・柱穴などが検出された。

S D31 調査区南部で確認された集落を囲う環濠である。環濠幅約3.4m、底面幅約0.4m、6b層下面からの深さ約1.7mを測る断面V字形の溝である。底面の標高は1.6m前後で、底面には段違いとなっている部分がある。これがどういう意味合いをもつものか、環濠掘削の単位などとして考えられるのか興味をひかれる。

下半の埋土は土壌化の進んだ粘土層で、土器の他、炭粒子や焼け焦げた木材等が比較的多く出土した。この他、炭化した鶏塊・猪牙・骨等が出土している。

S D31は、第5次調査地で確認された環濠と形状が近似しており、位置的な関係からも両者は同一のものと判断される。第5次調査では、この南側で数棟の堅穴住居が確認されており、その状況から、この遺構は多重に巡らされる一番内側の環濠である可能性が高い。S D31の外側には、約3.8mの間隔をおいて、別の環濠S D34が存在する。

S D34 集落を囲う環濠である。環濠幅約3.4m、底面幅約0.7m、6a層上面からの深さ約1.7mを測る断面逆台形の溝である。底面の標高は1.6m前後で、この環濠も底面が段違いとなっている部分を確認した。またS D31では確認されなかった環濠の掘りなおし、あるいは浚渫の行われている状況が確認されている。埋土の下層は土壌化の進んだ粘土層で、遺物の出土量はS D31より少なく、炭化物等あまり目につかない。

S K16 調査区南部、S D31とS D34の間にある隅円長方形プランの土坑である。一辺約2.2m×約1.2m、遺構検出面からの深さ0.3mを測る。S X01と切り合い関係にあり、S X01より古い遺構である。土器類がまとまって出土している。なお試掘調査の際、試掘坑がこの遺構をかすめており、その際に土器とともに大型蛤刃石斧が出土している。あるいはこの遺構に属する遺物かも知れない。

S X01 調査区南部、S D31とS D34間にある遺構である。1.3m×0.7mの範囲で焼けて赤化した粘土があり、その下面も炭等を含む遺構である。S K16と切り合い関係にあり、S X01の方が新しい。粘土中からも若干の土器が出土している。火を扱う焼成あるいは鋳造にかかる遺構と思われるが判然としない。同様の遺構は第5次調査でも確認されている。

土坑群 S D34の北側では炭粒子を多量に含む土坑が10基以上確認されている。それらのうちS K41・S K39等からは大量の土器が出土している。とりわけS K04からは土器・礫とともに石包丁片・砥石・石匙・粘土塊・骨片などが出土しており、注目に値する。



fig.40 第3遺構面全景

S K37 調査区の北部で確認された約1.7m×約0.8mの隅円長方形プランの土坑である。遺構確認面からの深さ0.4mを測る。遺構の北東隅、埋土上位から横倒しになった状態で甕形土器1個体が出土している。この甕の内部および口縁付近だけに炭が集中して出土しており、当初この炭は甕に納められていたものであることが推測される。

S D45 調査区中部で確認された溝で、多量の上器が出土したS K39からのびる。遺構埋土は炭が主体である。

地震の痕跡 調査区北部において地震の痕跡が確認された。S D45・S P205・S P206・S P208・S K37等の遺構で地震による北から南への上層の側方移動の起きている状況が確認できた。

3.まとめ 今回の調査でも周辺で行われた調査と同様、中世の耕作地・平安時代の掘立柱建物・弥生時代前期の環濠集落などが確認されたが、他の調査とあわせ、環濠集落の規模等が明らかになったことが特筆される成果としてあげられる。

今回の調査区の西で実施した第9次調査地においても二重の環濠が確認されている。溝底のレベルは第5次調査区・第10次調査区が標高約1.6mであるのに対し、第9次調査区は標高約2.1mである。第9次調査地点の方が、0.5mほど高いものの、プラン的には第10次調査区のものとうまくつながる。また、環濠の底の平坦面も内側が幅狭く、外側が広いという共通性があり、外側の環濠が掘りなおされている点も両者共通している。両地点の

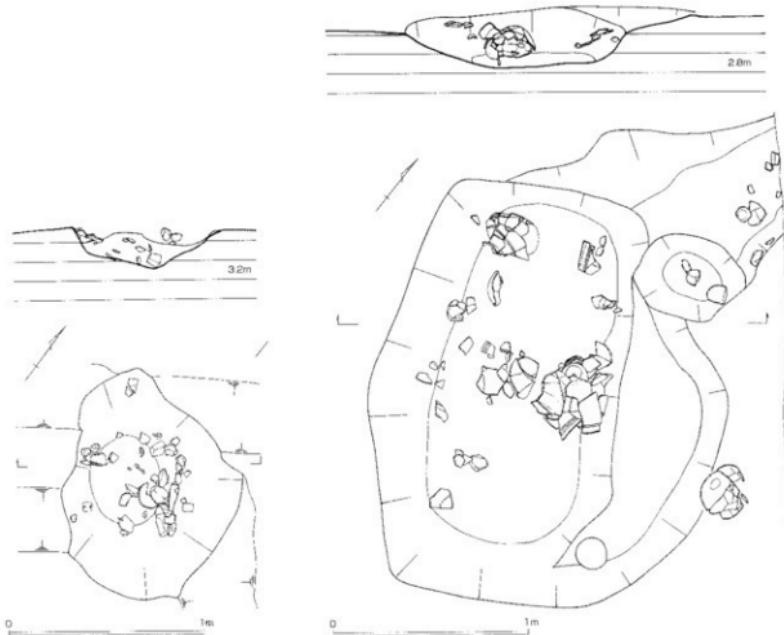


fig.41 S K04

fig.42 S K16・S X01

環濠は同一の造構と考えてよいだろう。先の第5次調査地点で確認された環濠と合わせると、この環濠集落の南西-東北方向の内法は、約120mに復元することができる。

また、第8次調査区では、この2本の環濠とは別の環濠が確認されている。この環濠も内側2本の環濠の形状を相似形になぞらえたかたちでカーブしている。第1次調査区にこの環濠の延長と重なる部分があるが、その部分は大きく攪乱を受けており、その存否が確認できない。この溝が同心円状に巡る3重目の環濠になるのか、あるいは拡張ないし張出し部になるのかは現在これを判断できないが、いずれにせよ大規模な環濠集落になることにはかわりない。

多重に環濠をめぐらす弥生時代の集落は近年類例が増えてきており、ここにもう一つの例を加えることができた。とりわけこの遺跡で貴重なのは環濠集落が2つ近接して確認されたことである。第1次調査で確認された内法東西幅約65mの小型環濠集落（第1期環濠集落と仮称）は弥生時代前期前半のものであるに対し、今回おおよその規模が明らかになった大型の環濠集落（第2期環濠集落）から出土する遺物は（出土土器の整理が行われていない現状では確定できないが）、第1期集落の廃絶する時期に前後する時期のものが一番古いものであるよう、弥生時代前期中頃から後半にかけて展開する集落であることは大勢として認められる。

のことから初期入植者のごく小さなムラから規模の大きなムラへと移動する状況がとりあえず読み取れる。これから検討課題として、第1期環濠集落を拡張あるいは取り込む形で集落を拡張するのではなく、これを放棄したかのようなかたちでその隣接地に大型の第2期環濠集落を展開した理由の解明等があげられるだろう。

また第1期環濠集落も環濠の拡張が行われているが、第2期環濠集落は、SD31の掘りなおしがなされず、同じ弥生時代前期後半のなかでその埋没後にそこに土坑が掘削されるという状況があり、逆にSD34（=第5次調査のSD301・第9次調査のSD201）では環濠の掘りなおしが行われている状況等が確認されており、第2期集落のなかでの集落の変遷の解明も必要になってこよう。

第2期環濠集落の構造は、環濠という仕切りによって明瞭に区分されている。SD31の内側の区画は竪穴住居が複数確認され、居住域、集落の中心であることが明らかである。SD31（=第3次調査・SD201）からは土器・焼けた木材等とともに焼けた鶴殻・歯骨・歯牙などが出土しており、生活の場という雰囲気を出している。

これに対してSD34の外側では土坑や溝が確認され、それらの造構埋土には炭が多く含まれるのが特徴となっている。この区域では今のところ住居址は確認されておらず、火を扱う作業を行う、あるいはそれによって生じた不要物を廃棄する区画ということになろうか。

また第8次調査で確認されている三重目（？）の環濠からは「木製農具」が多く出土しているのに対し、内側の環濠にはそれがない。「木製農具」が農具であるなら、これらを環濠集落の外側には農地が存在するという常識的な予想に合致する出土遺物として位置づけられるだろう。

7. 兵庫津遺跡 第25次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区の海岸部に立地する古代から近世に及ぶ複合遺跡である。これまでの調査で中世後半から近世にかけての兵庫の町の様子が次第に明らかになってきている。今回の調査地である恵林寺は兵庫津遺跡の北東部に位置し、寺院が集中しているいわゆる「寺町」に所在する。元禄9年の『元禄兵庫津絵図』によると寺の敷地は現在よりも広く東西方向に長い長方形の敷地であったようである。調査の対象となった地点は、恵林寺と隣接する西光寺の境界付近に当たる。今回の調査は寺院本堂再建工事に伴うもので、工事により遺跡に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。



fig.43
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査地の基本土層は、①盛土・擾乱、②暗褐色砂質土、③暗茶褐色細砂、④褐色粗砂、⑤暗灰色細砂、⑥暗褐色細砂、⑦暗灰色細砂、⑧暗茶灰色細砂、⑨暗灰色細砂、⑩淡灰黄色中砂であり、このうち2層以下9層までに遺物が含まれている。作業は盛土・擾乱を重機で掘削し、それ以下を人力によって掘削し遺構の検出に努めた。その結果計9面の遺構面を確認した。調査区の南半部は従前の建物による擾乱が著しく、第5遺構面より下層の遺構面のみ残存していた。但し現在遺物洗浄等の整理が完了しておらず、以下の記述は現地調査終了時の見解で、今後の整理作業の進捗により訂正の必要が生じると考えられる。

第1遺構面 盛土・擾乱を除去した段階で検出した遺構面で調査区の北半で町屋と考えられる礎石建物1棟と土間及び瓦積みの井戸1基を検出した。調査区南半部は大きく擾乱を受けており礎石と思われる石は数石存在するものの建物としてはまとまらなかった。遺構の時期についてはおそらく明治時代のものと思われる。

- 第2遺構面** 第1遺構面のベース土である暗褐色砂質土を除去した後に検出した遺構面で、六角形もしくは八角形と思われる基壇の縁石を検出した。削平が著しく基壇の高まりは確認できなかった。出土した陶器より幕末から明治時代のものと思われる。なお、アワビ等の貝殻が多く出土している。
- 第3遺構面** 第2遺構面のベース土である暗茶褐色細砂を除去すると礎石列や縁石等を検出した。遺存状況が悪く建物としてはまとまらないが、第1遺構面と同一方向の石列である。19世紀前半から中頃の時期のものと考えられる。
- 第4遺構面** 第3遺構面のベース土である褐色粗砂は盛土であり、これを除去したところ第4遺構面を検出した。主な遺構は胞衣壺埋納遺構、石組遺構、礎石、土間、瓦列、土坑等である。石組遺構は貯蔵施設と考えられるもので、北側部分約2mのみ残存している。瓦列は約3mの長さで半瓦を立てており、南側の地面が一段高くなっている。建物の敷地の区画であろうと思われる。調査区の北半には土間を検出したが、付近の礎石は除去されたのか存在せず、建物の規模は不明である。遺構面の時期は18世紀後半頃であろう。

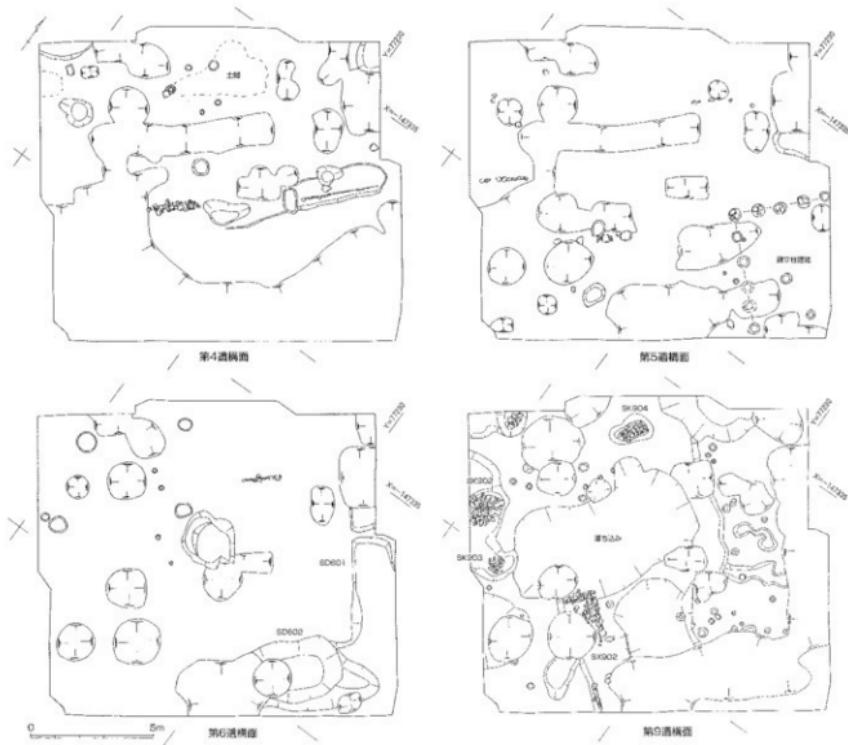


fig.44 遺構平面図

第5遺構面 第4遺構面のベース土である暗灰色細砂を除去すると第5遺構面になり、掘立柱建物、礎石列、縁石等を検出した。礎石列、縁石列については遺存状況が悪く建物を復元することはできなかった。

掘立柱建物 東西4間以上、南北5間以上の規模で、柱間は約1mである。柱穴は直径約0.5m、深さ0.2mの規模で、削平が著しいが柱を受ける根石が遺存しているものもある。建物の用途は不明である。第5遺構面の時期は18世紀中頃を中心とした時期であろう。

第6遺構面 第5遺構面のベース土である暗褐色細砂を除去した後に検出した遺構面で、検出遺構は縁石、ピット、土坑、溝である。ピット、縁石については建物としてまとまるものはない。溝は2条検出した。

S D601 幅約2m以上、深さ約0.8mの南北方向に延びる溝である。隣接する西光寺との境界の溝と推定される。

S D602 幅約2.5m、深さ1.1mの東西方向に延びる溝である。埋土の堆積状況から、ある時期には水が溜まっていたことがわかる。この溝の肩付近の埋土より土師器皿いわゆる「かわらけ」が28ℓコンテナ4箱分出土した。なお、埋土の堆積状況からこの溝は第5遺構面を造成する際に人工的に埋められていることがわかる。第6遺構面の時期は18世紀前半から中頃と考えられる。

第7遺構面 第6遺構面のベース土である暗灰色細砂を除去した後に検出した遺構面であり、調査区の北西部にのみ遺構が存在する。検出遺構は、土坑5基と井戸1基である。

井戸 工事影響深度の関係で完掘できなかったが掘形は直径2.5mであり、内部に直径約0.8~0.9mの瓦積みの井戸枠がある。第7遺構面の時期は18世紀前半頃と考えられる。

第8遺構面 第7遺構面のベース土である暗茶灰色細砂を除去した後に検出した遺構面であり、土坑8基、溝1条、ピット2基を検出した。土坑は円形のものと方形のものがあるが、埋土に遺物をあまり含んでおらず、その用途は不明である。そのうち1基には埋土に棟瓦を含むものが見受けられる。遺構面の時期は17世紀後半~末頃と考えられる。



fig.45 第4遺構面全景



fig.46 第9遺構面全景

第9遺構面	第8遺構面はベース土が暗灰色細砂であるが、東半部の一部についてはこの層が存在せず、10層の淡灰黄色中砂がベース土となっている。このうち暗灰色細砂を除去したところ、土坑4基、ピット多数、不明遺構1基、落ち込み等を検出した。
ピット	いずれも直徑0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mのもので建物としてはまとまらなかった。
S K902	直径約1.5mの円形で、内部に川原石を多数含む集石土坑である。
S K903	直径約0.8mの円形で、内部に川原石を多数含む集石土坑である。
S K904	長辺約1.6m、短辺約1.0m、深さ約0.3mの長方形の土坑で、底に川原石を敷き詰めている。用途は不明である。
S X902	短辺1.6m、長辺4.8m以上、深さ約0.4mの長方形の落ち込みで、現況では北東部コーナー付近に石積みが残存する。石積みの上部は削平されているが、現存で3段確認できる。石積みの面が内側で揃っており、地下倉庫のような貯蔵施設であると思われる。
落ち込み	調査区の中央部で検出したもので、工事影響深度の関係で完掘できなかったが、埋土に川原石を多く含んでおり、第8遺構面造成時に埋められたものと考えられる。出土遺物には15～16世紀代の土器が目立つが、第9遺構面がこの時期に該当するかは明らかではない。
出土遺物	各遺構面より陶磁器・瓦が多数出土している。また、寛永通宝も約50枚程度出土している。土人形、キセル、かんざし等もあるが、それぞれ未整理のため詳細な内容を明確にできない。第9遺構面では土師器羽釜、瀬戸美濃の陶器が出土している。なお、遺物総数は28ℓコンテナ30箱である。

3.まとめ

今回の調査は、元禄9年『元禄兵庫津絵図』では恵林寺の境内に当たるが、発掘調査では明確に寺院関連の遺構を検出することはできなかった。瓦についても本瓦の出土は少なく、棟瓦が多く出土している。寺院の中心的な建物よりも、庫裏のような町屋に類似した建物が建っていたことが考えられる。全般的に各遺構面は造成による削平・攪乱が著しく、礎石・縁石が除去されており、建物の区画等も明らかにすることはできなかったが、七宮神社付近で検出される宝永5年(1708)の大火の焼上層が今回の調査地では認められず、宝永の大火がこの地に及んでいなかったことが明らかになった。

8. 兵庫津遺跡 第26次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、旧湊川河口の西側に位置する、兵庫の港と集落により構成される遺跡である。兵庫津は古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港として栄えたといわれ、平清盛による修復後は日宋貿易の港として繁栄した。中世に入ると「兵庫津」と呼ばれる様になり、戦火や地震などにより度々壊滅的な打撃を受けながらも、基幹港として栄え、町の中心には兵庫城が築かれた。江戸時代には西国街道が迂回して兵庫の町を通る様になり、交通の要衝として繁栄し、幕末には重要港として兵庫（神戸）開港を行った。

今回の調査は共同住宅建築に伴うもので、工事による掘削影響範囲について発掘調査を実施した。



fig.47
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査区内の基本土層は近代～現代の盛上、搅乱層の下に近世の遺構面が存在する。これより下層の褐色シルト質細砂（31層）、褐色砂質シルト（33層）は奈良時代～中世、その下層の灰色混疊細砂（34層）は、古墳時代～平安時代の遺物包含層である。この下層は褐色混疊粗砂（36層）で、東側は砂丘状に高く淡茶褐色粗砂（37層）である。その間には黒褐色シルト（35層）等の湿地が存在する。この面上で第2遺構面を検出した。

第1遺構面

町家群

4軒以上の町家を検出した。後世の搅乱による影響が著しく、また、礎石等の遺構も存在していないかったため、規模、構造については不明である。長方形の区画が、道路側に対して、長軸を垂直にして検出されたことから、町家群であると考えられる。

最も残存状況の良好なS B03で東西8m、南北4m程と考えられる。軟弱な地盤を整地し、建物を構築したものと推定される。

S D01

南北方向に延び、やや南に振りながら屈曲して西側に続く、石垣で護岸をした濠状遺構である。幅は南側で3.2m、中央部で3.1m、深さは検出面から0.85～1.28mで北側へ行く程深くなっている。底部からは常に湧水があり、水を湛えた状態であったと考えられる。

石垣は人頭大の石により築かれているが、砂地である軟弱な地盤であるため直径0.3～

0.4m大の丸太材を根太として敷き、杭で固定をして、その上に石垣を構築している。石垣は2～3段が遺存していたが、元来は、もう少し高かったものと推定される。また、改修も行われたと思われ、東側部分の南端部は大振りな石材を使用しているが、根太材は使用しておらず、出土遺物からも改修以前のものであると考えられる。

埋土はシルト層を中心とした、砂とシルトの交互堆積層であるが、「濠さらえ」などの清掃が行われたと考えられる。近世後期～近代にかけての陶磁器、土師器、瓦、木製品、石造物、銅錢などの遺物が多量に出土した。多くは18世紀～19世紀前半にかけてのもので、陶磁器、瓦が大半を占める。出土した遺物には楕台、五輪塔、石仏等寺院に関連するものが多く含まれている。

S D01は検出された位置、形状から元禄9年（1696）の『元禄兵庫津絵図』に描かれた真光寺の境内地を巡る濠であると考えられる。

S D02 東西方向の溝で、調査区西側へと続いている。幅は上部が後世の擾乱の影響を受けていたため、判然としないが、調査区西壁の土層観察から2.5m前後と推定される。深さは同

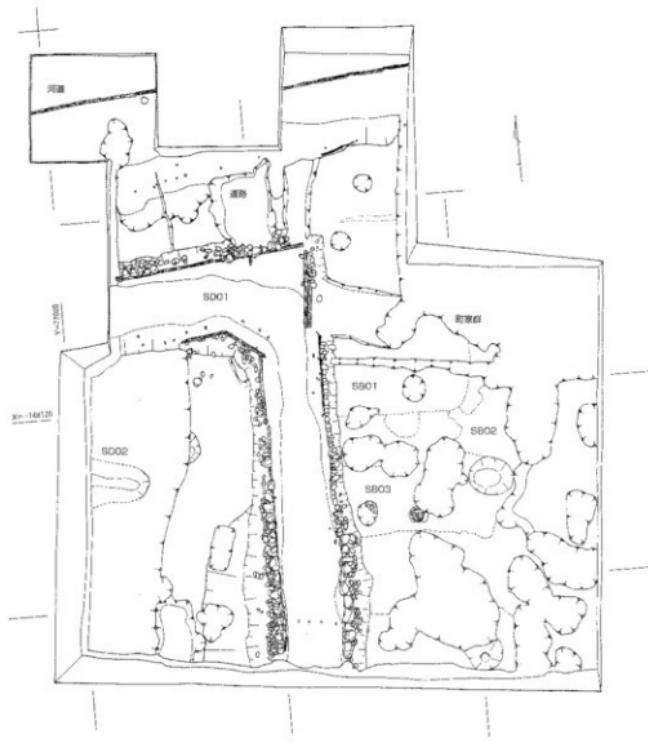


fig.48 第1遺構面平面図

じく攪乱の影響と工事影響深度の関係により、底まで掘削ができなかったが、西壁の土層観察から0.7m以上と考えられる。

S E01 北側は後世の攪乱により消滅している。井戸の掘形は直径2.2mである。板材を2段に組み、井戸枠としているが、上段は上部が攪乱を受け、また腐朽してわずかに遺存している状況であった。下段については良好な状況で遺存していたが、調査区西壁崩落の危険が高く、検出面から深さ1.3mまで掘削を行ったが、底まで確認することはできなかった。断割り断面から8枚の板材を八角形に組み合わせて井戸枠としたと考えられ、木の皮を巻いて補強を行っていた。埋土中から、壁材と考えられる漆喰の塊、瓦が出土した。

河道 今回の調査で検出したのは南側の岸と考えられ、河道は北側に広がるものと推定される。砂とシルト層を交互に積み、杭、木材で護岸をした堤が検出された。

河道内には根太材と考えられる丸太材列が検出された。護岸を目的としたものであると考えられるが、堤の護岸杭列よりも3.5～5.0m河道内に位置しており、丸太材下部から出土した遺物や、明治14年（1881）の『兵庫神戸実測図』では『元禄兵庫津絵図』よりも河道の幅が狭くなっていることから、近世後半～近代初頭にかけて改修がなされたものと考えられる。『元禄兵庫津絵図』の「須佐之入江」に注ぐ川が、今回検出した河道にあたるものと考えられる。近世後半から近代にかけての陶磁器、瓦が出土した。

道路 『元禄兵庫津絵図』に描かれた、道路と考えられる整地面を検出した。從前建物の攪乱等の影響で、ごく一部で遺存していた。上から茶灰褐色細砂、褐灰色細砂が水平に堆積し、上層の茶灰褐色細砂は固くしまっていた。S D01掘形と河道の杭列から復元した道路の幅は3.5mである。

第2遺構面 井戸1基、土坑3基、ピット2基
を検出した。

S E201 掘形の直径は1.6m、検出面からの深さ0.8mで、下段は長さ10cmの長台形の板材12枚を木の皮で巻いて、桶状に組んだものを据え、上段に曲物を組み合わせて井戸枠としている。

土坑 S K201は直径1.2m、検出面からの深さ0.2m前後で、埋土に多量の二枚貝の貝殻を含んでいる。S K203は長径0.9m、短径0.7mの楕円形で、深さは上部が後世の攪乱の影響を受けており、現状では深さ0.16mである。埋土中から中世の須恵器、土師器が出土した。

ピット 2基のピットを検出したが、建物等を構成するものであるかは、確認することはできなかった。



fig.49 S D01

3. まとめ

今回の調査では近世の真光寺の濠を中心に道路、河道等が『元禄兵庫津絵図』、『攝津名所図会』そのままで検出された。

特に真光寺の濠（S D01）は真光寺境内地の北東角の部分であり、今後の兵庫津全体の復原の上で基点となるものであると言える。また、『元禄兵庫津絵図』の中で場所が特定でき、絵図の正確性が立証された成果は大きなものである。しかし、出土した多量の遺物はまだ、水洗、復原作業が完了しておらず、構築の時期及び、石垣改修の時期の詳細な検討はこの作業の完了を待ちたい。

古地図等から、明治末期までは真光寺境内地を巡る濠が記載されており、濠としての機能が伺われる。昭和7年（1932）の地図では区画として確認できるが、道路になっていることから、この時期までには埋め戻され、道路になったものと考えられる。昭和35年（1960）の地図では、ほぼ現在の姿となっているため、最終的には戦後の区画整理の実施により、現在の状況になったものと考えられる。

『元禄兵庫津絵図』では畠地として表現されていた濠の外側に、町家が検出された点についても、『攝津名所図会』ではすでに町家が描かれており、寛政年間には宅地化していた事が絵図から伺われていたが、今回の調査により町家の存在が確認されたことから、近世後期～近代初頭にかけての真光寺境内周辺の状況も確認することができた。

下層からは平安時代を中心に、遺物包含層から古墳時代後期～中世の遺物が出土した。

第2造構面は東側が高く、6区では第1造構面と同一面であり砂丘状を呈するが、西側

は低く落ち込み、後背湿地の状況を呈していた。京都大学理学部
増田富士雄教授による現地調査の結果、南北に形成された砂嘴と西側に広がる後背湿地であるとの所見を得た。

今回の調査で、平安時代～中世頃の造構の存在が確認された事から、調査地周辺にも当該期の造構の存在が予想され、兵庫津遺跡の変遷、全体像を考察する上で貴重なデータを得ることができた。



fig.50 第2造構面平面図

9. 上沢遺跡 第45次調査

1. はじめに

上沢遺跡は、兵庫・長田両区にまたがる縄文時代から平安時代・中世におよぶ集落遺跡で、茹藪川が形成した標高約10mから20mの扇状地に立地している。

当遺跡における発掘調査では、弥生時代・古墳時代の遺構や奈良時代から平安時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑・自然流路などが検出されている。特に今回の調査地の東隣にあたる第44次調査では、古墳時代初頭から古墳時代中期にかけての堅穴住居が検出されている。また、南側の山手幹線歩道部分にあたる第8次調査では、中世・古墳時代・弥生時代後期・弥生時代前期の遺構が検出されている。

今回の調査は個人住宅兼事務所兼共同住宅建設に伴うもので、建物基礎により埋蔵文化財に影響をおよぼす部分についてのみ調査をおこなった。



fig.51
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序　当該地は北西から南東へ傾斜する地形で、北端ではほとんど現地表面直下で遺物包含層および遺構面が検出された。南側は、耕作地および宅地造成に伴い削平されており、段差が生じている。基本層序は盛土・暗茶褐色粘性砂質土・黒褐色砂質土・暗褐色砂質土・暗黃灰色砂である。

第1遺構面　北端部は削平が著しく、すでに古墳時代の遺物包含層があらわれていたが、中央部以南は中世の遺物包含層が残存する。第1遺構面は、遺物包含層を除去した後の黒褐色砂質土上面で検出した遺構面である。

遺構は、灰色砂質土を埋土とするピットや東西方向の斬溝状遺構、落ち込みなどが検出された。遺物は、土師器、須恵器、瓦器や瓦が出土している。

S×01　調査区中央部で検出した南北約4m、東西5m以上の方形の浅い落ち込みである。埋土は、上層が淡褐色砂質土で下層が灰色砂質土である。遺物は小片ながら、須恵器、土師器、瓦器、白磁などが比較的多く出土した。時期は、鎌倉時代と思われる。また、下層上面で牛と思われる獸足痕を検出している。

第2遺構面　暗褐色砂質土上面で検出した遺構面である。茶褐色砂質土は、北側では削平されて存在しない。遺物包含層からは土師器を主体として、須恵器・弥生土器、土鍤、馬齒やサヌカイトなどが出土している。遺構面の時期は、弥生時代後期から古墳時代、奈良・平安時代

にかけてと思われる。遺構は、北端部で黒褐色土を埋土とするピットや土坑、中央部で暗灰色土を埋土とするピットなどのほか、溝を検出した。

S D02 調査区東半で検出した北西端南東方向の溝である。南北端とも調査区外にのびる。幅約0.4m、深さ約0.4mで、断面V字形を呈し、緩く蛇行する。埋土は、上層が黒褐色粘性砂質土で、下層が暗褐色砂質土である。埋土上層から、甕や高杯など、弥生時代後期の遺物が出土している。

S K07 調査区北半西端で検出した柱穴である。辺0.74×0.6m、深さ0.3mを測り、北西側に柱痕を確認した。土師器と柱材と思われる木片が出土している。

この他、比較的明瞭な柱穴を何基か検出しており、掘立柱建物が存在したものと思われるが、復元には至っていない。

第3遺構面 暗黄灰色砂上面で検出した遺構面である。土坑、ピット、溝などを検出した。ただし、南半では第2遺構面で検出しきれなかった遺構も若干存在する。遺物は、弥生土器やサヌカイトなどが出土しており、弥生時代前期の遺構面と思われる。

S D04 東西方向の溝である。幅0.2m、深さ0.15mを測る。弥生土器が出土している。

S K10 直径0.8~0.88m、深さ0.24mを測る。弥生土器が比較的まとまって出土している。

S K11 直径1.4m前後、深さ0.3mを測る。埋土は褐色粘性砂質土で、弥生土器が出土している。

3.まとめ 今回の調査では、3面の遺構面を検出すことができた。各時期は既述のとおり、第1遺構面が中世、第2遺構面が弥生時代後期から奈良・平安時代、第3遺構面が弥生時代前期になると思われる。これは、隣接した調査地と同様の結果である。

遺構では、竪穴住居は確認できなかったが、ピット、土坑、溝などを検出した。第2遺構面のピットには掘形が比較的大きいものも存在しており、掘立柱建物が想定することができる。北東部で検出したピット群は、第44次調査で検出された掘立柱建物と関連するものであろう。また、S D02は第8次調査で検出された溝との関連がうかがえる。

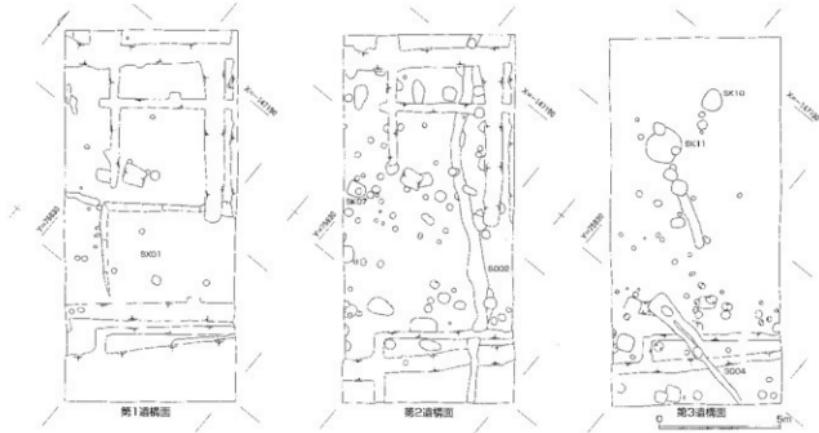


fig.52 遺構平面図

10. 御藏遺跡 第49次調査

1. はじめに

今回の調査区は、南北18m、東西16mで区画整理事業の換地に伴う事務所の建築によるものである。計画建物の影響深度の関係から、基礎部分で設計GL-1.1m、梁部分で同-0.8mまで調査した。



fig.53
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

調査地の基本層序は、地表より0.6mほどの表土・盛土の下に薄い旧耕土である灰黄色砂質土がみられ、さらに中世の遺物を含む旧耕土状の灰黄色土、奈良時代の遺物を多く含む暗灰褐色粘質土をへて平安～奈良時代の遺構面である黄褐色粘質土・暗褐黃色砂礫になる（第1遺構面）。さらに調査区の西側では、下層に暗灰黑色粘質土・灰黑色粘質土等の庄内期の遺物を含む層の堆積がみられその下で淡褐黃色粘土・淡青灰色シルトなどをベースとする庄内期の遺構面が存在する（第2遺構面）。

なお、調査地の南半分（II区）については、大半が既存の建物の基礎によって、地表より深さ1.2m以上の削平を受けており、遺構面は地中梁の部分など比較的の擾乱が浅かった部分に島状に残されているのみであった。

第1遺構面

第1遺構面は、古墳時代～平安時代の遺構面で擾乱による削平を受けていない部分の全面において確認された。掘立柱建物、溝、土坑およびピット等が検出された。

S B01

調査区の北隅において検出された掘立柱建物である。南辺2間分が検出された。建物は、調査区外北方へ拡がると思われる。柱掘形は、一辺0.7～1.2m程の楕円形に近い隅丸方形で深さは、0.2～0.4mである。

S D01

幅1.2～1.7m、深さ0.7mを測り、断面は大きく開くU字形を呈する。埋土の上～中層にかけて遺物を多く含むが、下層では粘土状の土が堆積し遺物を殆ど含まない。

S D05

幅0.9m、深さ0.35mをはかる。断面はU字形を呈する。

ピット群

直径0.2～0.4mほどの円形のピットを20基ほど検出された。調査範囲内においては、建物として確定できなかったが、明確な柱痕跡を伴うものも認められるため掘立柱建物が存在するものと考えられる。

第2遺構面 部分的に第2遺構面を検出した。検出された遺構は、不定形の落ち込みと井戸状の遺構である。

S X101 調査区を蛇行する溝状の落ち込みである。上層では東西2.5m、南北1.0mほどの範囲に遺物が集中する。

S E101 S X101の南に接する1.2×0.9mの楕円形の井戸状遺構で深さ0.7mを測る。上層から中層にかけて完形に近い土器が集中している。下層では細砂、粘土の堆積がみられ湧水が激しい。

3.まとめ 今回の調査は、南側の大半について搅乱を受けていたものの、それ以外の部分においては比較的多くの遺構を確認することができた。

第1遺構面においては掘立柱建物が確認された。またS D01やS D05などのように方向性をもった溝は、何らかの区画を意図するものと考えられ、大規模な掘立柱建物が存在する御蔵遺跡の性格を考えるうえで非常に興味深いものである。

さらに第2遺構面においては、庄内期の遺構面が確認された。S X101およびS E101からは多量の遺物が出土した。従来、御蔵遺跡においては、この時期の遺物は比較的多く確認されるものの、遺構面や遺構については不明確な場合が多かった。今回の調査は弥生時代末から古墳時代初頭の遺構の広がりを考える上においても重要な成果であるといえる。



fig.54 S X101

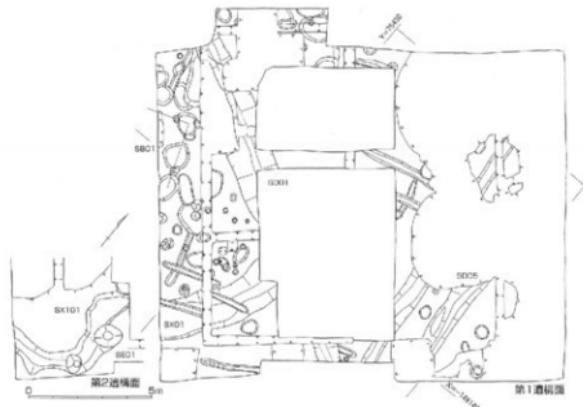


fig.55 遺構平面図

11. 水笠遺跡 第16次調査

1. はじめに

水笠遺跡は長田区のほぼ中央部、苅藻川右岸の沖積地に位置する集落遺跡である。過去の調査においては、弥生時代～近世の遺構、遺物が確認されている。

今回の調査は土地区画整理事業の街路工事（細田線拡幅工事）に伴うもので、縄文時代晚期～近世の遺構、遺物が確認された。



2. 調査の概要

基本層序

上層より盛土、2～4層の旧耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の下層上面が第1遺構面となる。第1遺構面のベース層を除去した層位面が第2遺構面となる。遺物包含層は0.05～0.2mの層厚で存在し、黒褐色系の土色である。概ね砂質を呈するが、東に行くほどシルト質が強くなる。第1遺構面のベース層は、砂質土層あるいは砂層で構成される所と、砂質系のシルトである。遺構面は現GL-0.3～-1.0mの範囲内で、西から東に下り傾斜になっている。

第1遺構面

全体的に遺構面の擾乱が著しく、検出された遺構は数少ない。小規模なピットや土坑状遺構などが數か所検出されたが、埋土中や遺構面を覆う遺物包含層中からの出土遺物も少なく、その時期、性格等の詳細は不明である。

幅約1.0m、深さ約0.3mの溝（SD01）が検出された。埋土中からの出土遺物は少なく、いずれも須恵器、土師器の小片であるが、それらに混じって綠釉陶器と考えられる皿が1点確認された。その形状から平安時代前期（9世紀後半頃）に属するものと考えられる。また、小規模なピットが約1間の間隔で直交するように並ぶが、東側が擾乱されており連続するピットは確認できなかった。

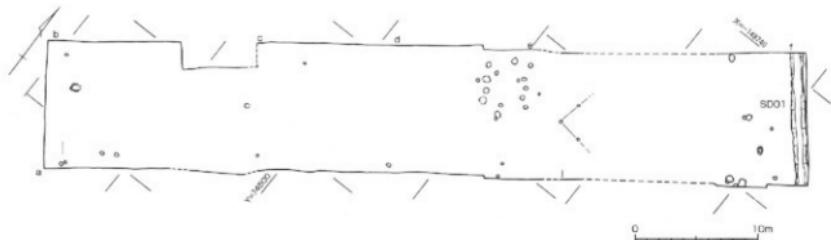


fig.57 造構平面図

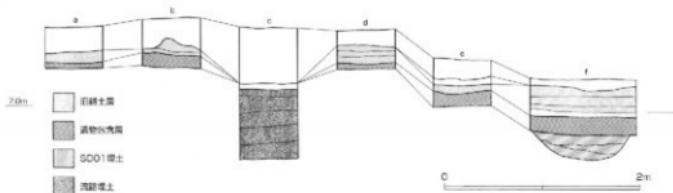


fig.58 調査区北壁土層断面柱状図

第2造構面 幅約4m、深さが検出面より約0.8mを測り、北西から南東方向にはしる流路を検出した。埋土中より縄文時代晩期～弥生時代前期に属すると考えられる土器の小片とサヌカイトの剥片が数点出土した。

3.まとめ

今回の調査における成果は、調査地の多くが擾乱されていることもあるって、造構、遺物共に乏しい。過去の調査で検出された造構は、今回の調査の第1造構面に相当する造構面のものであるが、弥生時代後期～平安時代と時期幅も大きく、今回のように造構内や遺物包含層からの出土遺物がほとんどない状況では、造構の時期、性格を検証することもやや難しい。その中に唯一時期が判明できそうのがSD01である。ただし、先述の通り縄文陶器の皿が1点出土しているものの、それ以外の遺物が小片で少ないこと、周辺に造構も少なく、その時期も不明であることから、周辺調査（特に東側の水笠通2丁目地区）における資料の蓄積が全容解明の条件になるものと思われる。また、第2造構面で検出された流路より土器片やサヌカイト片が出土したことは、集落遺跡としての成立や様相を考える上で重要な成果と言えよう。

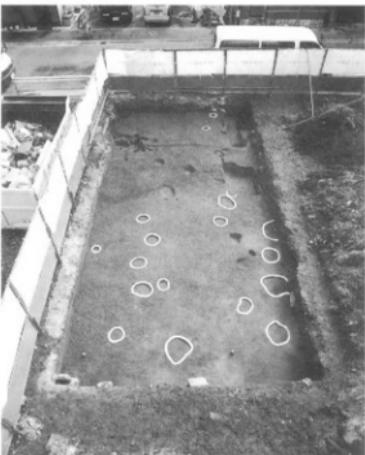


fig.59 ピット群

12. 松野遺跡 第27次調査

1. はじめに

松野遺跡は、妙法寺川と苅藻川によって形成された複合扇状地末端部から自然堤防帶に位置する。微地形的には北西方向から南東方向へ徐々に下がる緩斜面地で、標高約7mの細長い微高地上に立地する。

この遺跡は昭和56年に市営住宅建設に伴う発掘調査が行われて以来、20数次にわたる調査が実施されてきている。その結果、縄文時代晩期から弥生時代前期の流路、弥生時代の土坑、溝、古墳時代の掘立柱建物、堅穴住居、井戸、平安時代末から鎌倉時代初めのころの掘立柱建物、井戸、木棺墓などが検出された。



fig.60
調査地区位置図
1:2,500

2. 調査の概要

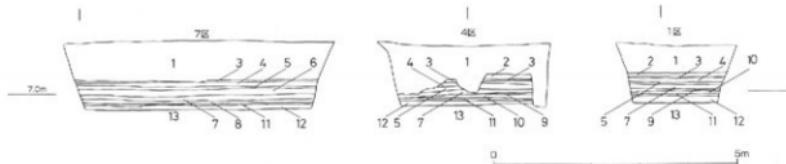
今回の調査は社屋建築に伴うもので、建築工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす基礎部分についてのみ発掘調査を実施した。なお、調査区は西北から1区～9区と設定した。

基本層序

基本層序は、盛土・耕土・床上・淡褐色灰色砂・灰色シルト・黒褐色粘性シルト（遺物包含層）・灰黄色シルトである。遺物包含層の厚さは10～15cmで、遺構面は西側の1区では標高6.76m、東側の9区では標高6.61mを測る。部分的に遺物包含層上面で、中世以降の耕作痕を検出した。

2区

ピット状の遺構5基と浅い土坑状落ち込み、そして幅0.2m、深さ0.1mの細い溝を検出した。埋土はいずれも黒褐色粘質土である。南隅の落ち込みからは古墳時代の須恵器、土師器が出上している。



1. 泥土 2. 耕土 3. 薄土 4. 灰色粘質砂 5. 淡褐色灰色砂 6. 淡灰色砂 7. 淡灰色粘性砂
8. 黑褐色粘性シルト 9. 淡灰色シルト 10. 黑褐色シルト質粘土 11. 灰色粘土
12. 黑褐色粘性シルト（遺物包含層） 13. 灰黄色シルト

fig.61 調査区西壁土層断面図

- 3区 ピット（S P06）を1基のみ検出した。直径0.3m、深さ0.35mで、埋土は黒褐色粘質土である。古墳時代の須恵器片が1点出土している。
- 5区 幅0.9m、深さ0.3mの北西—南東方向の溝（S D02）を検出した。埋土は上層が黒褐色シルト、下層が暗褐色シルトである。2区南隅で検出した落ち込みにつながると思われる。遺物は古墳時代の土師器が出土している。
- 6区 ピットと溝を検出した。ピット（S P19）は直径0.4m、深さ0.5mで、埋土は柱痕部分が淡黒色粘性シルト、掘形部分が黒褐色～暗褐色シルトである。ピット上面の柱痕にあたる位置から古墳時代の須恵器环身が出土し、その内部から滑石製臼玉が3点出土した。
- 9区 南東隅で幅0.2m、深さ0.05mの浅い溝を検出した。
- 3.まとめ 今回の調査では、堅穴住居や建物の確認には至らなかったが古墳時代のピットと溝を検出することができた。4区や7区でもピットを検出したが、そのほとんどは浅く不明瞭なものである。対して3・5・6・9区など東側の調査区では、比較的遺物量も多く明瞭な遺構も検出できた。当該地は松野遺跡の西端に近い部分であり、西側に行くほど遺構・遺物は稀薄になっていくようである。5区で検出したSD02は、第5次調査のSD206に形状が類似しており、関連性がうかがえる。さらに、ある一時期の集落を区画する溝である可能性も考えられる。

遺物は、包含層から古墳時代の須恵器、土師器が出土したが、多くは小片であり時期も決定しがたい。しかし、SP19出土の須恵器や周辺の調査結果から、包含層の遺物も古墳時代中期末～後期前半とみて大差ないものと思われる。その他、滑石製臼玉や土錘、砥石が出土した。

fig.62 遺構平面図

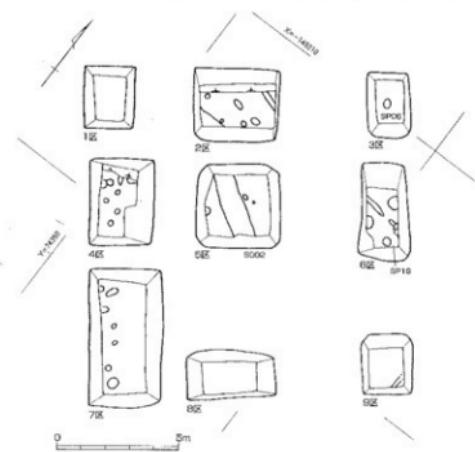
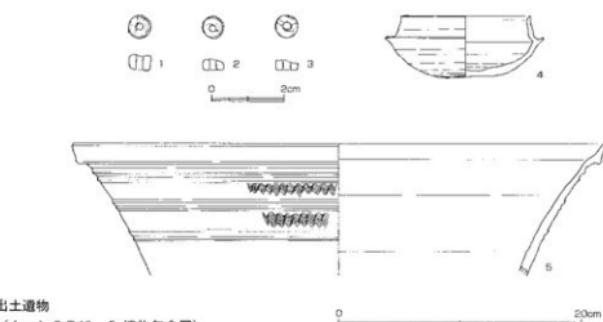


fig.63 出土遺物



(1~4: S P19 5:遺物包含層)

13. 松野遺跡 第28次調査

1. はじめに

松野遺跡は旧摂津国の西部、雄伴郡（のち八部郡）、六甲山系の南、茹藻川右岸の沖積地に位置する。これまでの27次にわたる発掘調査の結果、縄文時代晚期から近世にいたるまでの遺構・遺物が確認されている。特に昭和56年、道路をはさんで今回の調査地の南に接する地点で行われた第1次調査において、古墳時代後期の豪族居宅と推定される建物遺構が確認され、松野遺跡の名を有名なものにしている。

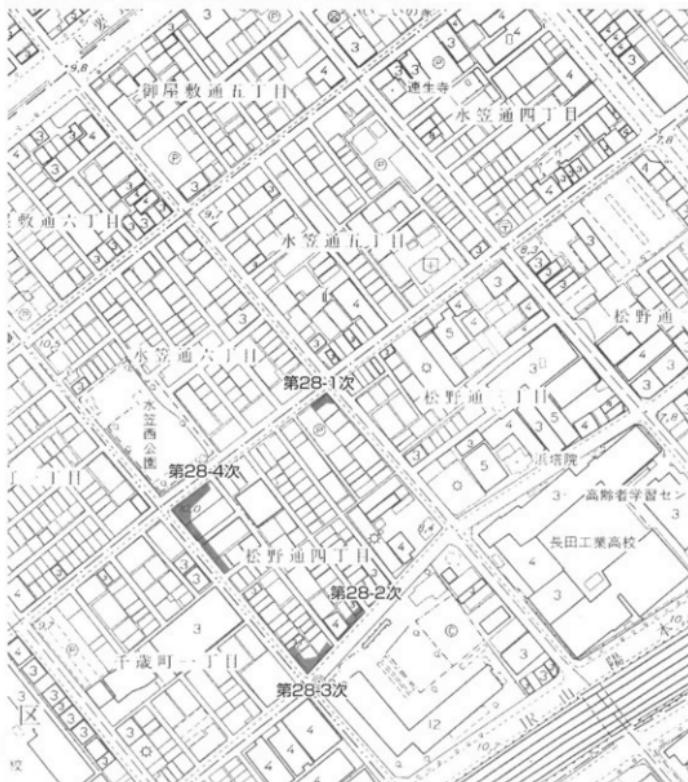


fig.64
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は阪神淡路大震災の復興事業に伴う土地整理事業に先立つもので、松野通4丁目の4地点についてこれを行った。調査の結果、1面あるいは2面の遺構面が確認され、第1遺構面では近世の遺構および中世の耕作地が、第2遺構面では古墳時代と弥生時代の遺構が検出された。また第2遺構面のベースとなる洪水砂4c層からは弥生時代と縄文時代晚期の遺物が少量出土した地点がある。

第28-1次調査 松野通4丁目街区の北隅に位置する調査区。既存建物の建設による擾乱を受け、遺構面は約1m²を残し遺存していない。この1m²では遺構が確認されなかった。遺物の出土もない。現況地表の標高は9.2m、遺構面の標高8.5mをはかる。

第28-2次調査 層序は現代盛土の下層が3～5層の旧耕土層となっており、その下層に遺物包含層（黒褐色粘砂土=第28-3・4次調査の4a層）が存在する。この遺物包含層の下層上面が遺構面となる。この遺構面以下については、遺物を包含する層位は確認されなかった。現地表の標高は約9.5m、第2遺構面の標高は8.25mである。

遺構 検出された遺構は、溝（SD01～03）の他、ピット、落ち込みなどで、いずれも規模としては小さい。出土遺物も少なく、その性格等の詳細は不明である。

遺物 遺物包含層から弥生時代後期～古墳時代後期の土器片が出土しているが、その大半が弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属するものである。遺構内からの出土遺物は量的には少なく、小片であるため詳細は不明であるが、概ね弥生時代後期後半～古墳時代初頭の範囲に入るものと考えられる。

第28-3次調査 調査区は松野通4丁目街区の西辺中ほど、居宅が確認された地点の北側に位置する。

基本層序 2面の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。

現地表（1a層上面）：約9.2m

第1遺構面（4a層上面）：約8.6m

第2遺構面（4a層下面）：約8.5m

第1遺構面 洪水砂である3c層に覆われる遺構面。耕作痕が検出された。

耕作痕 調査区の西の街路方向は真北から西に約39°振るが、これに平行する溝が多数検出された。鍔溝等の耕作痕と考えられ、3c層の出土遺物から中世の畠と推測される。

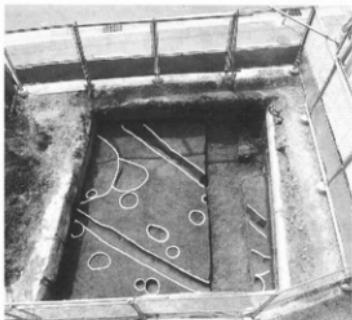


fig.65 第28-2次全景



fig.66 第28-3次第2遺構面平面図

- 第2造構面** 古墳時代後期・前期の遺物を主体に含む4a層下面で検出。古墳時代前期の土器溜まり・土坑・溝・耕作溝・柱穴、弥生時代中期の自然流路、時期不明の掘立柱建物・柱穴等が検出された。
- S X02** 調査区南隅付近で検出された土器溜まり。調査地外に範囲が拡がるため、全体の広がりは確認できないが、北西-南東方向で約2.5mの範囲に土器が集中して出土した。
- S K01** 調査区南隅付近で検出された0.9×0.55mのプラン隅円方形を呈する土坑。造構確認面からの深さは約0.6m。埋土からは少量の古式土器片が出土したにとどまる。
- S D01** 調査区の東半南部で確認された溝状の造構。幅約1.0m、造構確認面からの深さ約0.4mをはかり、真東から北へ5°振った方向にのびる。埋土から古墳時代初頭の上器が出土している。
- S D03~**
- S D05** 調査区南隅で検出された並行する3本の溝状造構。真北から10°東へ振った方向にのびる。幅0.3~0.4m、溝の横断面は皿形で造構確認面からの深さ約0.05mをはかる。S D03・04間で約1.4m、S D04・05間で約1.2mの間隔がある。同様の造構は同じ長田区の御藏遺跡第31次調査などでも確認されており、耕作に関わる造構と推測される。
- 柱穴** 並行して行われた第31次調査の分と合わせ、60基程の柱穴が検出されている。そのうちS B01と第31次調査分にある杭列S A01・02を造構としてのまとまりとして把握できた。出土した遺物は古墳時代前期のものと後期のものがあり、少なくとも2時期の造構があると思われるが、埋土はとともに4a層に近い黒褐色土で区別できない。
- S B01** 調査区東隅で検出された南北2間・東西1間以上の掘立柱建物。真北から西へ53°振った方向に主軸方向をとる。その東が調査区の外にのびるために東西の規模については確定できない。出土遺物は土器の小片のみで、この建物の帰属する時期は確定できない。

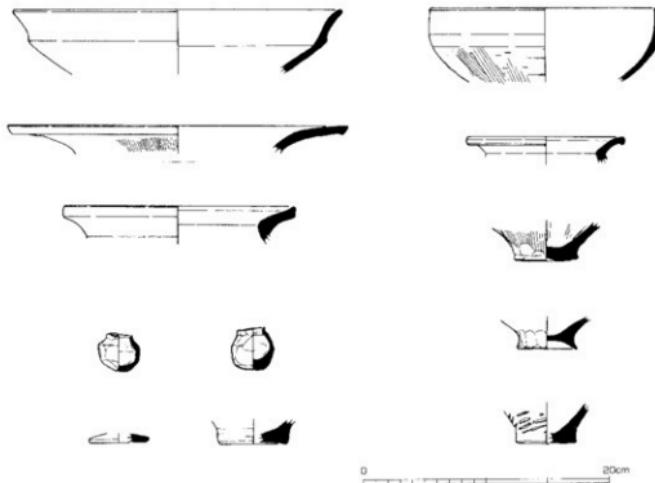


fig.67 第28-3次出土遺物

S R01 調査区西隅で検出された溝あるいは自然流路と考えられる遺構。東西方向にのび、幅約1.9m、遺構確認面からの深さ約0.2mをはかる。埋土から少量の弥生土器片とともにミニチュアの壺形土器2個が出土している。

第28-4次調査 調査区は松野通4丁目街区の西隅に位置する。

基本層序 2枚の遺構面が確認された。それぞれの標高は以下の通りである。

現地表(1a層上面) : 約9.6~9.9m

第1遺構面(4a層上面) : 約9.1~9.2m

第2遺構面(4a層下面) : 約9.0~9.2m

第1遺構面 中世までの土器・陶磁器類などを含む洪水砂層3c層に覆われる遺構面。明初の中国銭「洪武通宝」がこの面の検出時に出土し、溝・耕作痕・牛蹄跡などの遺構が検出された。近世以降の井戸あるいは水溜め状の遺構であるSK02は3c層の上から掘り込まれる。

調査区北半はベースとなる4a層が削平されて存在せず、第1遺構面・第2遺構面が同一面で検出される。



fig.68 第28-4次第2遺構面平面図



fig.69 第28-4次第2遺構面

S K02 調査区北部で検出された直径1.3mのプラン円形の枠が据えられた井戸あるいは水溜め状の遺構。枠板自体は抜かれて残らないが、これを締めたタガ2条が遺存していた。遺構確認面からの深さ約0.5mをはかる。掘形の直径は1.6mで、北西側に方形に張り出す部分がある。掘形の埋土から近世の陶磁器片が須恵器片とともに出土している。

溝 S D01は調査区の南部で検出された幅約0.7m、遺構確認面からの深さ約0.15mを測る溝で、真北から43°西に振った方向へ直線的にのびる。埋土である洪水砂からは中世までの遺物が出土したが、細片がほとんどであり時期の特定は困難である。

S D01にはほぼ直交する方向に並行してのびる溝であるS D02～07には底面に偶蹄目、おそらく牛の蹄跡が密集している。特に遺構面の土が粘土である部分での残りが良く、溝周辺にも蹄跡が集中して確認された。

S D08はS D02～07と2mほどの間隔をおいてそれらに並行する溝で調査区の西端付近で南方向に屈曲する。S D09はS D08に切られる溝状遺構で、ほぼ同様の方向にのび、埋土も同質である。S D08の掘りなおしがS D09であると推測される。

これらの溝は現況の地割りとほぼ一致しており、条里の区画に関係する遺構であると推測される。

耕作痕 4a層の残る部分で確認できた鋤溝状の溝。S D01に平行する。

第2遺構面 調査区の南部では4a層が残り、この下面で検出される。北部は4a層が削平され、第1遺構面と同一面で検出される。この面で確認される遺構は、古墳時代後期のものと古墳時代前期のものがあるが、ともに埋土は4a層の暗褐色シルト交じり粘土を基調とするもので両者の弁別はできない。堅穴住居・土坑・溝等の遺構が検出された。

S B01 調査区北寄りで検出されたプラン方形の遺構。真北から西へ33°振った方向に主軸をもち、南西辺の長さ4.4m、遺構確認面からの深さ約0.2mをはかる。遺構の一部、南西部を確認しただけで柱穴等も確認できていないが、プラン・構造等から堅穴住居であると推定した。掘形内に0.1mほど粘土を貼り、床面を整形しているが、これが貼床であるのかベッド状遺構になるのかは判断できない。

埋土からは少量の土器片が出土しただけで、時期の判断に苦しむが、遺構検出面で須恵器片が出土しており、古墳時代後期の遺構である可能性が高い。貼床内からの出土遺物は土器小片がごく少量であり、時期の判断には耐えない。

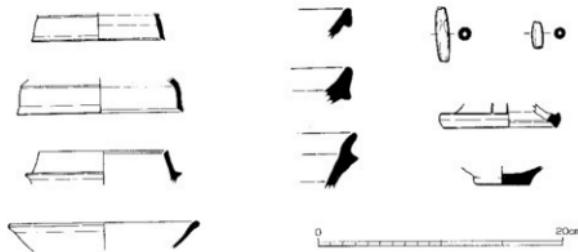


fig.70 第28-4次出土遺物

S D10 S B01の南西側にある弧状の溝。長さ約8.0m、幅約0.4m、遺構確認面からの深さ0.1m程度を測る。遺物の出土はなく、時期も判断できない。

柱穴 30基以上を確認したが、掘立柱建物等として把握できるものはなかった。出土遺物から古墳時代後期のものと古墳時代前期のものがあることが確認できる。

3.まとめ 第2遺構面は弥生時代中期・弥生時代後期後半～古墳時代初頭・古墳時代後期の遺物・遺構が確認できるが、遺構埋土からは三者を弁別できない。先述のとおり対応する遺物包含層から出土する遺物のうち主体となるのは弥生時代後期後半～古墳時代初頭のもので、時期の判断できる遺構もこの時期のものが多い。

今回報告した調査地は柵で囲われた6世紀初頭頃の居宅と推定されている建物群が検出された第1次調査（1981年度）地の北側に位置する。居宅との関連で注目される古墳時代後期の遺構・遺物についてみると、居宅にすぐ隣接する第28-2・3次調査地点の遺物包含層から出土した遺物は須恵器片が少量のみとごく少ない。

ただし、第28-3次調査と同時に発掘の行われた第31次調査地点には、第1次調査で検出された柱列=柵ないし柵にはほぼ平行する柱列S A01・S A02が存在する。時代判定に耐える遺物の出土がなく、埋土からの判別もできず、規模等も1次調査で確認されているものと比較にならない点など不安はあるが、この周辺では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構、特に溝等は方位方向にはほぼ合致するものが多いという傾向がありそうで、これと異なる方向であり、居宅関連の遺構とこの柱列の方向が一致することは、特に居宅の区画ということを考えた場合、注目される遺構となるだろう。

震災復興に伴うこれまでの発掘調査で、松野遺跡について判明してきた部分がある。一つは居宅と南の集落の標高には差があり、わずかとはいえ居宅は一段高い立地を占めているということである。そしてもう一つは遺物包含層のかなり削平されている状況が判明しているものの、居宅の南には当該期の集落が存在するに対し、その隣接地および北側には当該期の遺構は皆無といってよいほど存在しないという状況である。

一般の集落構成員が山の手に顔を向ければ一段高いところに首長の居宅があり、逆に居宅から村の衆の暮らしを見渡せるという立地は集落の中心となる首長の居宅という性格からすれば当然のことであろう。

また居宅にごく隣接して一般の集落が立地することも考えにくいで、その周間に遺構の空白地帯があるのも当然のことだろう。ある程度の遺構空白地帯をおいてその外側に同時期の集落の存在する可能性が考えられる。第28-4次調査で確認された堅穴住居がそうであれば、ここまでが遺構の空白地帯で、居宅からみてその外側に集落の存在が予想できるかもしれない。

試掘調査などの結果により、今回の調査地の北側は2街区離れた北側にある戎町遺跡との間の遺跡空白地区としてこれまで推定されていた。しかし、今回の調査地ではその北部で堅穴住居が確認されており、その埋土も4a層と共通するものであるにもかかわらず、遺物包含層である4a層はほとんど遺存していない状況、すなわち遺物包含層の削平のあったことが明らかになった。遺跡範囲が北に広がり、北の戎町遺跡と接する可能性も考慮されるだろう。

14. 松野遺跡 第32次調査

1. はじめに

区画街路築造工事に先立ち埋蔵文化財の調査を実施した。南側の区画街路予定地は当初幅6m、総延長29mのL字形で調査を実施する予定であったが、北側の幅6m、長さ約9m、東側の長さ約7mについては地下鉄工事の際に掘削が行われ既に消滅しているため街路の南西隅55mについて調査を実施した。(第32-1次調査) 北側の調査地は幅6m、長さ30mである。(第32-2次調査)



2. 調査の概要

第32-1次調査

層序は、大別して上層より盛土、旧耕土、古墳時代後期の遺物包含層である暗灰褐色砂質シルト・黒褐色シルト、そして遺構面である暗灰黄色砂質シルトとなる。現地表面から約1.1mで検出された遺構面である。溝3条、ピット、土坑が確認された。

溝

S D01は、幅約3.0m、深さ約0.8mを測り、溝の基底は平らで、断面形状は逆台形を呈している。溝埋土の下層は、黒灰色系のシルトが堆積していて、水が流れる際濁んでいたことが判る。上層の埋土は周辺の土が徐々に流入し堆積して埋まったことが断面観察で判る。なお、この上層の埋土から弥生時代後期頃の土器が少量出土している。

S D02は、S D01と並行に流れ、幅約1.8m、深さ約0.65mを測る。溝の断面形状はU字形を呈している。S D03は、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。S D02・03ともに遺物は出土していない。

ピット

約0.2mのピットを数基検出した。S D01が埋まっていた後掘られたものと考えられる。

下層

この遺構面の下層に黒灰色砂混じりシルトが堆積しているため、遺物・遺構の検出を試みたが、確認できなかった。

第32-2次調査

層序は第32-1次調査同様、大別して上層より盛土、旧耕土、古墳時代後期の遺物包含層である黒褐色シルト、そして遺構面である暗灰黄色砂質シルトとなる。

基本層序

遺構

現地表面から遺構面までの深さは、調査区北側で約0.8m、南側で約1.0mである。溝2条、ピット、土坑が確認された。

S D04

調査区の南側を南北方向に流れる溝である。第32-1次調査で検出したS D01の続きを考

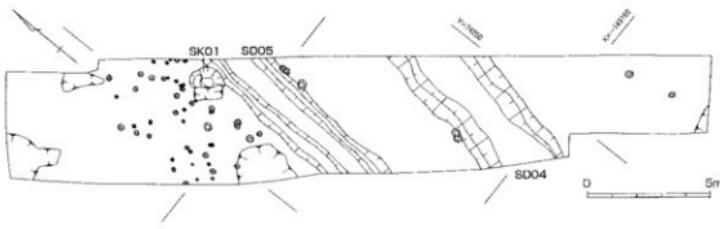


fig.72 第32-2次遺構平面図

えられ、幅3.0~3.2m、深さ約0.8mを測る。溝の基底はSD01同様平らで、断面形状は逆台形を呈している。この溝の上層から弥生時代中期頃の土器が少量出土している。

SD05 第32-1次調査で検出したSD02の続きを考慮され、SD05と並行に南北方向に流れている。幅0.9~1.0m、深さ約0.5mを測る。溝の基底は平らで、断面形状は逆台形に近い形をしている。溝内からの遺物の出土はなかった。

SK01 調査区の中央北寄りで検出された土坑である。最大幅約1.45m、深さ約0.4mを測る。土坑内からの遺物の出土はなかった。SD05を切っていることから後出である。

ピット SD05の北側で0.15~0.3m程のピットを無数検出した。ピットは散在しているため建物としてのまとまりはない。遺物の出土はないが、一部これらの溝の上面で確認したピットもあるため溝が埋まつた後掘られたものと考えられる。

下層 第32-1次同様遺構面の下層に黒灰色砂混じりシルトが堆積しているため、遺物・遺構の検出を試みたが、確認できなかった。

3.まとめ 今回の調査地は松野遺跡の南西辺にあたり、近隣では過去に調査が行われていない区域である。昭和56年に松野遺跡第1次調査で古墳時代後期の豪族居館と推定される建物を確認した地点より西に60m離れた場所である。

調査で検出した溝は、2条の溝が並行して掘られていることが判った。そして、これらの溝は方位の方向と一致していることも注目される。SD01・SD04から少量であるが、弥生時代中期と後期の土器が出土している。出土量が極めて少ないと後世の混入も考えられるが、出土状況からしてこの2条の溝は弥生時代中期～後期にかけて同時に掘削され埋没したと考えたい。

今回同一面で溝とピット・土坑等を検出しているが、ピット・土坑・小溝は2条の溝が埋没した後に掘られたことが考えられる。遺構からの遺物の出土がなく時期の決め手に欠けるが、遺物包含層の時期が古墳時代後期の土器を含んでいることから、これらの遺構は古墳時代後期頃のものと推察される。

周辺の調査で弥生時代の遺構を確認しているが、散発的で実態がよく判っていない。今回の調査で2条の大溝を検出したことにより、この溝の続きを検出することによって今後松野遺跡の弥生時代の様相が明らかになってくると考えられる。

15. 二葉町遺跡 第15次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は長田区の南西部、苅藻川と妙法寺川に挟まれた沖積微高地上に位置する集落遺跡である。過去の周辺での調査において、縄文時代～近世の遺構、遺物が確認されており、特に中世に関しては、多大な成果を挙げている。

今回の調査は再開発ビル建設工事に伴うもので、中世～近世の遺構、縄文時代晚期～近世の遺物が確認された。

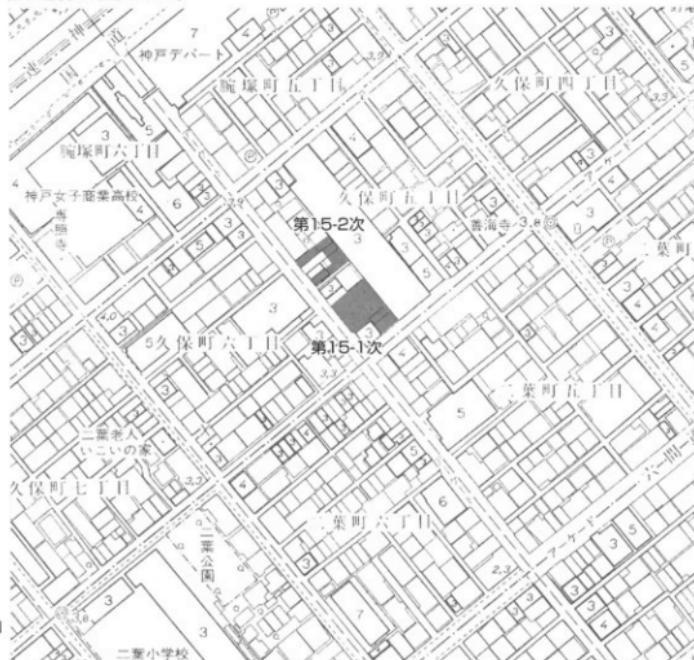


fig.73
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

第15-1次調査

基本層序

上層より現代盛土、2～3層の旧耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の下層上面が遺構面となる。遺物包含層は地区によって若干の土質の差がみられるが、概ね暗褐色の砂質系の土層である。遺構面のベースを形成している層位は、砂層、砂質土層または砂質系のシルト層である。遺構面までの深度は、北西から南東に向けてやや下り傾斜になっている。

遺構面の下層の状況については、砂層または砂質土層中より縄文時代晚期～弥生時代前期に属すると考えられる土器片とサヌカイトの剥片が数点出土した。しかしながら、遺構面になりうる層位面も確認できず、また、砂質土層自体も遺構埋土とは考え難いため、洪水砂状の堆積層中にこれらの遺物が含まれるものと思慮される。

遺構

近世木葉と考えられるS X01の他は、中世の範疇に入る遺構と考えられる。木棺墓（S T01）、井戸（S E01）、溝（S D01～05）、ピットなどの遺構が検出されたが、東側または南側へ行くほど希薄になる。

遺物はS E01の埋土内から出土したものが多く、その他の遺構や遺物包含層のものは少ない。遺物包含層からの出土遺物は11世紀後半～13世紀前半に属すると考えられるが、検出遺構もS X01以外は概ねこの時期に該当するものと推定される。

S X01

東西約6.0m、南北約6.5m、深さ約5.5mを測る掘形をもつ井戸で、中位以下に桶を4段分積み重ねた井戸側が遺存していた。出土遺物は極めて少なく、陶磁器片が数点とカツラを使用した漆器椀が1点出土したのみである。近世末期の所産と考えられる。

S T01

長辺約2.7m、短辺約0.8mを測る掘形をもつ木棺墓で、木棺は腐食により遺存しないが、土層の違いからその痕跡を確認した。また、深さが検出面より約0.1mと非常に浅く、上位部分が著しく削平されているようである。出土遺物は棺内、掘形共に少なく、詳細な時期比定は難しいが、11世紀後半～13世紀前半の範囲内に属する可能性が高い。

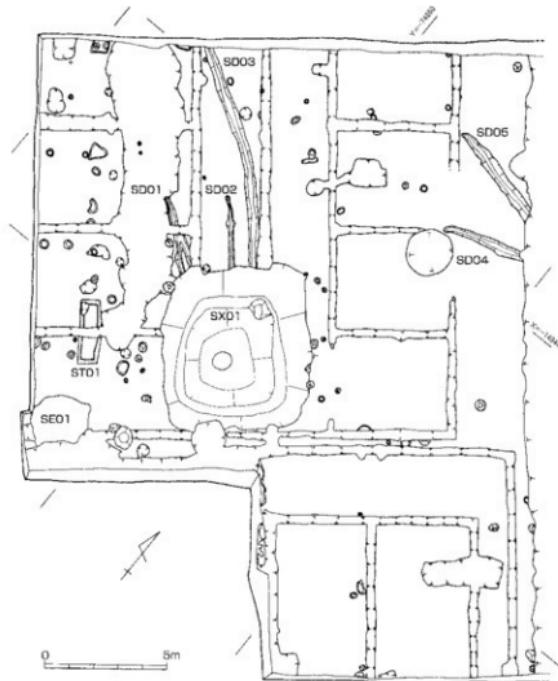


fig.74 第15-1次遺構平面図

- S D01～ 幅約0.15～0.5m、深さ約0.1～0.15mを測る小規模な溝で、攪乱や他の遺構によって大きく削りとられており、また、出土遺物も少なく、S D03で12世紀中頃に属すると考えられる須恵器片が1点確認された以外は、いずれも時期不詳の土師器、須恵器の小片であることから、それぞれの溝の性格等の検討は困難である。
- S P01 S D03の東側で検出された直径、深さ共に0.15m程度の小規模なビットである。11世紀後半頃に属すると考えられる“ての字状口縁”的土師器小皿が1点出土した。
- S E01 一辺約2.5mの隅丸方形状の掘形をもち、井戸側が縱板組隅柱横棟留構造に分類される井戸である。井戸底の水溜部分は曲物を3段組み上げており、検出面から水溜底までの深さは約4.4mを測る。井戸側部分の平面形は一辺約1mのほぼ正方形で、横棟は約0.7mの間隔で4段分遺存していた。この井戸の特徴的な点として、四隅の隅柱の下に柱を固定するための偏平な根石を据えていること、中位以下は掘形と井戸側との隙間がほとんどない点などが挙げられる。出土遺物は他の遺構と比較してやや多く、完形に近い上器も数点み

られる。器種としては、土師器・須恵器の皿、椀類が多く、少量ではあるが瓦器や白磁なども確認されている。その他、墨書き器や曲物桶などの木質遺物、砥石などもあわせて出土している。遺物の時期は、上層出土のもの、下層出土のものと共に12世紀中葉～後半に属するものと考えられる。

樹種同定の結果を概して記しておく。ほとんどの構成部材は複数の針葉樹材が用いられており、広葉樹材はごく一部の部材のみに用いられていた。過去の同遺跡における調査で検出された平安時代末葉～中世にかけての井戸は、部材に針葉樹材を多く用いる傾向があるようだが、井戸ごとに優占使用される樹種は異なるようである。今回の調査で検出されたS E01については、側材と板材はヒノキ、モミ属、スギ、割材はヒノキ、モミ属、横棟はヒノキ、スギが多く用いられており、隅柱はヒノキ、アカマツ、ツブラジイが用いられていた。また、水溜部分の曲物はヒノキであった。

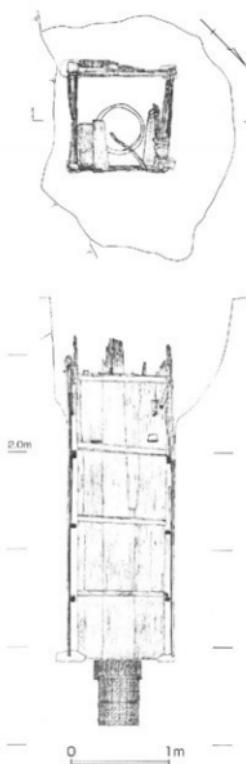


fig.75 S E01



fig.76 S E01

小結

今回の調査で検出された遺構は、概ね11世紀後半～13世紀前半の範囲内に属すると考えられるが、遺構埋土内からの出土遺物が少なく、時期を確定できたものはほとんどなかった。過去の調査成果から、平安時代後期～鎌倉時代前期の集落変遷を、遺構の配列などからⅠ期（11世紀中頃～12世紀前半）、Ⅱ期（12世紀中頃～12世紀後半）、Ⅲ期（13世紀前半～13世紀中頃）の3時期に区分しているが、今回の検出遺構もS X 01以外はいずれかの時期に該当するものと考えられ、同時期の集落の一端と扱う遺構であると断定できる。

過去の調査成果から中世当時の集落の特色として、井戸の多さが挙げられるが、今回の調査で検出されたS E 01は、その中でも最大規模に近いもので、出土遺物も他の遺構に比べて豊富で、一括性も高いため、良好な成果であると言えよう。このS E 01の最下層からの出土遺物は、先述と同様に12世紀中葉～後半に属すると考えられるが、出土土器の型式に時期差（12世紀中葉と後半）がみられることから、この井戸の存在（使用）時期（期間）を示している可能性をここでは消極的ながら指摘しておきたい。

今回の調査においては、検出遺構が比較的少なかったものの、集落の拡がりを確認できた点、比較的遺存の良好な井戸（S E 01）が検出された点などから同遺跡の全容を解明していく上で重要な資料が得られたように思われる。

第15-2次調査

久保町5丁目における平成13年度第2回の発掘調査は、約500m²について行われた。

今回の調査の結果、現在の地表面から約0.8m、標高約3.70m付近まで掘り下げた地点に遺構が存在することを確認した。遺構は、異なる3つの時期のものが、それぞれ異なる堆積層の上に残されたものである。

基本層序

調査区内には、現在の地表面から遺構の造られた層までの間に、現代の盛土、耕作土等が何層か時間順に堆積しており、耕作土の最も古い層（より下層）は、中世の時期まで遡るものと判明した。その耕作土のさらに下層が、地山層となる。

調査区内は、部分的に現代の建物の基礎工事によって上部の層が壊されており、基礎のコンクリートを取り除いたところ、すぐに考古学的堆積層が現れる部分もあった。遺構は、基本的に古い時期のものが下の層、新しい時期のものは上の層に重なり合っている状態で、

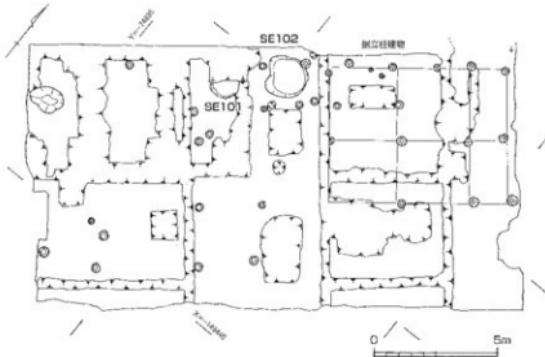


fig.77 第15-2次第1遺構面平面図

調査範囲の東側に集中して確認された。最も古い遺構は縄文時代晚期（約2,300年前）の小河川状の自然地形の痕跡である。その上位の層に13世紀（中世）頃のものである可能性が高いピット（小さな穴）、溝などが残されており、さらにその上に堆積していた層上には、今回確認した遺構の中で、最も新しい時期のものである掘立柱建物らしいピットの規則的な配列を確認した。

調査区の北東部分は、今回の調査区の中で最も基本的な層序が観察できる場所である。この場所で現在地表面となっているのは、現代の盛土である（第1層）。その下層には現代～近代の比較的新しい時期の耕作土層が、2層堆積している（第2・第3層）。それら新しい時期の耕作土を取り除き、標高約3.80m地点まで掘り下げると、中世の土器を多く出土する耕作土層が現れる。出土する土器から判断して、この層は中世の耕作土層であると考えられる。最も新しい時期の遺構は、この層の上面で確認された（第4層）。この層を取り除くと、標高3.7m地点で地山の層が現れるが、この地山層（第5層）上に、第2の時期の遺構が残されていた。

北東部分の層序に対して、南東部分では、現代の建物の基礎が広い範囲で地山を削って深く造られ、遺跡の損傷が著しかった。部分的に基礎が浅く、本来の堆積層が残った部分については、基礎を取り除いた標高3.5m地点で、粗砂層が現れる。

この粗砂層については、観察作業の結果、上記の北東部分の層序でいう第5層（地山層）を削るようにして堆積していることが判明したが、これはすなわち第5層より新しい時期に堆積したことを示すものである。このような粗砂層は、過去に行われた周辺の調査でも広い範囲でその存在が確認されており、その堆積の時期も縄文後期であることが、既済の調査の結果知られている（第6層）。この粗砂層上には、第3の時期、縄文時代晚期のものと思われる小河川状の地形と、それより新しい時期の遺構が互いに重なり合うような状態で残っているのを確認した。これは、本来二つの上下に重なった層の各上面に、時間差をもって築かれたものが、上の層が現代の工事によって失われたため、上位の遺構の深い部分が残り、より下層の遺構と同じ面上で重なり合うように残って見えたものと考えられる。

検出遺構

今回確認した遺構については、そのほとんどが調査区の北東、南東部分で見つかっている。それに対し、調査区西部では、遺構はほとんど発見されなかった。西の層序は、北東の層序に類似しているが、北東部分よりも近代～現代の耕作土層がさらに2層多く残っており（第7・第8層）、また北東部で第1の遺構が造られているのが確認された第4層と地山の第5層の間に、中世の土器を出土する耕作土層が残っていた（第9層）。



fig.78 第15-2次第1遺構面全景